平成12年度　四絡幼稚園改築事業に伴う

小山遺跡第３地点発掘調査報告書

（第４次発掘調査）

２００２．３

出雲市教育委員会

平成12年度　四絡幼稚園改築事業に伴う

小山遺跡第３地点発掘調査報告書

（第４次発掘調査）

２００２．３

出雲市教育委員会

調査区全景（右が北）

巻頭図版2

調査区東側と第3次調査区南側(右が北)

SD03遺物出土状況

SD03出土遺物

SK10出土遺物

SD05出土壺

SD03出土土製品

序

小山遺跡が所在する出雲市四絡地区は、矢野遺跡・大塚遺跡・姫原西遺跡など、出雲市でも有数の集落遺跡の密集地帯として知られています。近年の開発に伴って、発掘調査も増え、しだいに古代四絡地区の様相が明らかになりつつあります。

このたび、出雲市立四絡幼稚園改築事業に伴い、小山遺跡第３地点を発掘調査いたしました。その結果、弥生時代から古墳時代初頭にかけてと奈良・平安時代及び中世の遺構・遺物を検出しました。特に、古墳時代初頭に埋まった溝状遺構は、天神遺跡や古志本郷遺跡・下古志遺跡などでも確認された「環濠」と類似しており、貴重な発見と言えます。また、墨書土器が検出され、平成６年度（第１次）調査において確認された墨書土師器・ヘラ描き須恵器などと合わせ、古代の人々の暮らしぶりを伺い知るうえでの重要な資料となりました。

これらの成果が、今後の研究資料として広く活用され、歴史の解明と郷土の発展に寄与することを期待するとともに、発掘調査及び本書を発刊するにあたり、ご指導ご協力賜りました関係者のみなさまに心から御礼申し上げます。

平成14年（2002）３月

出雲市教育委員会
教育長　多　久　　博

例　言

1．　本書は、出雲市（建築課）より依頼を受け、出雲市教育委員会が、平成12年度に実施した、出雲市立四絡幼稚園改築事業に伴う、小山遺跡第３地点第４次発掘調査の報告書である。

2．　発掘調査地は次のとおりである。

小山遺跡第３地点（出雲市遺跡地図遺跡番号Ｇ04、地図番号10.11）

出雲市小山町652番地

3．　発掘調査は、平成12（2000）年11月６日に着手し、平成13（2001）年３月30日に終了した。

4．　調査組織は次のとおりである。

調 査 主 体　　出雲市教育委員会

事　務　局　　大田　茂（出雲市教育委員会　文化振興課課長）

調 査 指 導　　田中義昭（島根県文化財保護審議委員）

池淵俊一（島根県教育庁　文化財課　主事）

調査担当者　　園山　薫（出雲市教育委員会　文化振興課　嘱託員）

調査補助員　　糸賀伸文、勝部真紀、石橋弥生、宮崎　綾、伊藤めぐみ、（以上臨時職員）

5．　発掘調査、遺物整理、報告書作成においては、以下の方々の協力を得た

発掘調査　吾郷　栄、吾郷要子、板垣将信、大森長一郎、奥屋孝之、小玉周平、小室和子、高根常代、土肥源市、富田　勉、畑　守隆、福田益之、星野勝義、三原節夫、吉川幸男、吉田　栄、米原信夫、渡部正義

遺物整理　　飯國陽子、吹野初子、河井栄子、岩崎晶美

6．　出土遺物の実測は、上記調査員・調査補助員のほか、伊藤晶子、鬼村奈津子、片倉愛美、佐藤三鈴、瀧尻幸平が行った。

7．　本書に掲載した遺物写真の撮影は、園山が行った。また、Ｘ線写真撮影では、島根県埋蔵文化財調査センターの協力を得た。

8．　発掘調査、ならびに報告書作成に当たっては、以下の方々から有益な御指導・助言を頂いた。記して謝意を表したい。（敬称略）

松井　章（奈良国立文化財研究所）、平石　充（島根県立博物館）、錦田剛志（同）、松本岩雄（島根県埋蔵文化財調査センター）、西尾克己（同）、内田律雄（同）、中川　寧（同）、松尾充晶（同）、松山智弘（同）、飛田恵美子（島根大学生）

9．　石器の石材鑑定は羽木伸幸氏（社会福祉法人千鳥福祉会　嘱託員）にお願いした。

10．　挿図中の北は、磁北を指す。従って測量法による第Ⅲ座標系のＸ軸より、７°55″西の方向を指す。レベル高は海抜高を示す。

11．　本書で使用した遺構記号は以下のとおりである。

ＳＢ：掘立柱建物、ＳＡ：柱列、ＳＥ：井戸、ＳＫ：土坑、ＳＤ：溝、ＳＸ：不明遺構

12．　本書の執筆・編集は園山が行った。

13．　出土遺物及び実測図、写真等の記録は出雲市教育委員会において保管している。

本　文　目　次

巻頭図版
序
例　言
本文目次
挿図目次
図版目次

第１章　位置と環境 …… 1
第２章　調査の経緯 …… 3
第３章　調査の結果 …… 8
　第１節　調査の概要 …… 8
　第２節　遺構と遺物 …… 10
第４章　まとめ …… 81
　出土遺物観察表 …… 86

　図　版 …… 1～51

挿　図　目　次

第１図　小山遺跡第３地点周辺の遺跡分布図　2
第２図　小山遺跡第３地点調査配置図 …… 3
第３図　遺構配置図 …… 4・5
第４図　土層図 …… 6・7
第５図　土層図 …… 8
第６図　SI01実測図 …… 9
第７図　SI01出土遺物実測図 …… 10
第８図　SA01実測図 …… 11
第９図　SA02実測図 …… 11
第10図　SB01実測図 …… 12
第11図　SB02実測図 …… 13
第12図　SB03実測図 …… 14
第13図　SB03-P2出土遺物実測図 …… 14
第14図　SB04実測図 …… 15
第15図　主要ピット実測図 …… 16
第16図　P0422出土遺物実測図 …… 17
第17図　主要ピット実測図 …… 18
第18図　SE01実測図 …… 19
第19図　SE02実測図 …… 20
第20図　SE02出土遺物実測図 …… 21
第21図　SE03実測図 …… 21
第22図　SE04実測図 …… 22
第23図　SE04出土遺物実測図 …… 23
第24図　SE05実測図 …… 24
第25図　SE06実測図 …… 25
第26図　SX01実測図 …… 26
第27図　SX01出土遺物実測図 …… 26
第28図　SK01実測図 …… 27
第29図　SK02実測図 …… 27
第30図　SK03実測図 …… 28
第31図　SK03出土遺物実測図 …… 29
第32図　SK04実測図 …… 30
第33図　SK05・06実測図 …… 31
第34図　SK07実測図 …… 32
第35図　SK07出土遺物実測図 …… 32
第36図　SK08実測図 …… 33

第37図　SK09実測図 …… 34
第38図　SK09出土遺物実測図 …… 33
第39図　SK10実測図 …… 35
第40図　SK10出土遺物実測図１ …… 37
第41図　SK10出土遺物実測図２ …… 38
第42図　C11Gr土器溜り実測図 …… 39
第43図　C11Gr土器溜り出土遺物実測図１ … 41
第44図　C11Gr土器溜り出土遺物実測図２ … 42
第45図　C11Gr土器溜り出土遺物実測図３ … 43
第46図　C11Gr土器溜り出土遺物実測図４ … 44
第47図　A・B11Gr土器溜り実測図 …… 45
第48図　A・B11Gr土器溜り出土遺物実測図 … 46
第49図　SD01・02実測図 …… 47
第50図　SD01実測出土遺物図 …… 48
第51図　SD02実測出土遺物図 …… 48
第52図　SD03実測図 …… 50・51
第53図　SD03土層図 …… 52
第54図　SD03出土遺物実測図１ …… 53
第55図　SD03出土遺物図実測２ …… 54
第56図　SD03出土遺物実測図３ …… 55
第57図　SD03出土遺物実測図４ …… 56
第58図　SD03出土遺物実測図５ …… 57
第59図　SD03出土遺物実測図６ …… 58
第60図　SD03出土遺物実測図７ …… 59
第61図　SD04実測図 …… 62・63
第62図　SD04土層図 …… 64
第63図　SD04出土遺物実測図１ …… 65
第64図　SD04出土遺物実測図２ …… 66
第65図　SD05・06実測図 …… 67
第66図　SD05出土遺物実測図２ …… 68
第67図　SD07実測図 …… 69
第68図　SD08・09実測図 …… 70
第69図　SD10実測図 …… 71
第70図　SD11・12実測図 …… 72
第71図　SD08・10・12出土遺物実測図…… 73
第72図　SD13実測図 …… 74
第73図　SD13出土遺物実測図 …… 75
第74図　SD14実測図 …… 76
第75図　SD16実測図 …… 77
第76図　遺構外出土遺物実測図１ …… 78
第77図　遺構外出土遺物実測図２ …… 79
第78図　遺構外出土遺物実測図３ …… 80
第79図　小山遺跡遺構変遷図…… 82
第80図　小山第３地点遺跡遺構配置図…… 83

図　　版

巻頭図版１　調査区全景
巻頭図版２　調査区東側と第３次調査区南側
（右が北）
ＳＤ０３遺物出土状況
巻頭図版３　ＳＤ０３出土遺物
ＳＫ１０出土遺物
巻頭図版４　ＳＤ０５出土壺
ＳＤ０３出土土製品
図版１　調査前状況（東側）南から
調査状況
（第３次調査区から第４次調査区を望む）
図版２　ＳＩ０１調査状況（東から）
ＳＩ０１（北から）
ＳＢ０１（南から）
図版３　ＳＢ０２検出状況（南から）
ＳＢ０２ピット土層断面
ＳＢ０２（南から）
図版４　Ｐ０５１５遺物出土状況
ＳＥ０１遺物出土状況
ＳＥ０２
図版５　ＳＥ０３
ＳＥ０４土層断面
ＳＥ０４（南から）
図版６　ＳＥ０５（北から）
ＳＥ０５中央ピット内遺物出土状況
ＳＥ０６（南から）
図版７　ＳＸ０１遺物出土状況
ＳＸ０１遺物出土状況（接写）
ＳＸ０１（東から）
図版８　ＳＫ０３遺物出土状況（北から）
ＳＫ０３遺物出土状況（接写）
ＳＫ０３（北から）
図版９　ＳＫ０５・０６（南から）
ＳＫ０７（南から）
ＳＫ０８（南から）
図版10　ＳＫ１０遺物出土状況　（東から）
ＳＫ１０（東から）
図版11　Ｃ11Ｇｒ土器溜り遺物出土状況
Ａ・Ｂ11Ｇｒ土器溜り遺物出土状況
（東から）
図版12　ＳＤ０２・０１（南から）
ＳＤ０３検出状況（南から）
図版13　ＳＤ０３遺物出土状況（南から）
ＳＤ０３遺物出土状況（北から）
図版14　ＳＤ０３遺物出土状況（接写）
ＳＤ０３遺物出土状況（接写）
ＳＤ０３遺物出土状況（接写）
図版15　ＳＤ０３調査状況（南から）
ＳＤ０３下層遺物出土状況（南から）
ＳＤ０３土層断面（南から）
図版16　ＳＤ０３Ａ－Ａ′土層断面（中央部）
ＳＤ０３（南から）
図版17　ＳＤ０３・Ａ．Ｂ11Ｇｒ土器溜り
調査状況（東から）
調査区から北を望む
図版18　ＳＤ０４検出状況（南から）
ＳＤ０４遺物出土状況（北から）
図版19　ＳＤ０４土層断面（南から）
ＳＤ０４（北から）
図版20　ＳＤ０５検出状況（北から）
ＳＤ０５遺物出土状況
図版21　ＳＤ０５（北から）
ＳＤ０９・０８（南から）
ＳＤ１０遺物出土状況
図版22　ＳＤ１１・１２（北から）
ＳＤ１３遺物出土状況
ＳＤ１２・１６（北から）
図版23　ＳＩ０１出土遺物
図版23　Ｐ０４２２出土遺物
Ｐ０２０２出土遺物
図版24　主要ピット出土遺物
ＳＥ０１・０２・０４出土遺物
図版25　ＳＸ０１出土遺物
ＳＫ０３・０９出土遺物
ＳＫ０３出土遺物

ＳＫ０７出土遺物
図版26　ＳＫ０７出土遺物
ＳＫ１０出土遺物
図版27　ＳＫ１０出土遺物
図版28　ＳＫ１０出土遺物
図版29　Ｃ11Ｇｒ土器溜り出土遺物
図版30　Ｃ11Ｇｒ土器溜り出土遺物
図版31　Ｃ11Ｇｒ土器溜り出土遺物
図版32　Ｃ11Ｇｒ土器溜り出土遺物
Ａ・Ｂ11Ｇｒ土器溜り出土遺物
図版33　Ａ・Ｂ11Ｇｒ土器溜り出土遺物
ＳＤ０３出土遺物
ＳＤ０３出土遺物
図版34　ＳＤ０３出土遺物
図版35　ＳＤ０３出土遺物
図版36　ＳＤ０３出土遺物
図版37　ＳＤ０３出土遺物
ＳＢ０３－Ｐ２出土遺物
図版38　ＳＤ０３出土遺物
図版39　ＳＤ０３出土遺物
図版40　ＳＤ０３出土遺物
図版41　ＳＤ０３出土遺物
図版42　ＳＤ０３出土遺物
図版43　ＳＤ０４出土遺物
図版44　ＳＤ０４出土遺物
図版45　ＳＤ０４出土遺物
ＳＤ１０出土遺物
図版46　ＳＤ１３出土遺物
ＳＤ０５出土遺物
図版46　ＳＸ０１出土古銭
図版47　遺構外出土遺物
図版48　遺構外出土遺物
図版49　遺構外出土遺物
図版50　遺構外出土遺物
図版51　ＳＤ０１・０２出土遺物
鉄製品Ｘ写真

第１章　位置と環境

小山遺跡は、出雲市中心部の北側に隣接する四絡地区に所在する。同地区は、近年ますます都市化が進み、発掘調査も急増してきている。小山遺跡は、弥生時代の拠点集落として知られる矢野遺跡や、大塚遺跡、姫原西遺跡、蔵小路西遺跡などとともに、「四絡遺跡群」を形成する遺跡のひとつである。

「四絡遺跡群」の中核となる矢野遺跡は、縄文時代後・晩期から始まる集落遺跡で、矢野第３地点では弥生時代後期に吉備地方から搬入された特殊土器などが発見されている。小山遺跡は矢野遺跡に付随して弥生時代中期中葉から造営されてきた。

本調査地は、出雲考古学研究会の調査により地点分けされた小山遺跡第３地点にあたる[1]。旧神戸川の下流域に形成された自然堤防上に立置しており、小山遺跡の北東部分にあたる。旧河道の右岸に形成された微高地上に発展した遺跡である。東は大塚遺跡に接し、旧河道の左岸に小山遺跡第１．第２地点を見る。本遺跡ではこれまでの調査で、弥生時代から奈良・平安時代にかけての集落遺跡であることが分かっている。

縄文時代、「神門の水海」と呼ばれた潟湖の縁辺部に集落が出現し始め、後・晩期になって、矢野遺跡や蔵少路西遺跡・善行寺遺跡など、平野の中心部でも本格的に発展してくる。縄文時代後・晩期の遺跡からは、弥生時代前期の遺物が出土しており、連続して遺跡が存続していたことが窺える。

弥生時代中期以降、矢野遺跡をはじめ平野部の集落は急増し、天神遺跡・古志本郷遺跡・下古志遺跡などの拠点集落の出現を見る。小山遺跡第３地点では、平成９年度の調査（第２次）で、弥生時代中期後葉から後期前葉の「環濠」と思われる溝状遺構が確認されている[2]。後期後半に至って、出雲平野を見下ろす西谷丘陵に四隅突出型墳丘墓が築かれるほどの発展を見るが、終末期から古墳時代初頭にかけて、ほとんどの遺跡は終息してしまう。その原因は未だ解明されていない。古墳時代前期の平野中心部は空白期であり、山持川川岸遺跡・浅柄遺跡など縁辺部でわずかに遺跡が確認されるのみである。古墳も北山山麓に大寺古墳、神西湖東岸に山地古墳などが築かれる程度に過ぎない。これは、畿内中央政府との関係が影響しているものと考えられる。

古墳時代中・後期になると、平野部の集落も徐々に再興していき、出雲地方最大の前方後円墳である今市大念寺古墳や上塩冶築山古墳などの大型古墳が築かれるようになり、終末期には上塩冶横穴墓に代表される横穴墓が多数分布するようになる。

律令時代、平野の各地で遺跡が確認されている。古志本郷遺跡では近年の調査で、「神門の郡家」に比定される建物跡が発見されている。平野の西には、当時西流していた斐伊川と神戸川による「神門水海」が広がっており、奈良時代に編纂された『出雲国風土記』によると、本遺跡付近は「神門郡八野郷」に比定されている。平成６年度の調査（第１次）で、墨書土器やヘラ描き土器が確認され、同書記載の「矢野郷庁」との関連も指摘されている[3]。

中世に至って、蔵少路西遺跡からは12～15世紀の朝山氏の居館跡と考えられる遺構が確認され[4]、また、矢野遺跡では14～15世紀の屋敷跡が確認されており、四絡地区は中世以降も繁栄してたようである。

第1図　小山遺跡第3地点周辺の遺跡分布図

第２章　調査の経緯

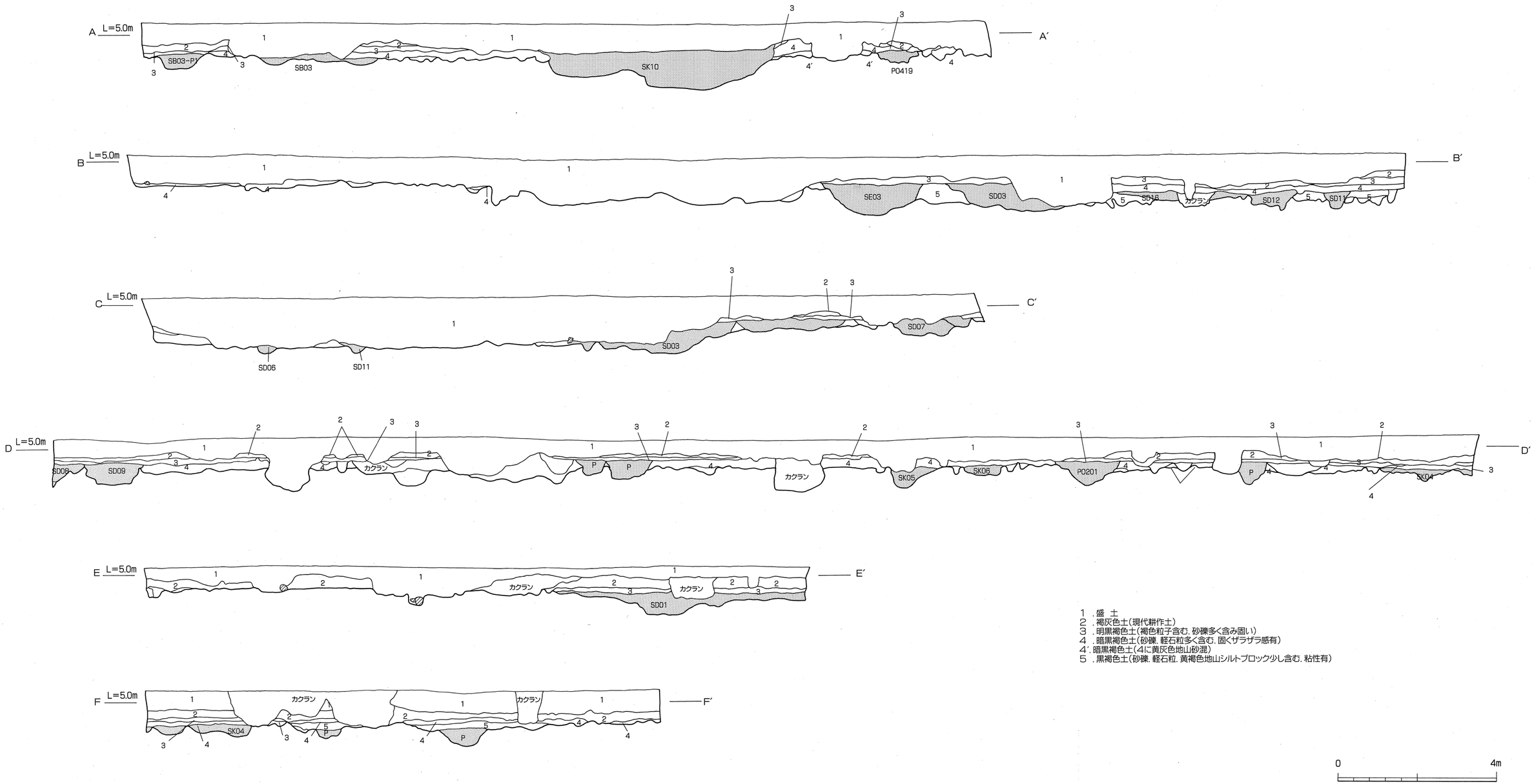
平成12年（2000）３月17日付で、出雲市長（建築課）より、出雲市立四絡幼稚園改築事業による新園舎建設予定地内の埋蔵文化財試掘調査の依頼があった。事業予定地は周知の遺跡である小山遺跡第３地点の範囲内であり、平成６年度、平成９年度の発掘調査において、当予定地周辺が埋蔵文化財包蔵地であることが確認されている。調査対象となる新園舎建設予定地は1,200㎡である。ただし、新園舎は既存の園舎跡地での建て替えであるため、建築課と協議し、園舎南の園庭に仮園舎を建設し、その後既存園舎を解体するため、調査は10月以降に実施することになった。平成12年（2000）11月６日より　出雲市教育委員会が調査を実施し、平成13年３月30日に終了した。

なお、本調査地の北20ｍでは、市道四絡30号外１線道路改良工事に伴う発掘調査が年度始めより実施されており、平成12年末より平成13年始めにかけて並行して調査が行われた。これにより、本工事予定地内の発掘調査は終了し、島根県教育委員会と協議の上で、工事着手の運びとなった。

なお、平成13年度も出土遺物の整理作業を継続し、平成14年（2002）3月に本書を発刊するに至っている。

第2図　小山遺跡第3地点調査配置図(S=1:2,500)

第3図　遺構配置図(S=1:200)



1．盛　土
2．褐灰色土(現代耕作土)
3．明黒褐色土(褐色粒子含む，砂礫多く含み固い)
4．暗黒褐色土(砂礫，軽石粒多く含む，固くザラザラ感有)
4′．暗黒褐色土(4に黄灰色地山砂混)
5．黒褐色土(砂礫，軽石粒，黄褐色地山シルトブロック少し含む，粘性有)

0　4m

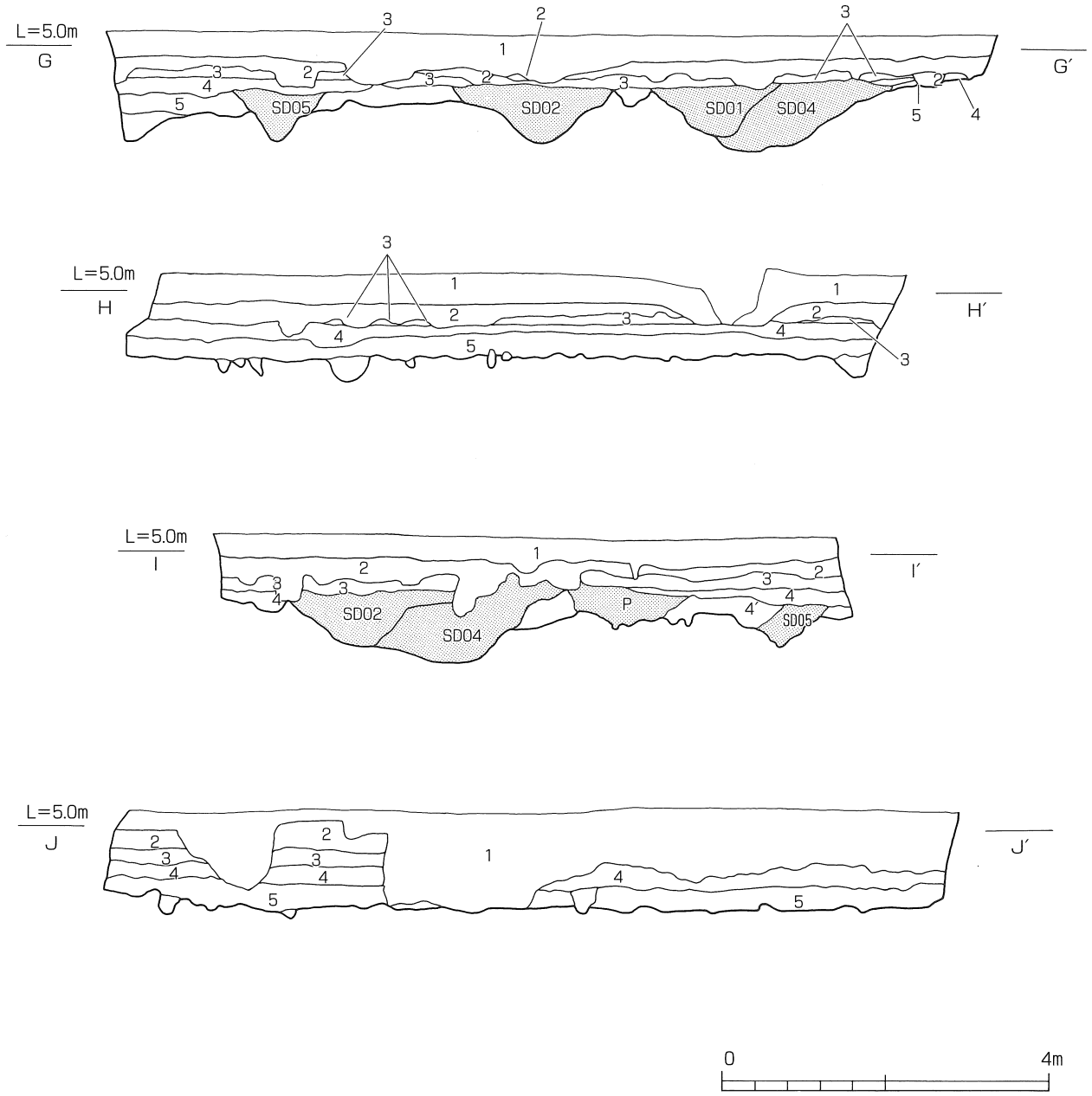
第4図　土層図(S=1:80)

第３章　調査の結果

第１節　調査の概要（第３～５図）

本調査区は四絡幼稚園新園舎の建設予定地で、調査面積は約1200㎡である。建物の形に添った長方形の調査範囲で、東西の長さ65m、南北幅は14m～27mに至る。表土を重機により約80㎝掘り下げた後、遺物包含層を徐々により下げながら遺構検出に努めた。

本調査地は四絡幼稚園の園舎が建っていた場所であるため、建物の基礎やこれまでの建て替え、建て増し工事により、遺構面が攪乱により破壊されている箇所が多数確認された。そのため、遺構の形状やつながりが正確につかめないと言う弊害が出ている。にもかかわらず、多数の溝状遺構・井戸・土坑・掘立柱建物跡・ピット等を検出した。

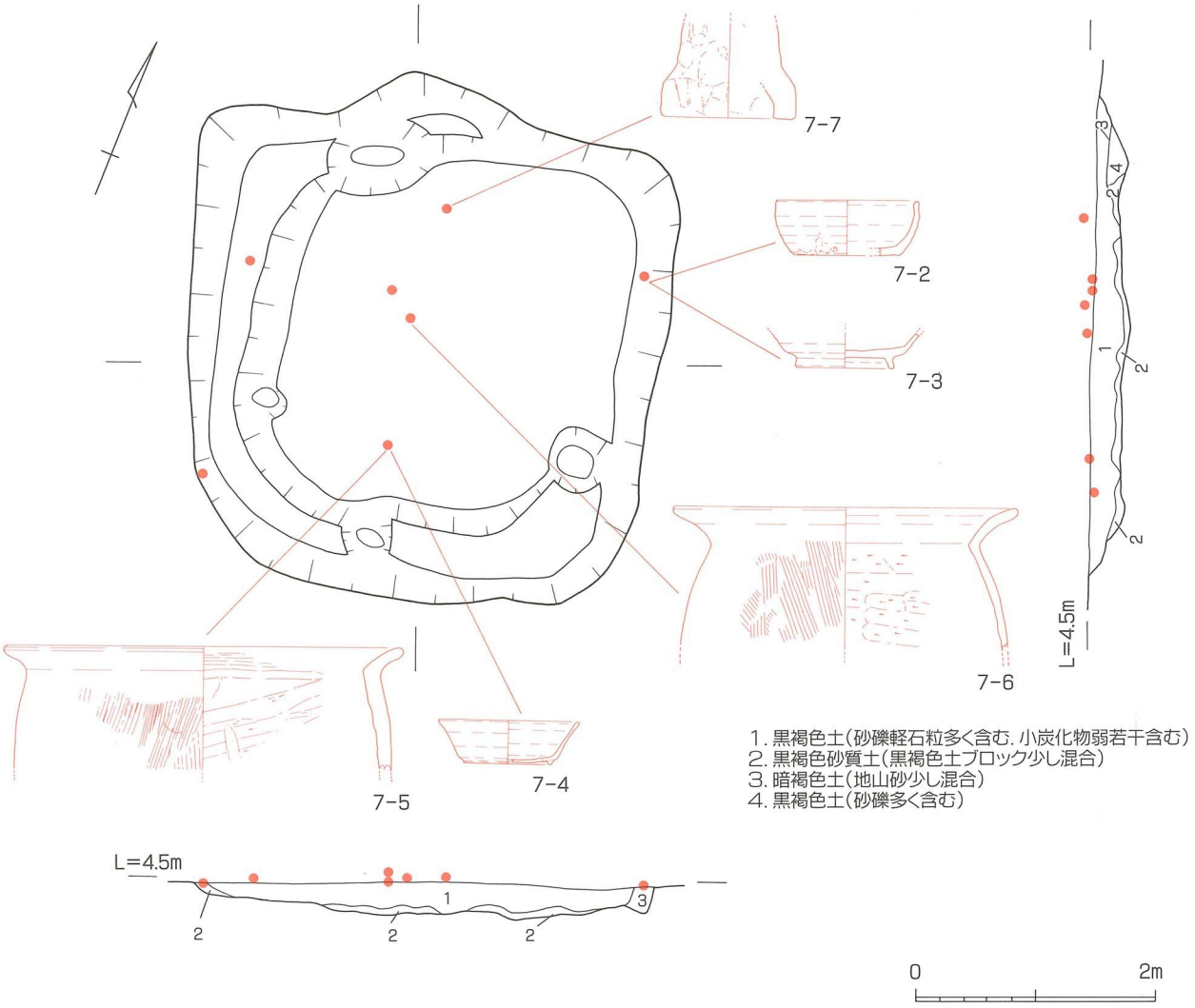


第5図　土層図(S=1:80)

２．３層は中世以降の旧耕作土と考えられる。４層は奈良・平安時代の遺物を出土する包含層である。４′層、５層が地山上に堆積している。５層からは弥生時代終末から古墳時代初頭の遺物が出土している。この５層は、調査区の東側、10.. 11グリッドで深く堆積している。この範囲で土器溜まりを検出しており、ＳＤ０３とＳＤ０４の間で、地山も落ち込んでいる。

調査区の西側では５層の堆積は見られなくなり、弥生時代から古墳時代の遺構も無くなる。古墳時代前期前葉の浅い溝状遺構（ＳＤ１３）と土坑（ＳＫ０３）を検出したのみである。そして、ＳＫ１０などの奈良・平安時代の遺構が多数検出されるようになる。これは、標高が関係しているものと考えられる。標高の高い部分は、４層下面で一様に削平されていることが土層の観察から窺える。古い時代の遺構は削り取られてしまった可能性がある。

標高4.5～4.2mで地山に至る。地山は中央より東側が黄褐色シルトで、西側が黄灰色砂である。第１次調査区でも、西側は砂層になっており、第１次調査区の西南に位置する第２次調査区においては全面砂層であったことを考えると、南西方向から北東方向に地山は堆積していったものと考えられ、これは南東から北西方向に流れる旧河道の流路に関係するものと考えられる。地山のレベルは、東側と中央部がもっとも高く（標高約4.5m）、西側に向かってやや下っている。



第6図　SI01実測図(S=1:60)

東側では遺物包含層から弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての遺物が多く出土しており、古墳時代前期前葉に埋まった「環濠」と思われる２条の溝状遺構（ＳＤ０３．０４）を検出した。

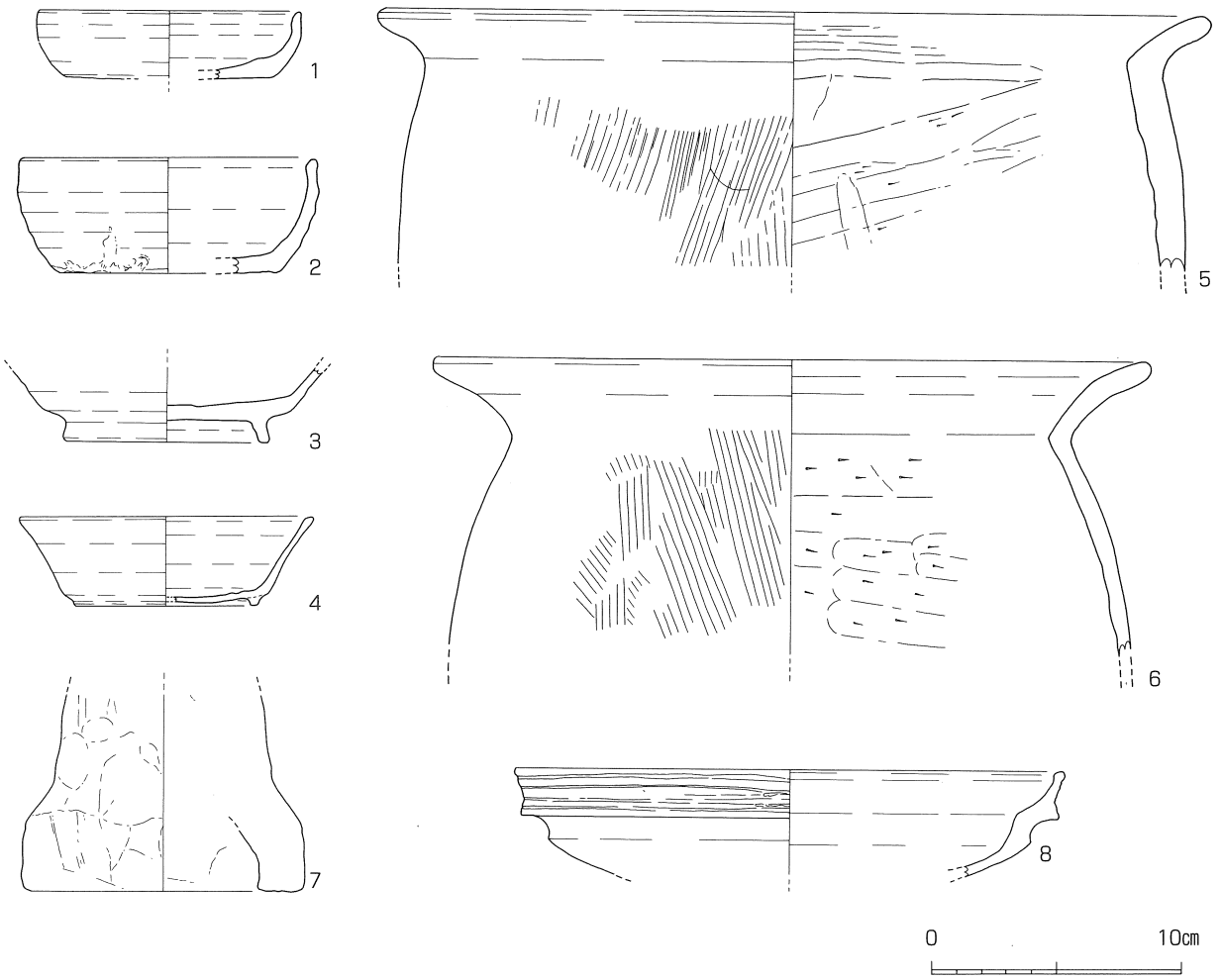
第２節　遺構と遺物

１．竪穴建物跡（第６図）

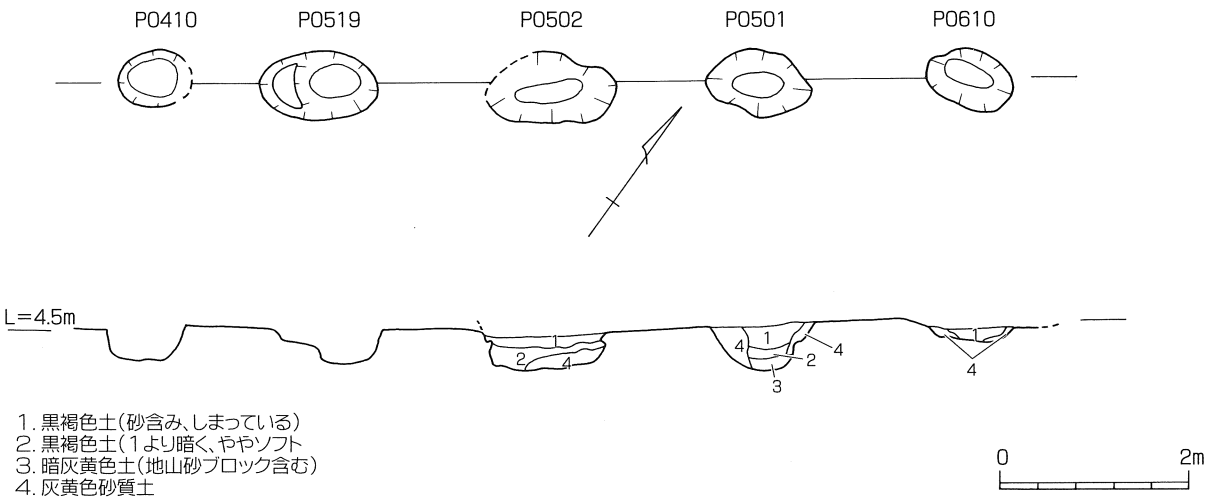
ＳＩ０１（第６図）

ＳＢ０２のピットを切る形で検出した遺構である。１辺が3.9～4.3mの隅丸方形プランを呈す。深さは25cmと浅く、竪穴住居跡と考えられるが、断定はし難い。明確に柱穴と分かるピットは見られない。南北を軸とした場合、Ｎ－14°－Ｗを指向する。後述するＳＢ０１．０２とは10°西に軸がずれており、時期的には一致しないものと思われる。ＳＢ０２のピットの一部を切ることから、ＳＢ０２より新しいと考えられる。

覆土からは須恵器と土師器の破片がわずかに出土するのみである。図化できた出土遺物はいずれも上面・上層からの出土であり、遺構の時期を決定する資料には成り得ない。しかし、ＳＤ１０の東側



第7図　SI01出土遺物実測図(S=1:3)



第8図　SA01実測図(S=1:80)

にあるＳＢ０４と軸が合致することから、２つの建物は同時期と考えられる。

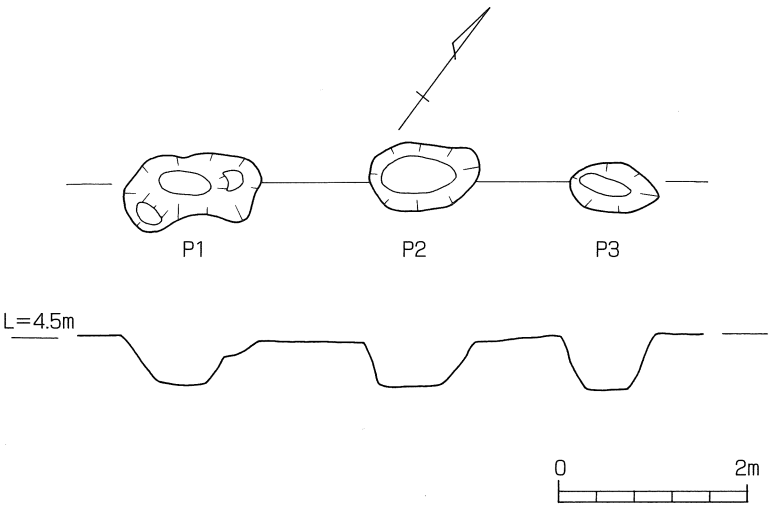
出土遺物（第７図）　１．２は須恵器の坏である。体部は内湾して立ち上がり、口縁を丸く収める。１は器高2.7cmとやや低い。いずれも底部は回転糸切りで、２はハケによるナデが残る。８世紀後半に比定される。３は須恵器の坏または壺の底部で、高台を持つ。４は貼付け高台の土師器坏である。全体に薄作りで内外面とも赤色塗彩が施される。５．６は土師器の甕である。５は口径33.2cmを測る大型品で、器壁が厚く体部は張らずに下りる。外面に荒い刷毛目、口縁内面にヨコ刷毛目調整される。６は逆「ハ」の字状に口縁が外反し、体部はやや張る。ともに奈良・平安時代の所産と考えられる。７は土製支脚の脚部である。下部はヘラ削り、上部はナデにより調整される。８は弥生時代後期前葉の高坏口縁部で、混入遺物と考えられる。口縁には４条の沈線が施され、体部外面の調整はミガキである。不鮮明ながら一部赤色塗彩の痕が認められる。

２．柱列（第８・９図）

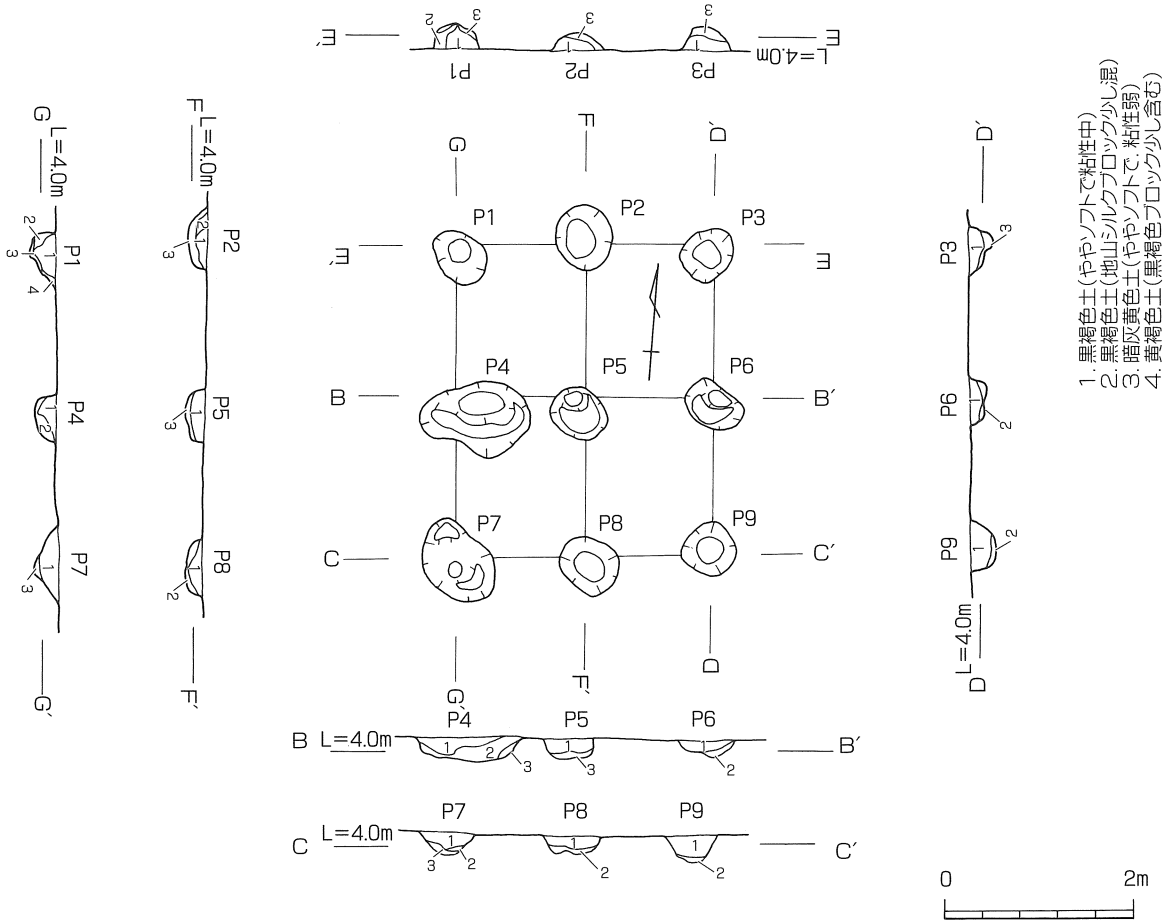
ＳＡ０１（第８図）

Ｃ４．５Ｇｒで検出した５穴のピット列である。柱穴は長径0.8～1.4m、短径0.6～0.8mの楕円形を呈し、深さ20～50cmを測る。約2.2m間隔で９ｍの長さに至るが、対応するピットが北・南になく、単独の柱列とした。方向としては、ＳＤ０８．０９に直行する形になり、Ｎ－55°－Ｅを指向する。

遺物は図化し得なかったが、弥生土器・土師器・須恵器の破片が



第9図　SA02実測図(S=1:80)



第10図　SB01実測図(S=1:80)

わずかに出土している。

ＳＡ０２（第９図）

Ａ８Ｇｒで検出した３穴からなる柱穴列で、ＳＤ０３とＳＤ０８．０９の間に位置する。Ｎ－55°－Ｅを指向し、ＳＡ０１と軸を同じくする。軸上で8.7mＳＡ０１より南に位置する。ＳＤ０８．０９に直行する形になる。Ｐ２はＳＤ０７を掘り込んでいることから、ＳＤ０７より新しいと思われる。ピットはＳＡ０１と同様な楕円形プランを呈し、長径0.9～1.5m、短径0.5～0.7m、深さ約50cmを測る。柱間はＳＡ０１と同じ2.2mで、対応するピットは見られないため、柱列とした。

並列して走るＳＤ０８．０９を区画溝とすると、ＳＡ０１．０２はそれに併せて計画性を持って作られた塀、または、柵と考えられる。ただし、同様の軸になる掘立柱建物等は検出されなかった。

３．掘立柱建物（第10～12図）

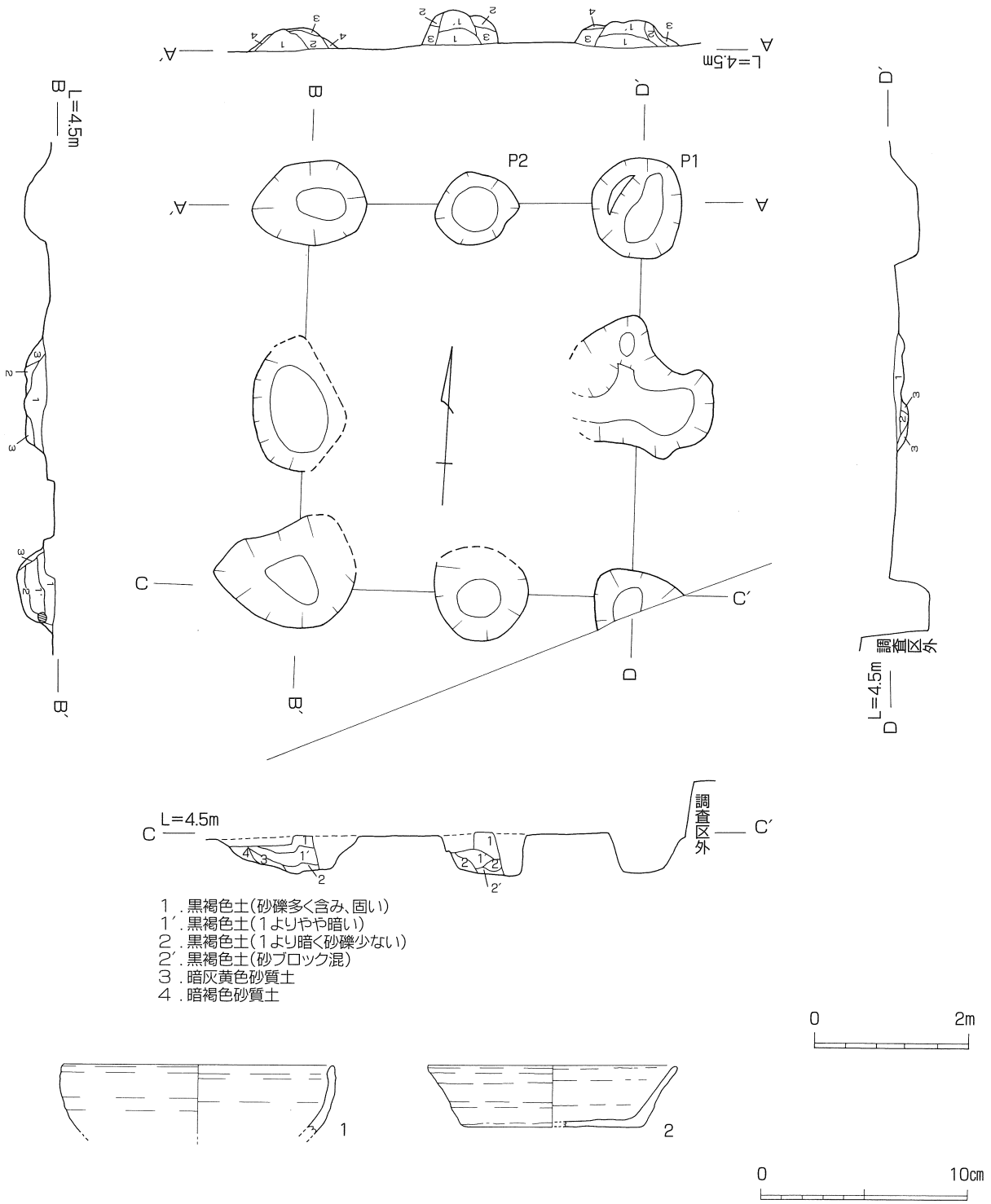
ＳＢ０１（第10図）

Ｃ１１グリッドで検出した、２間×２間の総柱の掘立柱建物である。径50～70cmの不整円形のピットで、土器溜りを検出した包含層を掘り込んでいる。南北方向が1.65m・東西方向が1.3mの柱間を測り、平面の規模は約8.6㎡になる。南北を棟軸とした場合、Ｎ－４°－Ｗを指向する。

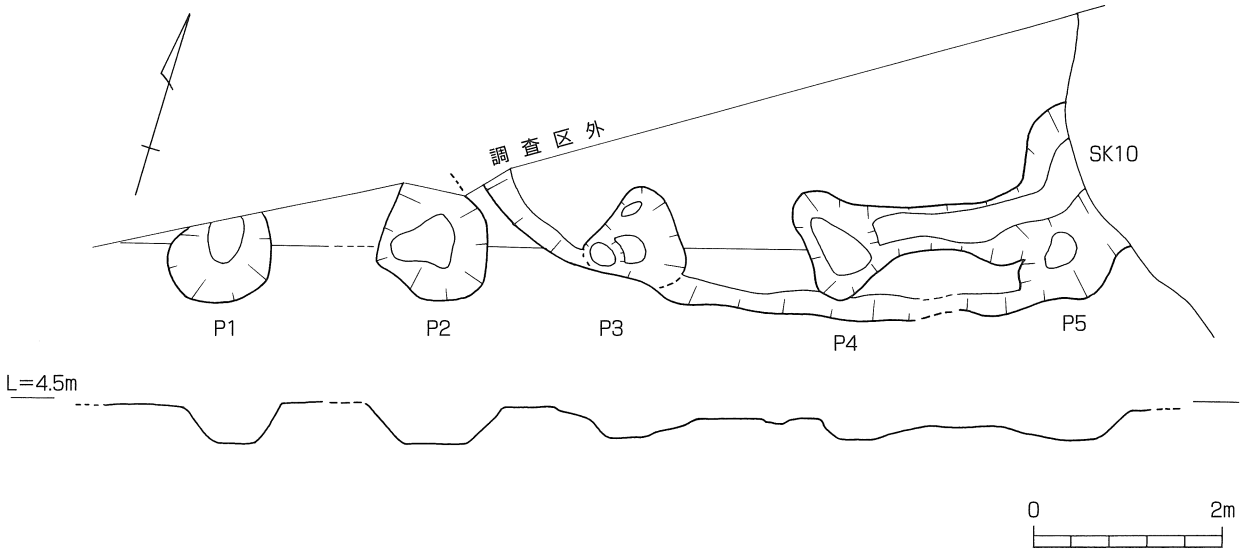
遺物がほとんどなく時期は決定しがたいが、後述する掘立柱建物ＳＢ０２と同軸に建っていることからほぼ同時代の建物と考えられる。

ＳＢ０２（第11図）

調査区の西側で検出した掘立柱建物である。径0.9～1.4mのやや大きなピットで、深さは30～50cmを測る。柱間は南北方向が2.5m、東西方向が2.2mで、２間×２間の規模（約22㎡）になるが、南の



第11図　SB02実測図（遺構 S=1:80　遺物 S=1:3）



第12図　SB03実測図(S=1:80)

調査区外へ広がる可能性も考えられる。ＳＩ０１にピットの一部を切られている。軸はＳＢ０１と同じほぼ南北方向を向いており、Ｎ－４°－Ｗを指向する。

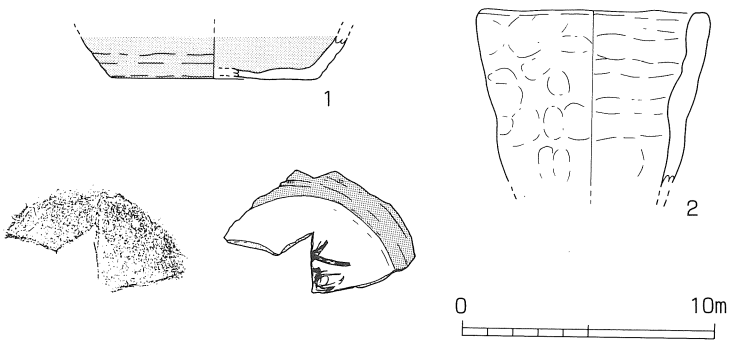
埋土からは須恵器と土師器の破片がわずかに出土するのみで時期は特定しがたい。**11－１**はＰ２から出土した須恵器坏である。やや内湾して立ち上がる体部で、８世紀後半のものと思われる。**11－２**はＰ１から出土した土師器の坏で、内外面に赤色塗彩される。

これらの遺物からＳＢ０２は９世紀初めには埋没したものと考えられる。

ＳＢ０３（第12図）

ＳＢ０２の北、Ｃ１．２Ｇｒで検出した掘立柱建物である。径60～80cmのピットが、東西方向に柱間約2.2m間隔で５穴が列状に並ぶ。西側と北側は調査区外になり、また、東端のＰ５はＳＫ１０に切られているため、４間（約９ｍ）以上の規模になる可能性もある。北の調査区外へ展開するものと思われる。検出した東西を軸とした場合、Ｎ－79°－Ｅを指向し、ＳＢ０１．０２より約７°北側にふって建てられている。東側半分はやや浅い落ち込み状に黒褐色土が堆積している部分がある。

遺物はＰ２から墨書土師器の坏破片（**13－１**）が出土している。内外面を赤色塗彩し、糸切り後ナデ調整された底面に墨書が見られる。荒い筆で書かれ、破片のため判読し難いが、２文字とすれば、「人□」と読めなくもない[5]。**13－**



第13図　SB03-P2出土遺物実測図(S=1:3)

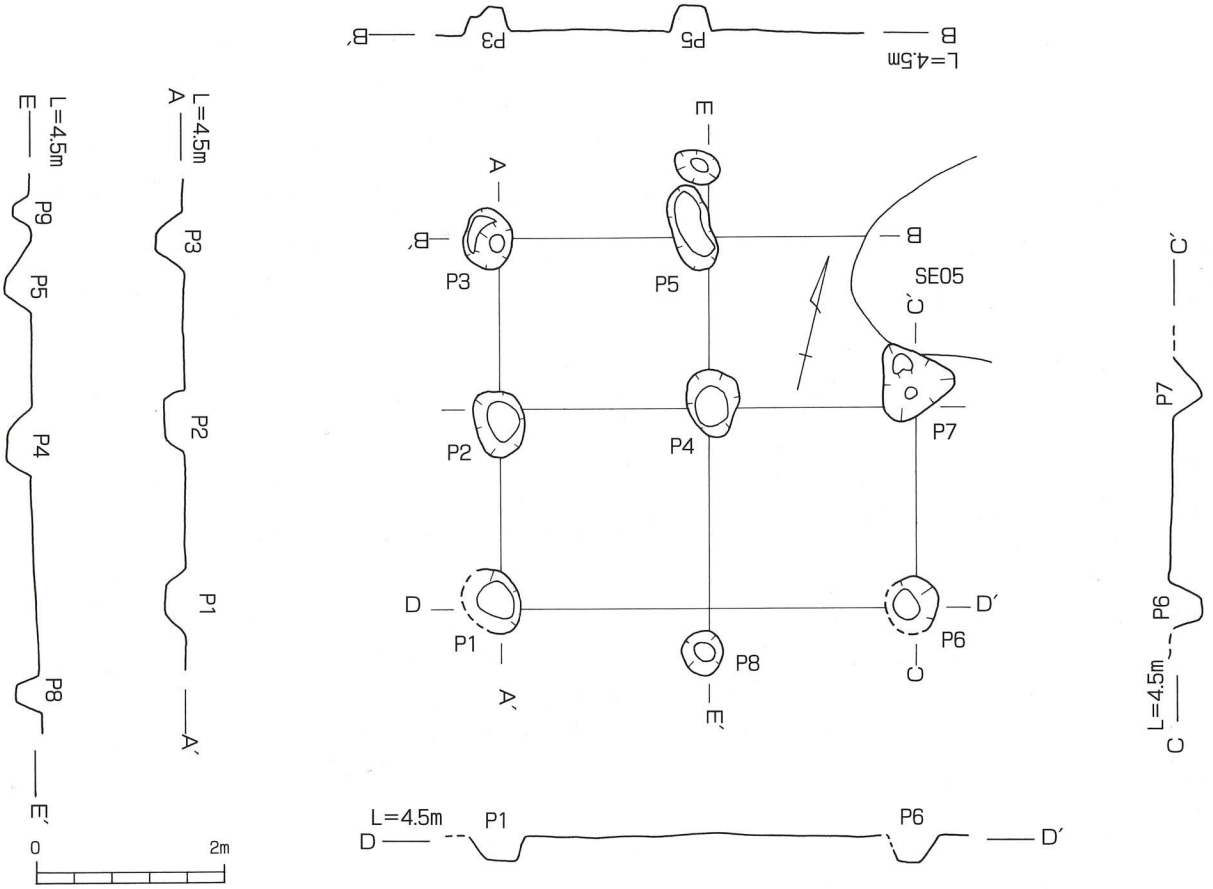
２は製塩土器の口縁部である。口縁上端部に平坦面を持ち、内外面とも強い指ナデ痕が残り、外面にはひび割れが少し見られる。

ＳＢ０３からは他に、土師器の破片がわずかに見られるだけで時期は特定しがたいが、概ね９世紀代の建物跡と考えられる。

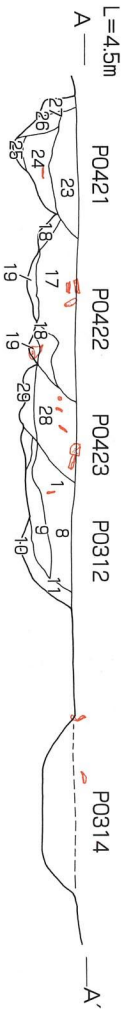
ＳＢ０４（第14図）

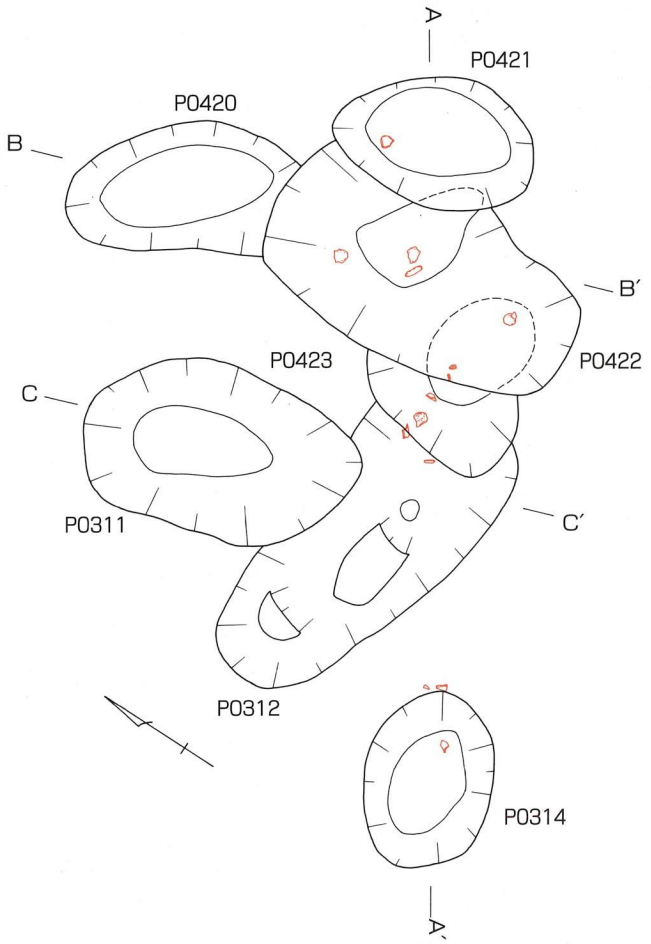
Ｂ５～６Ｇｒにかけて検出した。径50～70㎝、深さ20～３５㎝を測る、やや大型の不整円形の柱穴９穴からなる総柱の掘立柱建物である。柱間1.9m弱の２間×２間（約14㎡）の規模になる。南の棟柱と北東隅の２穴を欠く。南北に小さな棟持ち柱を持つ。南北を軸とすると、Ｎ－15°－Ｗを指向し、これはＳＩ０１とほぼ同軸である。

また、屈曲して走るＳＤ１０の東西方向の溝の方向にＳＢ０４の東西軸は合致している。ＳＤ１０とは２ｍ強離れて内側に位置している。ＳＤ１０と同時期の建物と考えられるが、遺物がほとんど出土しておらず、推定の域を出ない。

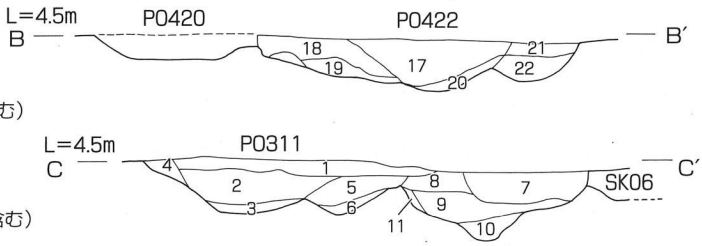


第14図　SB04実測図(S=1:80)





1. 黒褐色土(砂礫多く含み固い)
2. 黒褐色土(1より暗い)
3. 黒褐色砂質土
4. 黒褐色土(砂礫多く含み固い)
5. 黒褐色土(砂礫多く含み固い)
6. 黒褐色土(地山砂ブロック混)
7. 黒褐色土(黄褐色地山シルト小ブロック若干含む)
8. 黒褐色土(7より地山ブロック多く含む)
9. 黒褐色土(8より暗い)
10. 黒褐色砂質土
11. 暗黄灰色砂質土
12. 黒褐色土(黄褐色地山シルト小ブロック若干含む)
13. 黒褐色土(12より暗く地山ブロック少ない)
14. 黒褐色土(13より暗くややソフト)
15. 黒褐色土(黒褐色土と地山がブロック状に混合)
16. 暗褐色土
17. 黒褐色土(固い)
18. 黒褐色土(17より明るい)
19. 黒褐色土(18と同じだが地山砂ブロック含む)
20. 黒褐色砂質土
21. 暗灰黄色土(ややソフト)



22. 暗灰黄色砂質土
23. 黒褐色土(砂礫多く含み固い)
24. 黒褐色土(23より明るい)
25. 黒褐色砂質土
26. 暗黒褐色砂質土(黒褐色土ブロック混)
27. 暗灰黄色砂質土(黒褐色土ブロック混)
28. 黒褐色土(砂礫多く含み固い)
29. 黒褐色土(28より暗く. 砂礫少ない)

0 2m

第15図 主要ピット実測図 P0311・P0312・P0314・P0420・P0421・P0422・P0423(S=1:60)

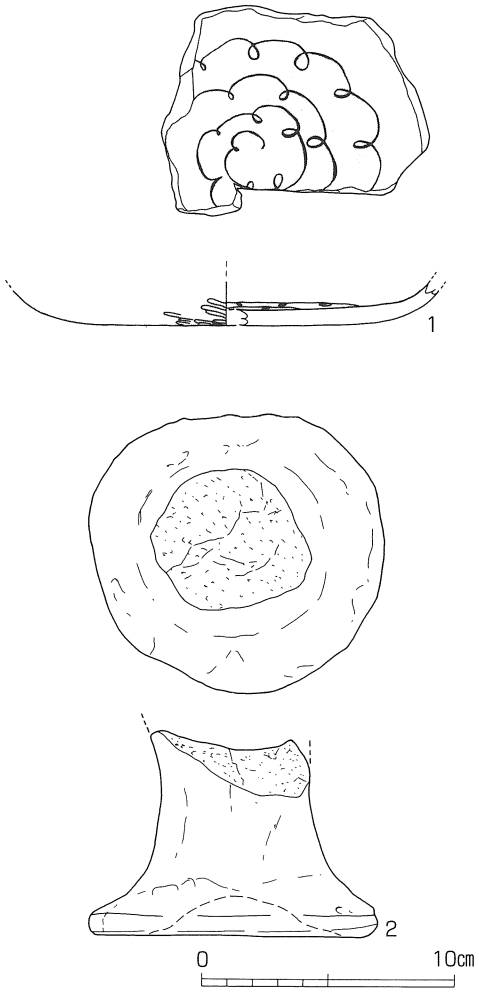
４．主要ピット（第15～17図）

Ｐ０３１１．０３１２．０３１４．０４２０．０４２１．０４２２．０４２３（第15図）

Ａ３．４グリッドで検出したピット群である。当初、広範囲の黒褐色土の不整形プランとして検出した。精査する段階で、いくつかの楕円形ピットに分離する可能性が出てきたが、不鮮明なため、断面の観察により新旧関係を判断した。その結果、大小７個のピットを検出するに至った。調査時は柱穴として扱ったが、周りに対応する柱穴はなく、土坑的性格が強いものと思われる。

また、南で検出したＳＤ０５．０６とは検出段階の違いから、やや時期がずれるものと考えられる。むしろ、西側で検出したＳＩ０１、あるいは北に位置するＳＫ１０との関係を考慮すべきかも知れない。

遺物は、須恵器・土師器の破片が出土しているが、それらは概ね８世紀後半から９世紀初めにかけてのものである。しかし、図化し得たのはＰ０４２２から出土した２点である。



第16図　P0422出土遺物実測図(S=1:3)

出土遺物（第16図） １は丹塗りの土師器皿の底部である。外面は細かなミガキが施される。見込みに螺旋状の渦巻き暗文が描かれている。胎土は在地のもので、７世紀後半から８世紀初めにかけてのものと考えられる。２は土製支脚の脚部である。底面中央がくぼむ。

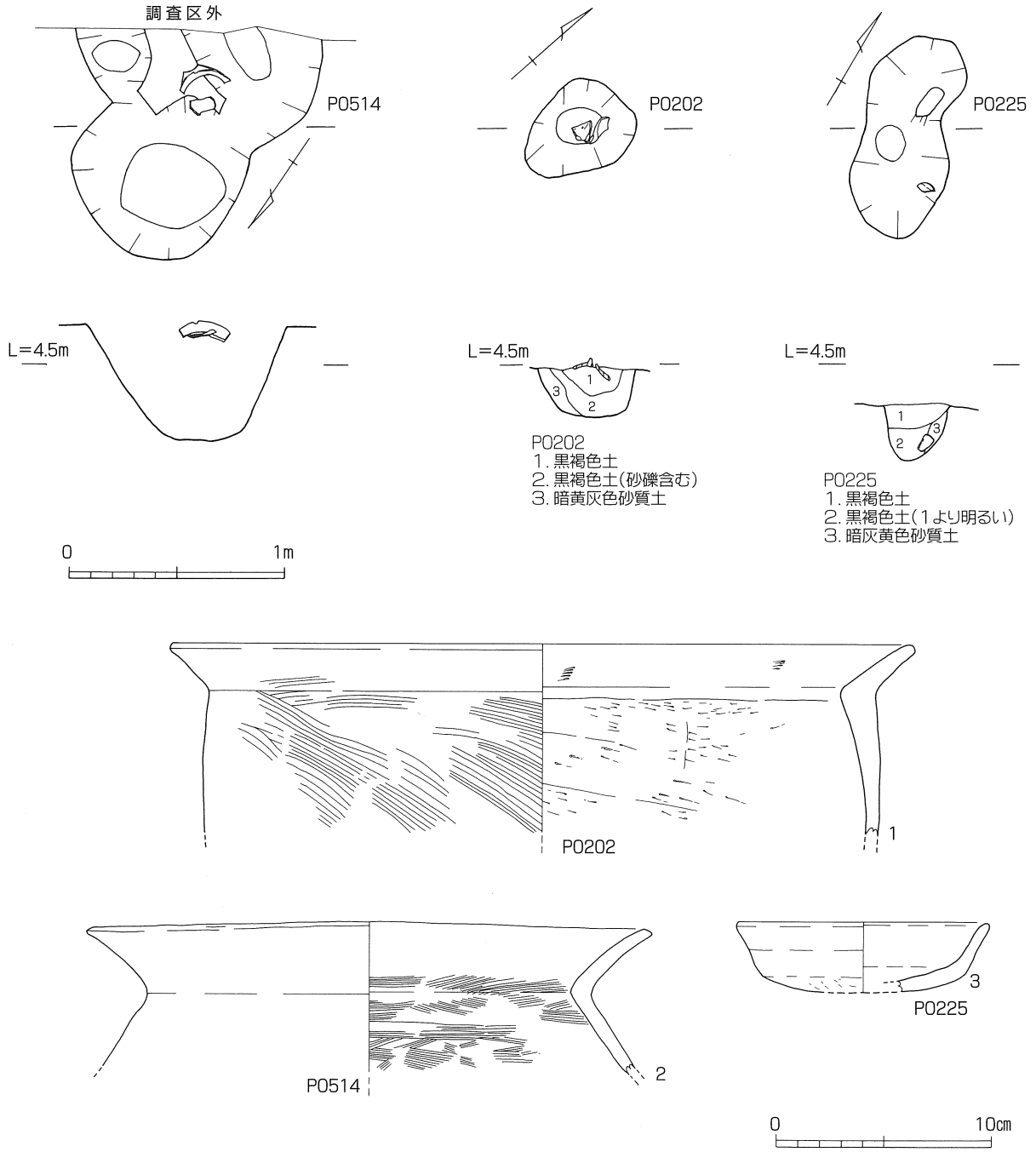
Ｐ０２０２（第17図）

ＳＢ０２とＳＢ０３の中間部分で検出した小ピットである。長径0.9m、短径0.3m、深さ27cmを測り、不整円形のプランを呈す。建物を成す柱穴の可能性があるが、対応するピットを確認出来なかった。

中心部上層から土師器の甕破片（17－１）が出土している。35cmの口径を測る大甕で、体部は張らない。外面には荒い斜め方向の刷毛目が施され、内面は荒いヨコ削り調整である。奈良・平安時代の所産と考えられる。

Ｐ０２２５（第17図）

Ｃ２グリッドのＳＢ０３を切る形で検出したピットで、不整楕円形のプランを呈す。深さは33cmを測り、土師器の坏破片（17－３）が１点出土している。口径11.8cm、器高3.2cmを測り、底部を欠くがやや膨らむものと思われる。ヘラ等で削った痕が見える。全体に赤色塗彩される。



第17図　主要ピット実測図(遺構 S=1:30　遺物 1:3)

Ｐ０５１４（第17図）

Ａ５グリッドの南壁に接して検出したピットである。約１ｍ分の検出になるが、底面は３つに分かれる。南の調査区外へ広がる。

上層から甕の口縁部（17－２）が出土している。「く」の字状に口縁が開き、内面に刷毛目調整が見られる。外面の調整は風化のため不鮮明である。奈良・平安時代の所産と考えられる。対応する柱穴は確認できなかった。

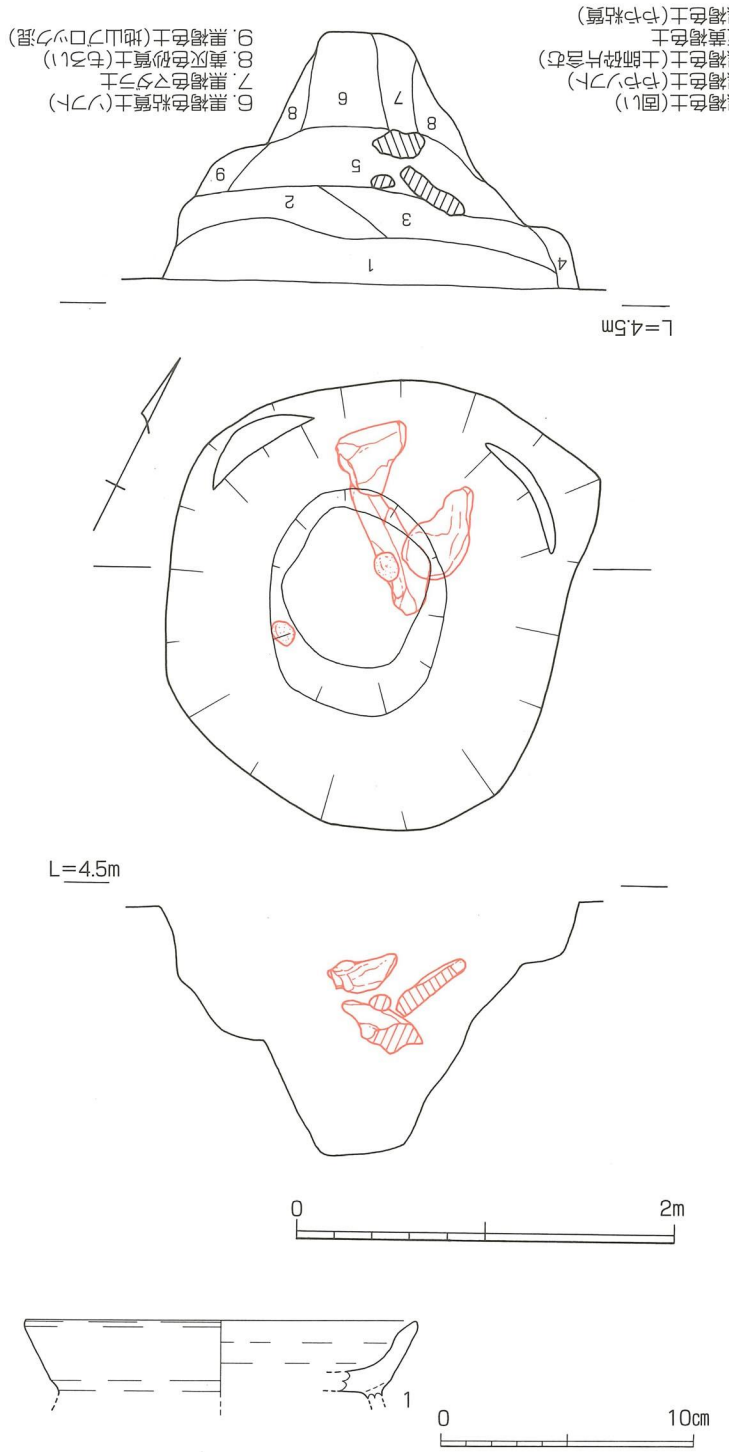
5．井戸（第18～25図）

ＳＥ０１（第18図）

調査区の東側で検出した井戸で、円形プランを呈し、径2.5m、深さ約1.3mを測り、底レベルは標高3.0mに至る。基盤の荒砂層まで掘り込まれ、湧水する。

井戸側等の施設は検出しなかったが、中層（５層）内に人頭大の礫が数点出土している。井戸が廃棄された後埋められたものか、石組みの石が壊された後に残ったものと考えることもできる。断面は漏斗状を呈し、５層以下（下層）には粘質土が堆積する。５層下面で一度掘り返された可能性がある。ＳＥ０１が位置する調査区東側では、同時期の井戸と思われる遺構を数カ所検出している。

埋土からは須恵器片、土師器の破片とともに青磁の破片が出土しており、中世末の井戸と考えられる。図化できたのは高台の欠損した土師器の皿１点（18－１）のみである。



第18図　SE01実測図(遺構 S=1:40　遺物 S=1:3)

ＳＥ０２（第19図）

ＳＥ０１の南で、ＳＤ０２に遺構の東部分を切られる形で検出した遺構である。さらにＳＥ０２は古い遺構であるＳＤ０４を掘りこんでいる。長径2.6m、短径2.0mの楕円形プランを呈し、深さ１m弱を測る。井戸枠等は検出されなかったが、径６㎝・長さ90㎝の竹筒が１本砂礫層に刺さった状態で出土している。底のレベルは3.30mに至り、荒砂層の底から激しく湧水する。

埋め土に土師質土器片を多く含むことから、中世から近世初頭にかけての井戸と考えられる。

出土遺物（第20図） １は鈍い稜を持つ複合口縁の甕で、口縁端部に面を作る。肩部のヨコ刷毛目の間に刺突文が施される。小谷２期に相当する[6]。２．３は布留式系の土師器甕で、外反する口縁端部に

面を作る[7]。

これらの甕は古墳時代前期前葉の範中に入るものであり、ＳＥ０２が掘り込まれているＳＤ０４からの流れ込みと考えられる。

ＳＥ０３（第21図）第19図

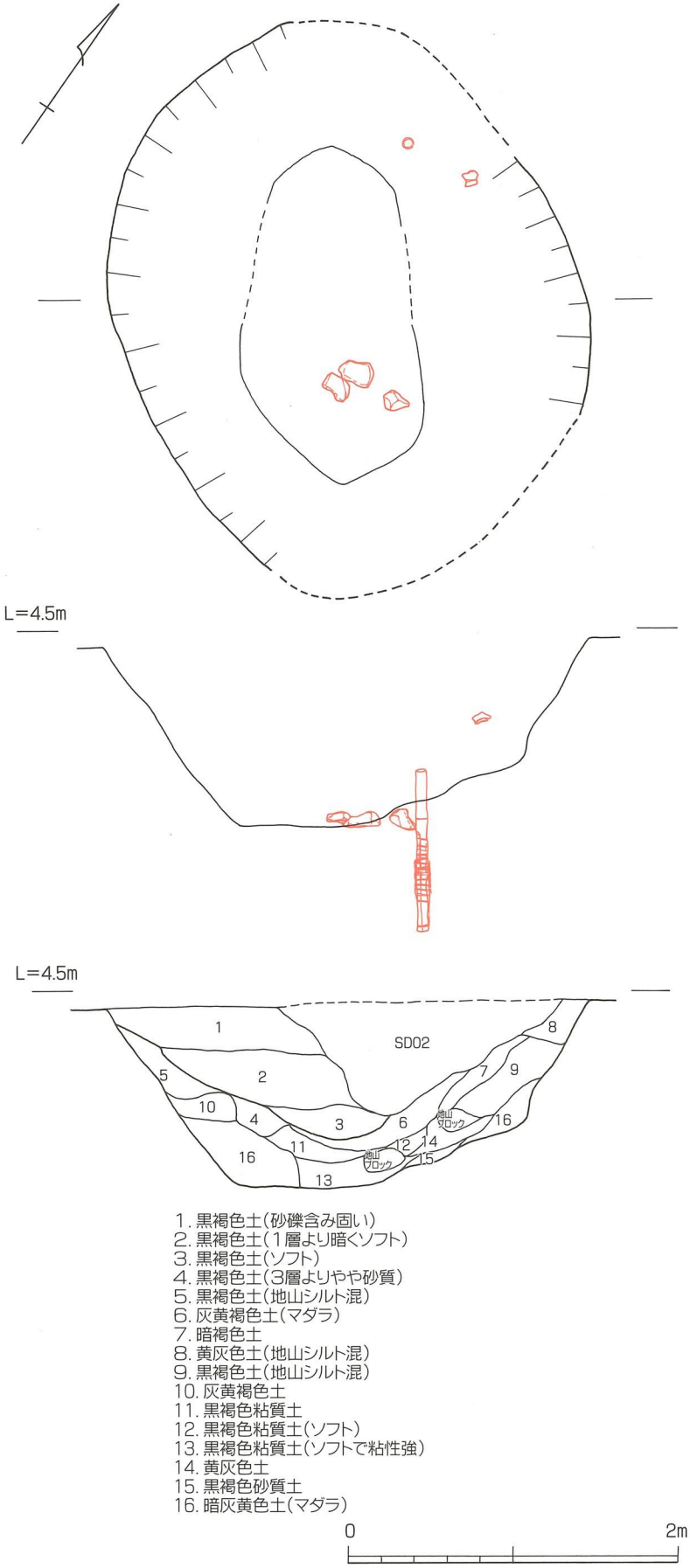
Ｄ９グリッドの北壁近くで検出した遺構である。北側は調査区外になり、約半分の調査にとどまったが、径3.0m程の円形のプランになると考えられる。西側の上面は攪乱により削平されている。深さ1.0mの堀方で、断面は逆台形をなす。底レベルは標高3.76mに至り、砂礫層から湧水する。

拳大から人頭大の礫が多く出土する下層の壁側に礫が積み重なっている。石組みの井戸と考えられるが、はっきりとした組み方ではなく、一部崩れたようになっており、廃棄後上層の礫が埋められたと考えられる。

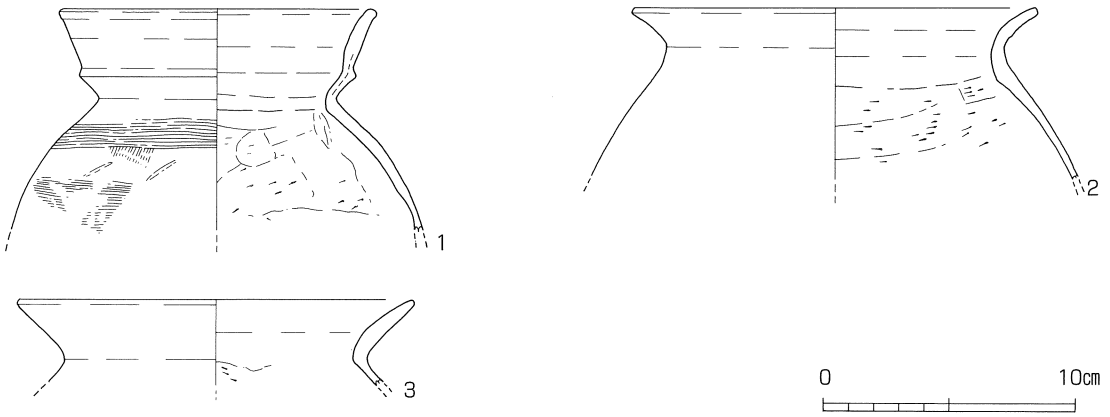
遺物は図化できるものがなかったが、須恵器と土師器、赤色塗彩された土師器の破片が出土している。奈良・平安時代の井戸と考えられる。

ＳＥ０４（第22図）

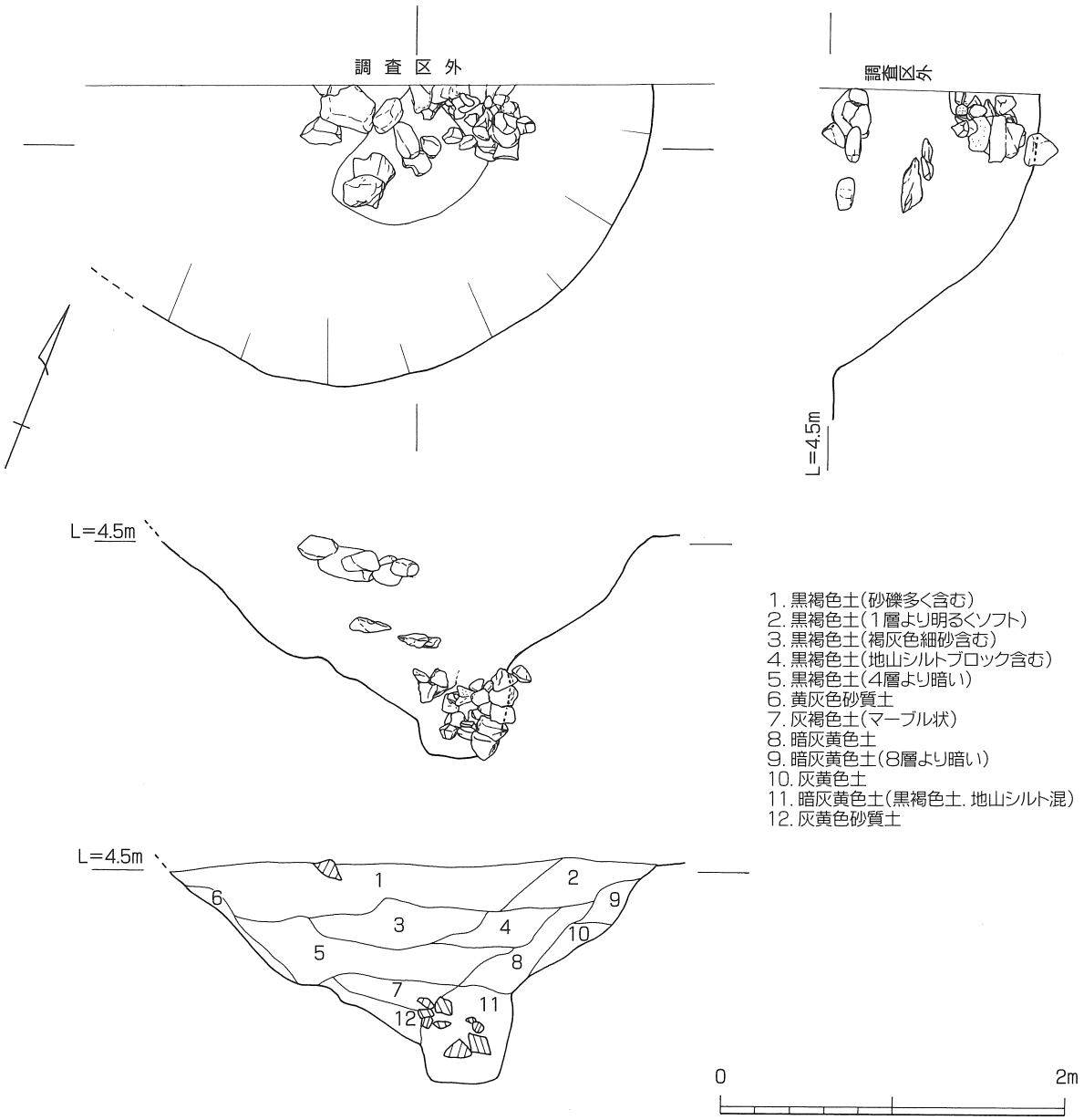
調査区のほぼ中央で検出した遺構で、半円形のプランをなす。北側の上半分を攪乱で失っているため、推定で径3.4mの規模に



第19図　SE02実測図(S=1:40)



第20図　SE02出土遺物実測図(S=1:3)



第21図　SE03実測図(S=1:40)

なるものと考えられる。深さは約１ｍで、底面のレベルは標高3.40ｍに至り、砂礫層の底から激しく湧水する。

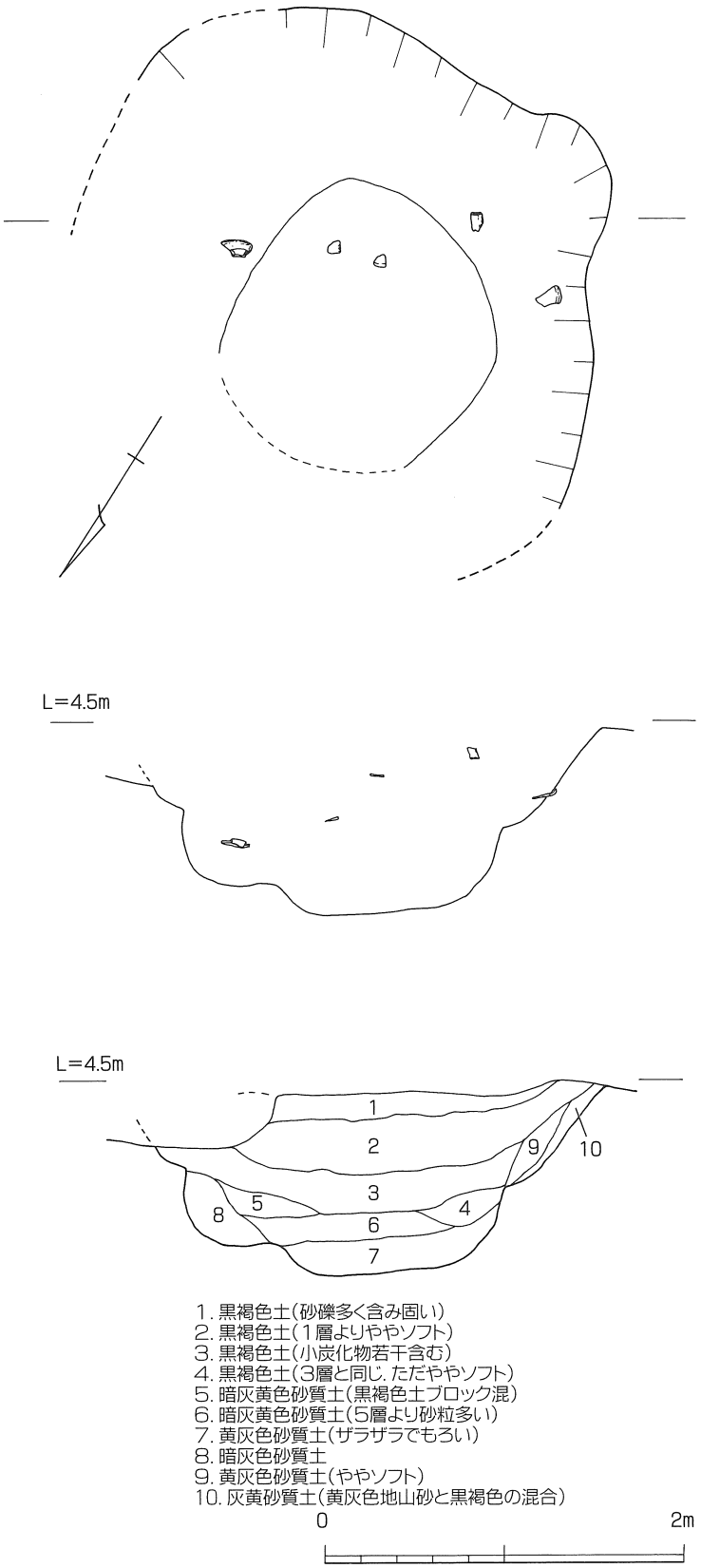
井戸枠等は検出されなかったが、断面の観察から築造時の裏込土と思われる混濁した土層が見られ、基盤の砂層がもろく崩れやすいことから、何らかの施設があったものと考えられる。

覆土からは高台付須恵坏・土師器甕の他、竈の庇部分などが出土している。奈良時代の井戸と考えられる。

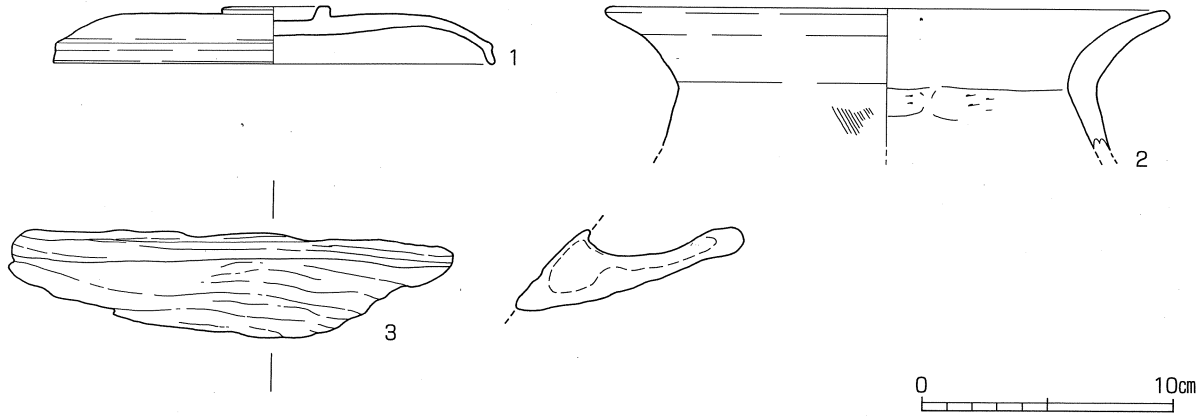
出土遺物（第23図） １は輪状つまみの付く須恵器蓋である。天井部は回転削り、口縁にかけては回転ナデ調整を施す。８世紀前半に相当する。２は土師器の甕である。口縁は逆「ハ」の字状に外反し、口径22.6cmを測る。３は移動式竈の庇部分である。外面には成形時の指ナデの痕が強く残る。８cmの庇長で、胴部との接合部から剥離している。

ＳＥ０５（第24図）

ＳＥ０４の西で検出した遺構で、長径3.0ｍ・短径2.4ｍの楕円形プランを呈す。深さは50cmを測る。中央部が径50cm、深さ65cmのピット状に落ち込んでおり、ピットの形に合わせて、水溜め施設と考えられる曲げ物が埋設されていた。腐食が著しく、



第22図　SE04実測図(S=1:40)



第23図　SE04出土遺物実測図(S=1:3)

埋土とともに崩れてしまった。この曲げ物の中には角礫が埋没しており、廃棄時に埋まったものと思われる。遺構の最深部の底レベルは標高3.36mに至る。荒砂層まで掘られ、湧水する。

遺物は赤色塗彩の土師器坏や須恵器の破片、また、製塩土器の破片などが少量出土している。これらから概ね奈良時代の遺構と考えられるが、断定はできない。

ＳＥ０６（第25図）

Ａ１０グリッドで検出した井戸で、ＳＤ０３の東肩を切って掘られている。径2.0～2.4mの楕円形プランを呈し、U字型の堀方である。深さ1.0mを測るが、上面を攪乱により削平されている為、実際にはもっと深かったと思われる。砂礫層の底から湧水が認められる。

遺物は須恵器と土師器の破片がわずかに出土しているが、図化できたのは２点のみである。いずれも奈良時代の所産である。**１**は口径16.6cmを測る須恵器の蓋である。**２**は口径15.2cmを測る土師器の皿である。体部はやや膨らんで立ち上がり、口縁は緩く外反する。内外面に赤色塗彩される。

6. 不明遺構

ＳＸ０１（第26図）

Ａ１１グリッドで検出した、径1.8m・深さ15cmを測る遺構である。半円形の土坑になるが、北側半分を攪乱により失っており、また、上層も攪乱により削られているため、実際の規模と形状は不明である。南に「Ａ・Ｂ１１Ｇｒ土器溜り」が接する。底面近くの黒褐色土（１層）から、土師器の小皿が4枚と古銭が出土している。土坑墓の可能性が考えられる。

出土遺物（第27図） **１**は口径10.9cmを測り、出土した４枚の皿の中では一番大きいものである。体部は直線的に開き、轆轤成形によるナデ痕が残る。**２～４**は口径7.5～7.8cm、底径4.2～4.4cm、器高1.9～2.1cmを測る小皿である。轆轤成形によるナデ痕がよく残り、**４**の底部はナデによる段を成す。いずれも精製された胎土で、底部は回転糸切り離しである。これらの土師器皿は16世紀前後のものと考えられる。**５**は古銭である。12枚くっついたままの形で出土している。紐でつないで埋めたものか。かなり腐食が進んでおり、切り離す段階でもろく破損する危険があるため、２枚ずつの６分割するに

止まった。文字等は判別し得なかった。

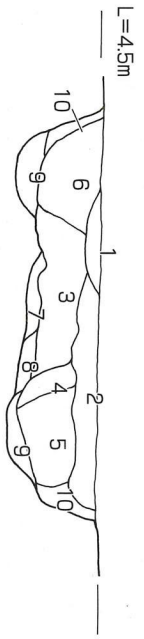
出土した土師器皿から、時期は中世末と考えられる。

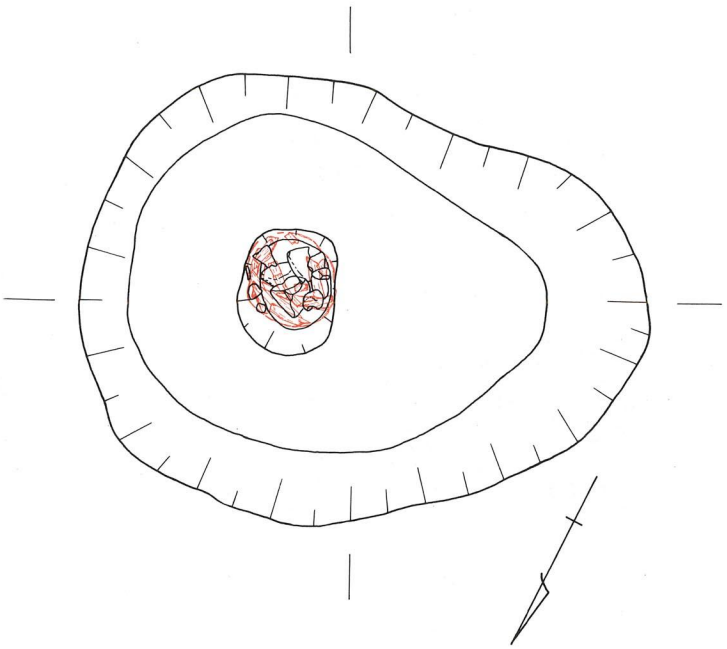
7．土坑（第28～39図）

ＳＫ０１（第28図）

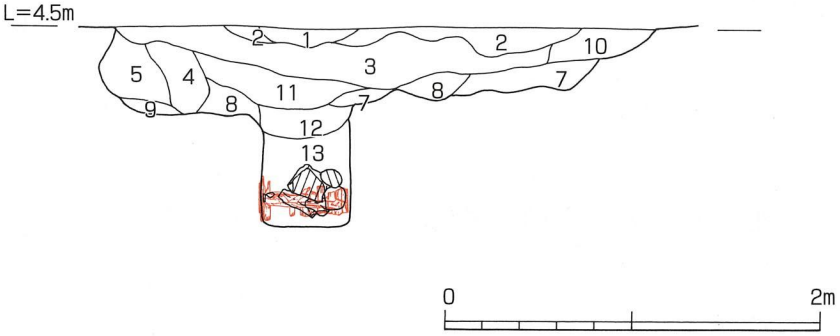
ＳＥ０１・０２の間で検出した遺構で、径2.0m・深さ70cmを測る。ＳＫ０１はＳＤ０２に遺構の東側ほとんどが切られるため、全体の規模・形態は不明であるが、円形を呈するものと考えられる。断面は逆台形で、深さ80cmを測る。底レベルは標高3.68mで荒砂層まで掘り込まれるが、底面から湧水は認められない。

埋土からは土師器の破片がわずかに見られるのみで、時期は決定できない。素堀の井戸とも考えられる。

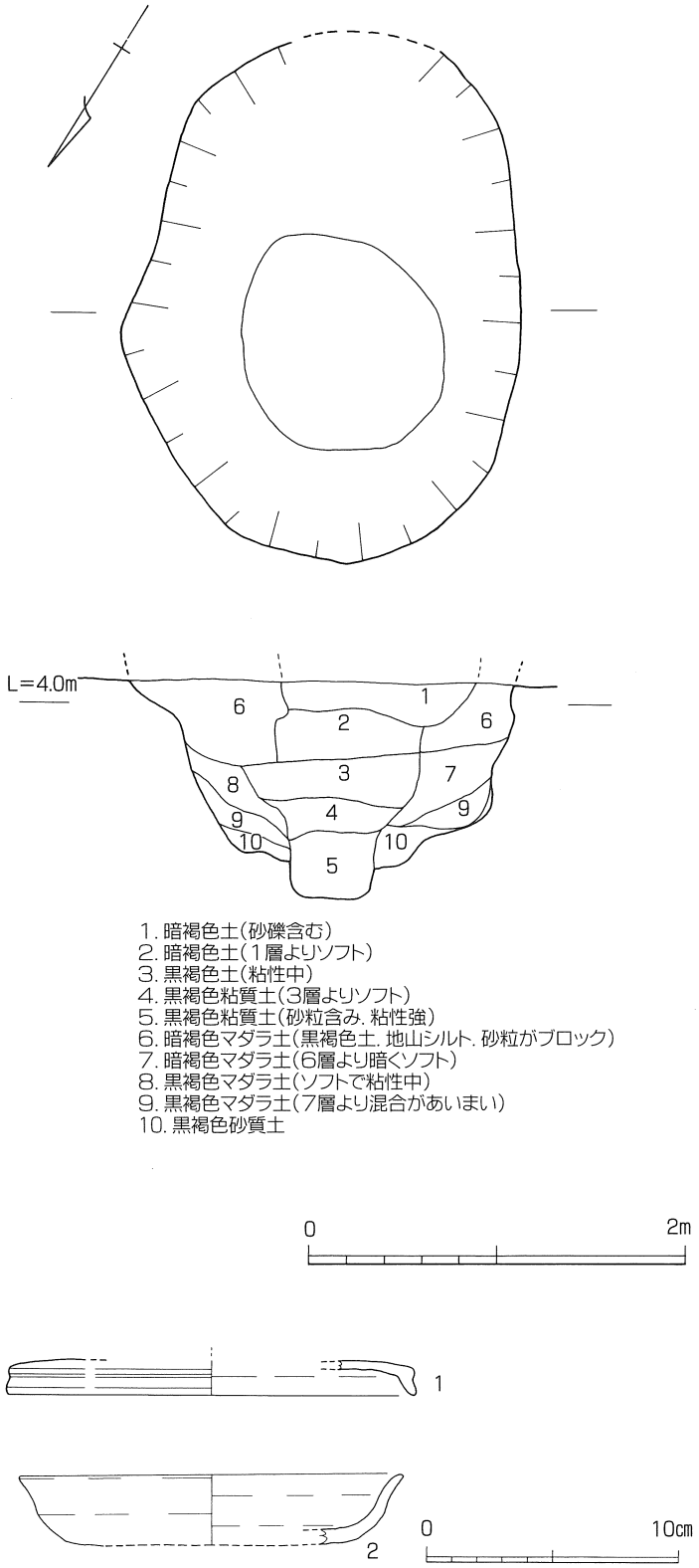




1. 褐灰色土
2. 黒褐色土(固い)
3. 黒褐色土(小炭化物若干含む)
4. 黒褐色土(褐色強い)
5. 黒褐色土(ややソフト)
6. 黒褐色土(褐灰色砂ブロック混)
7. 暗灰黄色砂質土
8. 暗褐色土
9. 暗褐色砂質土(黒褐色土ブロック混)
10. 暗灰黄色砂質土
11. 黒褐色土(固い)
12. 黒褐色土(ややソフト)
13. 黒褐色土(ソフトで粘性中)



第24図　SE05実測図(S=1:40)



第25図　SE06実測図(遺構S=1:40　遺物S=1:3)

ＳＫ０２（第29図）

Ｅ１２グリッドのＳＥ０２の西で検出した円形の土坑で、径約2.0ｍ、深さ80cmを測る。断面は逆台形をなし、底レベルは標高3.62ｍまで掘られ、現底面から湧水する。井戸枠等は検出しなかった。

下層には粘質土が堆積し、埋土からは須恵器と土師器の破片がわずかに見られるのみで、時期は決定できない。古墳時代前期前葉の溝と考えられるＳＤ０５の一部を切っている。素堀の井戸か？

ＳＫ０３（第30図）

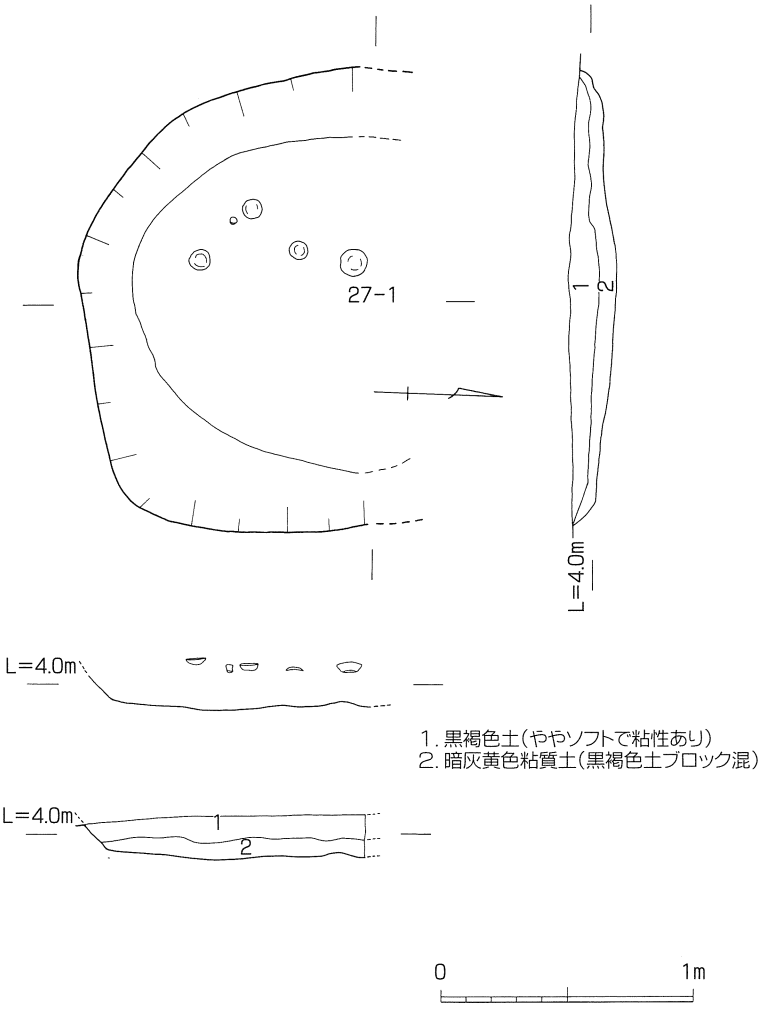
Ｂ５グリッドで検出した土坑である。長径５ｍ弱、短径1.8ｍの楕円形プランを呈し、深さは20cm前後と浅い。、中央部分を後世の遺構ＳＫ０７に切られているため、本来の形状を掌握できない。２つの土坑が重複している可能性も考えられる。

北側の上層から、弥生時代後期前葉の小型鉢（31－１）が完形で出土している。土坑墓の可能性が考えられる。北にあるＳＫ０８と規模・形がよく似ているが、ＳＫ０８からは遺物がほとんど出土しておらず、関係づけることは出来ない。

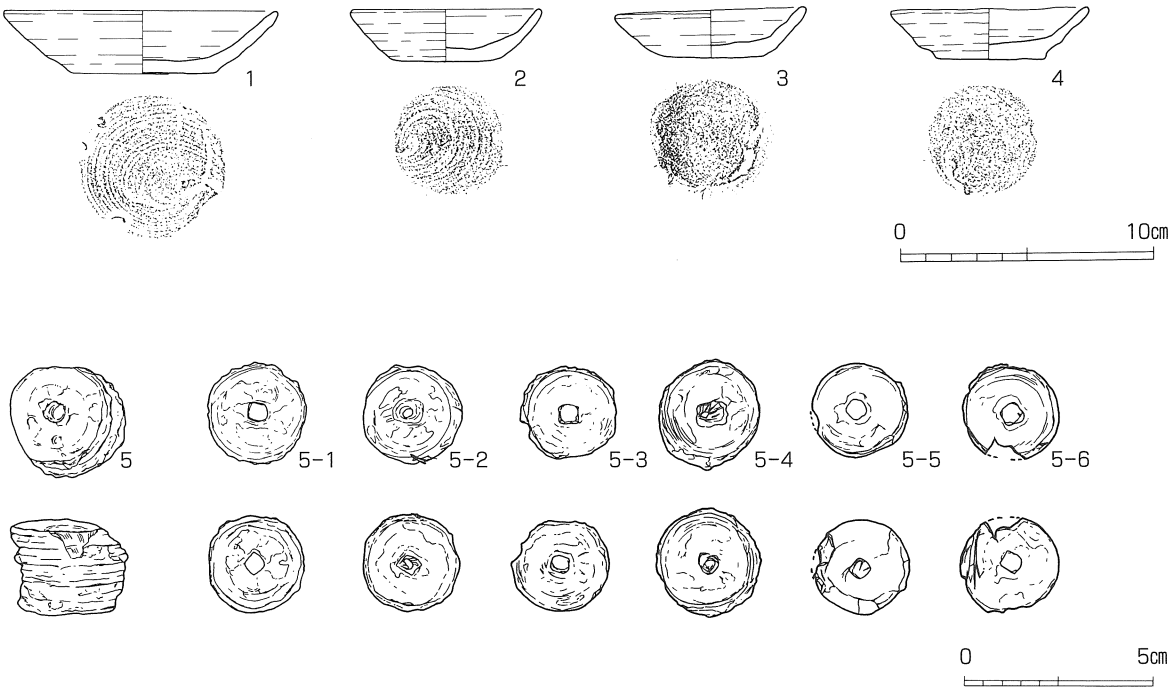
弥生時代後期前葉の遺構と考えられたが、覆土から、弥生時代終末から古墳時代前期前葉にかけての土器片が多く出土しており、古墳時代前期前葉にかけて埋まった

遺構と考えられる。すぐ北にあるＳＤ１３と同時期と考えられる。

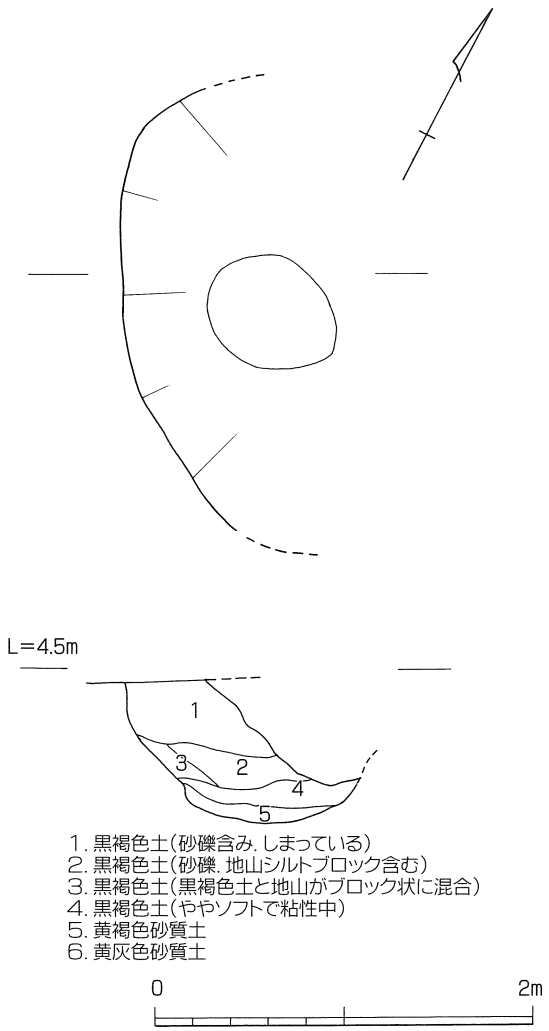
出土遺物（第31図） １は弥生時代後期前葉（松本Ｖ－１様式[8]）の小型鉢である。口径9.6cm、器高9.5cmを測り、全体に黒色を呈している。口縁には２条の凹線が施され、頸部には径2.5mmの穴が２ヶ所対になって穿たれる。やや上に最大胴部径が来ており、２条の凹線に区画された幅６mmの中に半月状の刺突文が帯状に巡る。外面の調整はヨコ方向のヘラミガキ、内面は頸部以下胴上半部までヨコ方向の削り、下半部は削りの後ヨコミガキによって削りが消されている。２は弥生時代後期前葉の甕底部、３は古墳時代前期前葉の甕である。立ち気味の口縁端部に平坦面を作る。４は単純口縁の甕である。ＳＫ０３の遺物として採り上げたが、出土位置からＳＫ０７に入る可



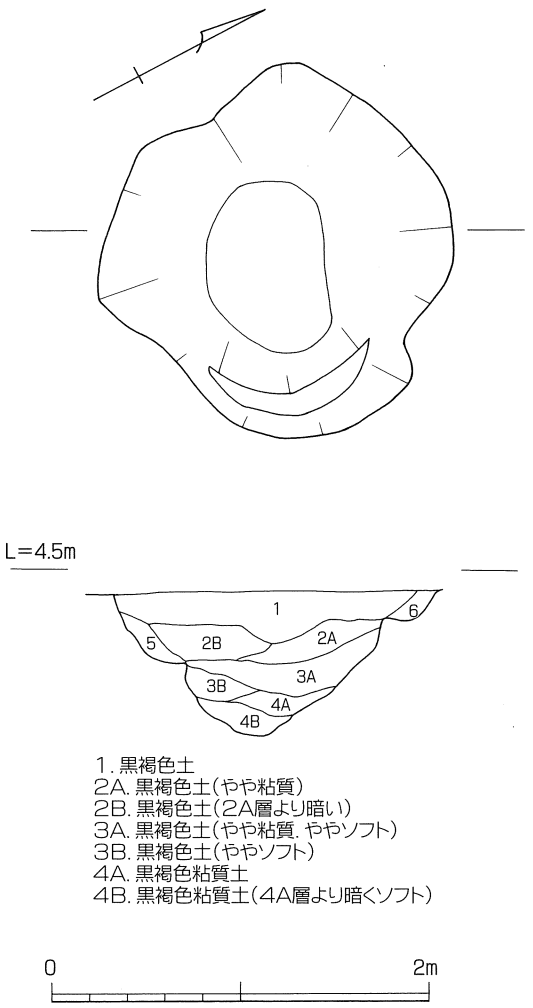
第26図　SX01実測図(S=1:30)



第27図　SX01出土遺物実測図(S=1:3　古銭は1:2)



第28図　SK01実測図(S=1:40)



第29図　SK02実測図(S=1:40)

能性がある。

ＳＫ０４（第32図）

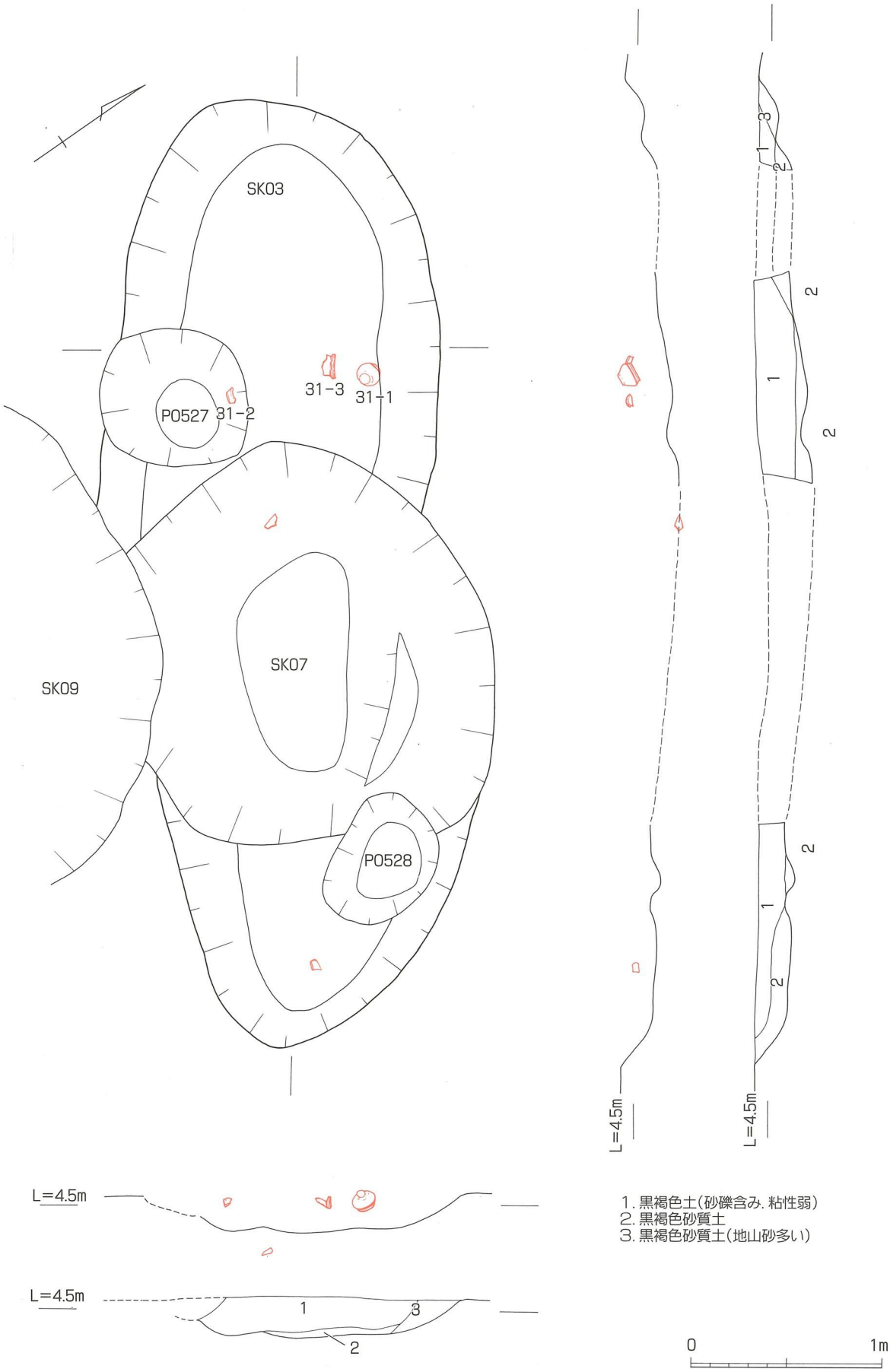
調査区の南西隅で検出したため、一部のみの調査に留まった。全体の遺構の形状は溝になるのか土坑になるのかはっきりせず、部分の検出であるため土坑とした。地山は黄灰色の砂層で崩れやすい。巾は検出時で最大2.0mを測るが、深さは25cmと浅く、断面は皿状を呈す。西の調査区外で深くなる可能性も考えられる。

遺物は須恵器と土師器の小片がわずかに見られる程度で、時期は決定できない。

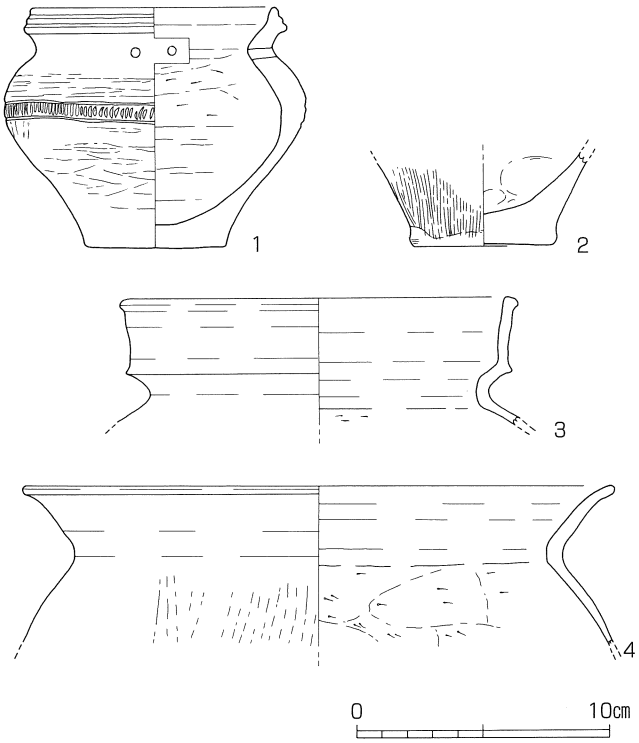
ＳＫ０５・０６（第33図）

南北方向に並列して検出した。布掘状の土杭である南側は調査区外に展開する。

ＳＫ０５．０６とも検出長３ｍ強、巾45cmでステップ状の平坦部からピット状に落ち込む。ピット部分は径1.3m、深さ74cmを測る。２つの遺構のピットは対応する位置関係にあり、それらのピット間は3.0mを測る。一見、布堀状建物跡のように見え、ピット中心を通るラインを長軸とすると、南北方向でＮ－24°－Ｗを指向する。ピット状の部分が柱穴とすれば、ステップ部分は壁体の跡になる可能性



第30図　SK03実測図(S=1:30)



第31図　SK03出土遺物実測図(S=1:3)

が考えられる。

遺物は弥生土器・須恵器・赤色塗彩された土師器などが若干出土しているが、いずれも小破片で図化できるものはなかった。

ＳＫ０７（第34図）

弥生時代前期前葉の遺構である、ＳＫ０３の中央部分を切って掘り込まれている。径2.0mの円形プランを呈す。深さは50cm程度で、底面からの湧水などはなく、廃棄土坑と考えられる。西側の肩部をＳＫ09に切られる。

埋土から高台付須恵坏や土師器甕の破片が出土しており、奈良時代後半の遺構と考えられる。弥生時代後期前葉の土器片数点と石器が出土しているが、ＳＫ０３を切っているための混入遺物と考えられる。

出土遺物（第35図） １～４は弥生時代後期前葉の甕である。３～４条の凹線が施される口縁は、上方に拡張し、４は下方にも拡がる。いずれもススの付着が見られる。５．６は土師器皿の底部である。底面にはナデの指圧痕が見られ、内外面に赤色塗彩される。奈良時代の所産と考えられる。７は銀杏の葉型をした石器で、片面を磨いて刃を付けていることから、磨製片刃石斧と考えられる。８は砥石の割れたもので、４面を使用している。

ＳＫ０８（第36図）

ＳＫ０３の北で検出した遺構で、長径約4.0m・短径1.3mを測る。深さは20cmで不整楕円形のプランを呈すが、北側と南側がやや膨らんで落ち込む。ＳＤ１３の東部分を切り込んでいる。形態的にはＳＫ０３に似ている土坑であるが、出土遺物はほとんどなく時期も性格も判別しがたい。

ＳＫ０９（第37図）

ＳＫ０７に隣接して検出した土坑で、ＳＫ０７の一部を切っている。円形のプランを呈し、堀方は鉢状になる。径2.5m・深さ60cmを測る。下層の12層に黒褐色土の11層がＳＥ０５と同様径40cm、深さ12cmのピット状に落ち込んでいる。深さはＳＥ０５ほど深くなく、曲げ物などの施設もないため、井戸とは断定できないが、その可能性は捨てきれない。

遺物は土師器の破片がわずかに見られる。弥生土器片も若干見られるが、おそらくＳＫ０３からの流れ込みと思われる。

出土遺物（第38図） １は須恵器の蓋で、高広Ⅲ－Ｂ期に相当する[9]。２は須恵器坏の底部で、切り離

しは回転糸切りである。高広Ⅳ－Ｂ期に相当する。３の鉄製品は、鋏（かすがい）または平釘の折れ曲がったものと思われる。

これらの遺物からＳＫ０９は、８世紀末から９世紀始めにかけて埋没したものと考えられる。

ＳＫ１０（第39図）

西側の北壁近くで検出した遺構である。6.0m×4.6mの規模になる土坑で、北の調査区外へ広がるものと思われる。全体のプランは隅丸方形であるが、１層の暗灰黄色土を掘り取り、暗褐色土を掘り下げていく段階で、長さ2.5～2.8m、幅1～1.5m、深さ70cm前後の５つの楕円形の落ち込みに分かれる。何度か掘り直された跡が土層の観察から窺え、掘り直しによって広がったと考えられる。「落ち込み４」から「５～３」と順次掘り直され、「落ち込み１」を最後に廃棄され、埋められたものと考えられる。西側の「落ち込み２」は土層の観察から北側と南側で２つに分けられる。東側にある「落ち込み」より以前に掘られたものと思われる。

遺物の多くは、遺構の東側で出土しており、特に「落ち込み１．３」の上・中層からの出土量が多い。「落ち込み１」からは高台付須恵坏や皿、赤色塗彩された土師坏などがほぼ完形に近い状態で出土している。接合出来なかった破片もビニール袋［26cm×38cm］２袋分になる。

遺構の性格は不明であるが、おおよそ平安時代の廃棄土坑と考えられる。

第32図　SK04実測図(S=1:40)

ＳＫ１０出土遺物（第40・41図）

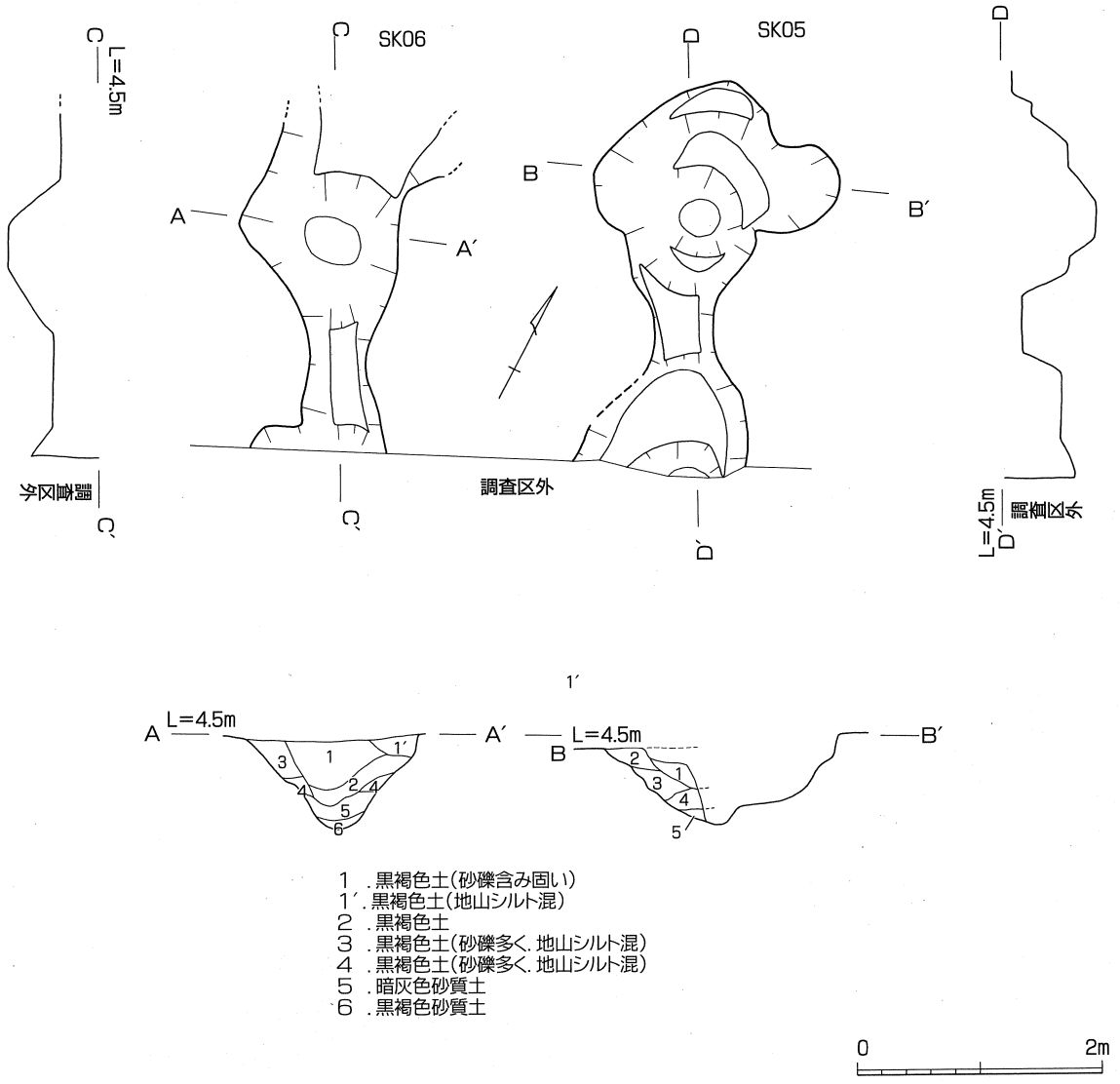
第40図１～７は須恵器で、おもに遺構の東側上層から出土している。**１．２**は蓋で、**１**は輪状、**２**は宝珠状の摘みが付くものと思われる。**３**は高台付の坏で、回転糸切りの底面中央に「×」印の線刻が施される。高広Ⅳ－Ｂ期に相当する。**４～６**は高台を持つ皿である。底面はいずれもナデ調整で、**４**の口縁は薄く外反し、見込み内はやや摩滅しており使用されていたことが窺える。**７**は短く外反する口縁の甕である。**８**は甕または壺の底部で、平行タタキの後、弱いカキメを施す。

第40図９～20は赤色塗彩された土師器の坏で、底面を除いて全体に塗彩されている。**20**は高台を持つ。精製された胎土で焼成も良好である。口径11.6～12.8cm、底径7.0～9.0cm、器高3.3～3.7cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、端部を丸くおさめる。轆轤成形のナデ痕がよく残る。底部はほぼ平坦であるが、**９**．**10**はややふくらむ。**13**．**17**の底部は回転糸切り後ナデ調整が施される。他の坏も切り離し後のナデ痕がよく残り、**14**．**16**．**19**のように凹凸をなすものもある。**10**．**12**．**16**．の底部には板状工具によるナデ調整が見られる。**11**の口径は13.9cmとやや広く開き、**12**は10.7cmとやや小型で口縁端部が弱く外反する。

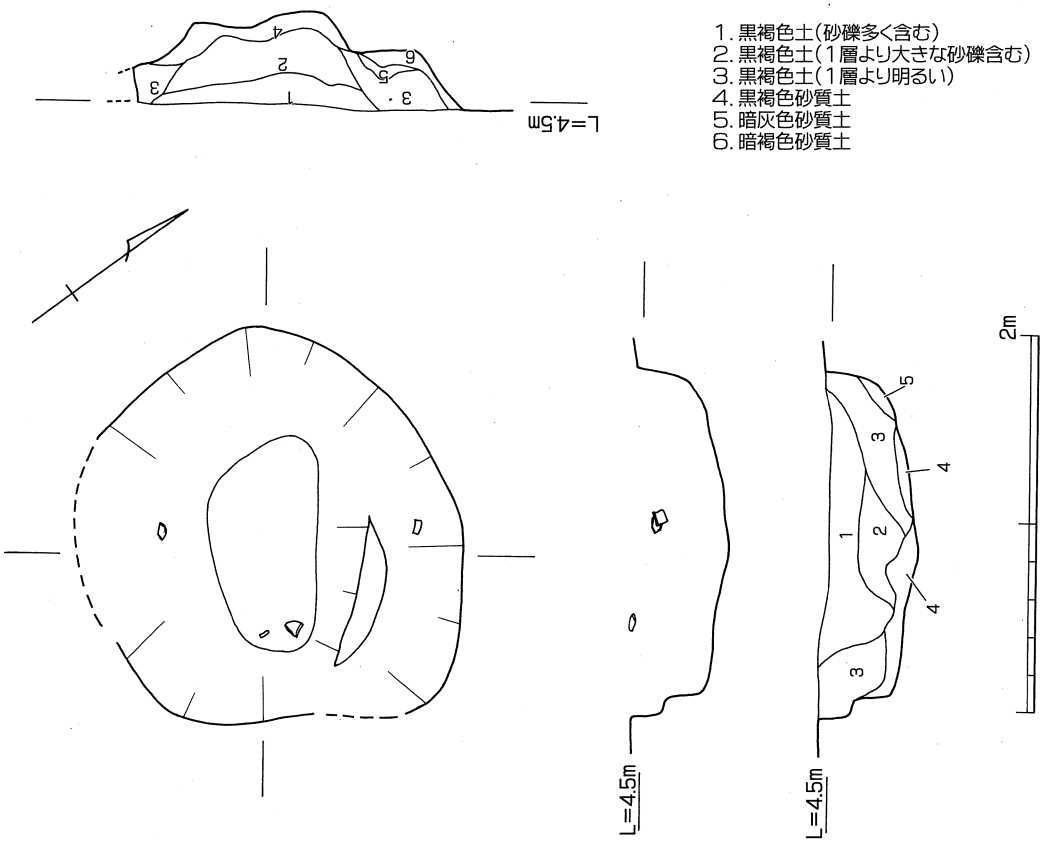
第40図21～25は赤色塗彩された土師器の皿で、口径13.1～13.6cm、底径9.6～10.3cm、器高2.0～2.4cmを測る。**25**は高台が付き、口径17.8cmを測る。

これらの土師器は概ね９世紀前半代のものと考えられる。

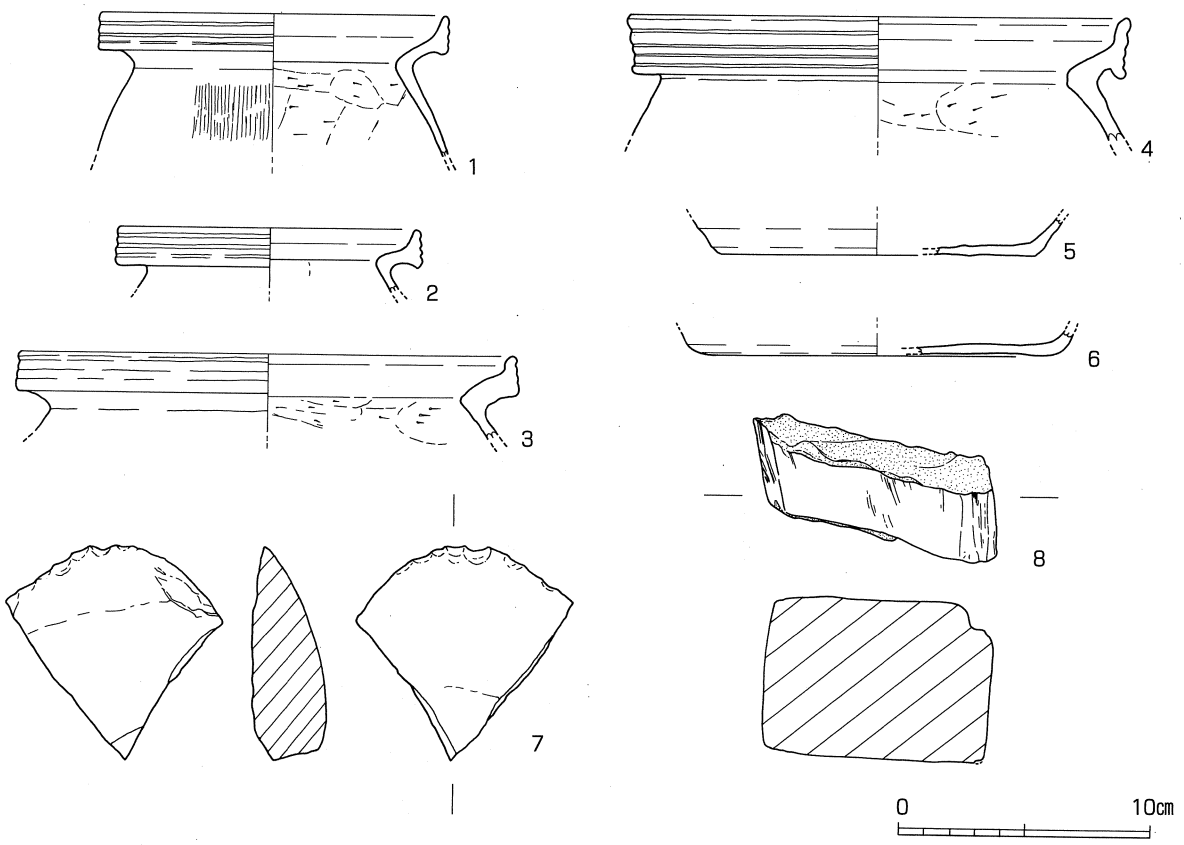
第41図１．**２**は土師器の甕である。「く」の字状に口縁が開くもので、１は口径33cmを測る大型品である。



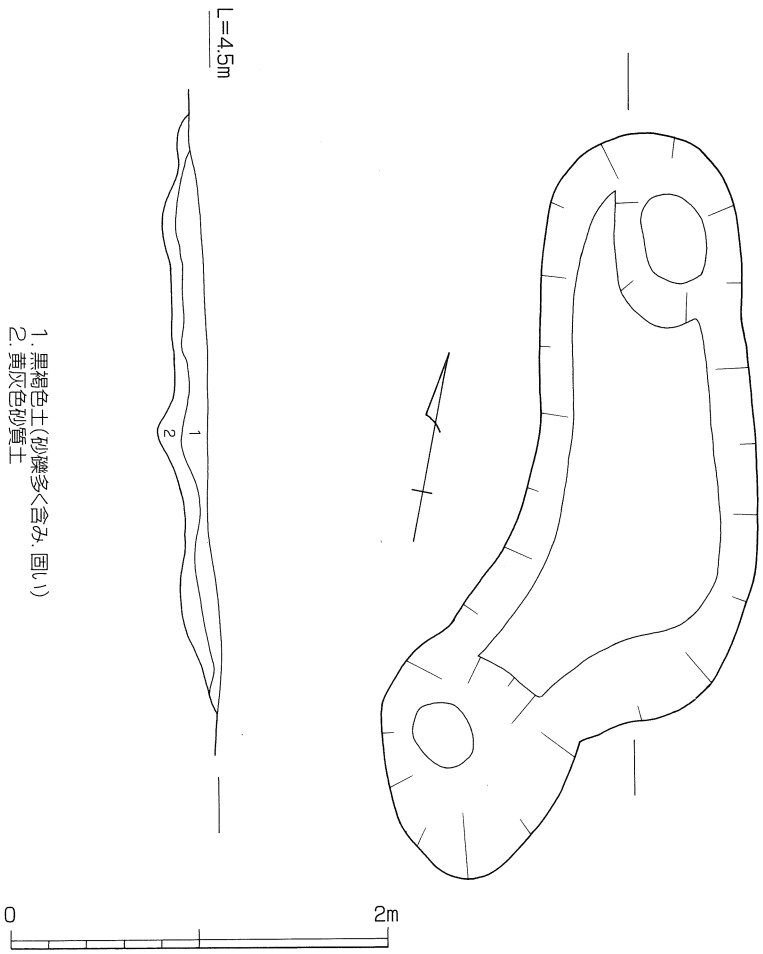
第33図　SK05･06実測図(S=1:60)



第34図　SK07実測図(S=1:40)



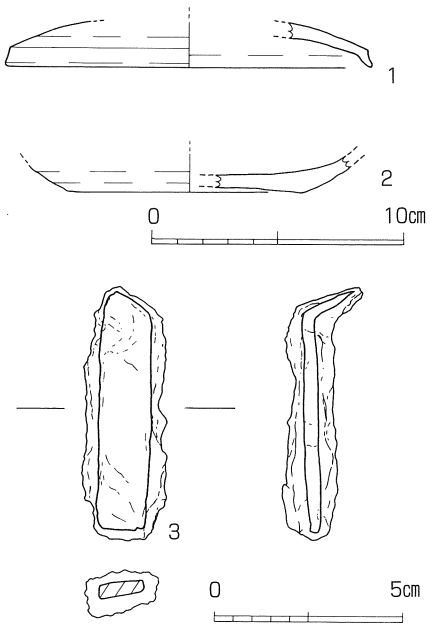
第35図　SK07出土遺物実測図(S=1:3)



第36図　SK08実測図(S=1:40)

また、製塩土器が出土している。すべて破片であるが、かなりの数量（ビニール袋［26×38cm］×２袋分）になる。ほとんどの個体が２次焼成を受けている焼塩土器である。胴部過半を欠くものばかりであるが、底部は砲弾状を呈するものと考えられる。３は全体的に薄作りで口縁端部を尖らせるもので、内外面ともにナデつけ痕が顕著に見られる。内面は布目をナデ消した可能性もある。４～９は器壁が厚いもので、４．５．９は口縁端部を丸くおさめる。６．７．８は上面に平坦面を作るものである。いずれも成形時のなでつけ痕が残る。７と８は小豆色の粒子を含む胎土で、形状も類似していることから同一個体の可能性がある。10は径2.1cmを測る土錘である。

これらの遺物のうち、40－16．19．21．22は「落ち込み１」から出土している。40－９と41－10は「落ち込み２」から、40－11．14が「落ち込み３」から、40－２．17が「落ち込み４」から出土している。



第38図　SK09出土遺物実測図
（S=1:3　鉄は1:2）

８．土器溜り（第42～47図）

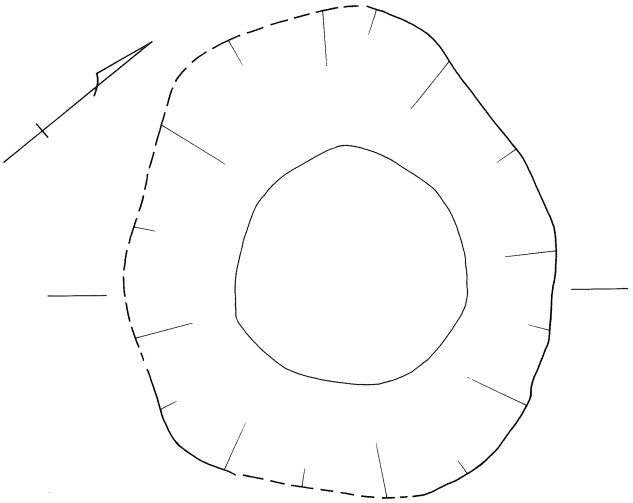
Ｃ１１Ｇｒ土器溜り（第42図）

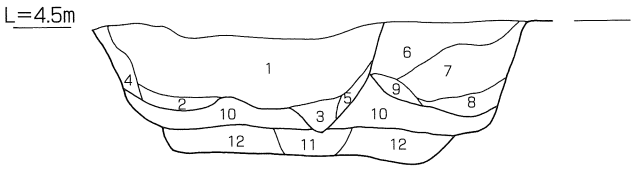
Ｃ11グリッドで第５層である包含層を掘り下げていく段階で検出した土器破片の集まりである。11グリッドは、黒褐色土が堆積している場所で、約3.0m×2.0mの範囲で土器が集中して出土した。

南側のＢ11グリッドは攪乱によりそのほとんどが削り取られた状況である。攪乱の南側の包含層からは、「Ｃ11

Ｇｒ土器溜まり」と同様の土器が多く出土していることから、本来地山のレベルが低くなっている部分で土器が集まって堆積したものと考えられる。下層部分は10cmほど落ち込んでいる。

遺物は甕を中心に壺・高坏・低脚坏・器台などの古式土師器が出土している。ほとんどは小谷２期（草田７）のものである。小谷３期に入る遺物も若干見られる。また、畿内布留式甕系の単純口縁甕も何点か見られる。ＳＤ０３．０４の最終埋没時期と同時期と考えられる。





1. 黒褐色土(砂礫多く含み. 固い)
2. 黒褐色土(地山砂含む)
3. 黒褐色土(2層よりソフト)
4. 黒褐砂質土(黒褐色土と地山砂の混合)
5. 褐灰色砂質土
6. 黒褐色土(砂礫多く含む)
7. 黒褐色土(砂礫少ない)
8. 黒褐色土(7層より暗く. ソフト)
9. 黒褐色砂質土
10. 黒褐色砂質土(砂粒多く含む)
11. 黒褐色土
12. 黄灰色砂質土(無褐色土ブロック混)

0　2m

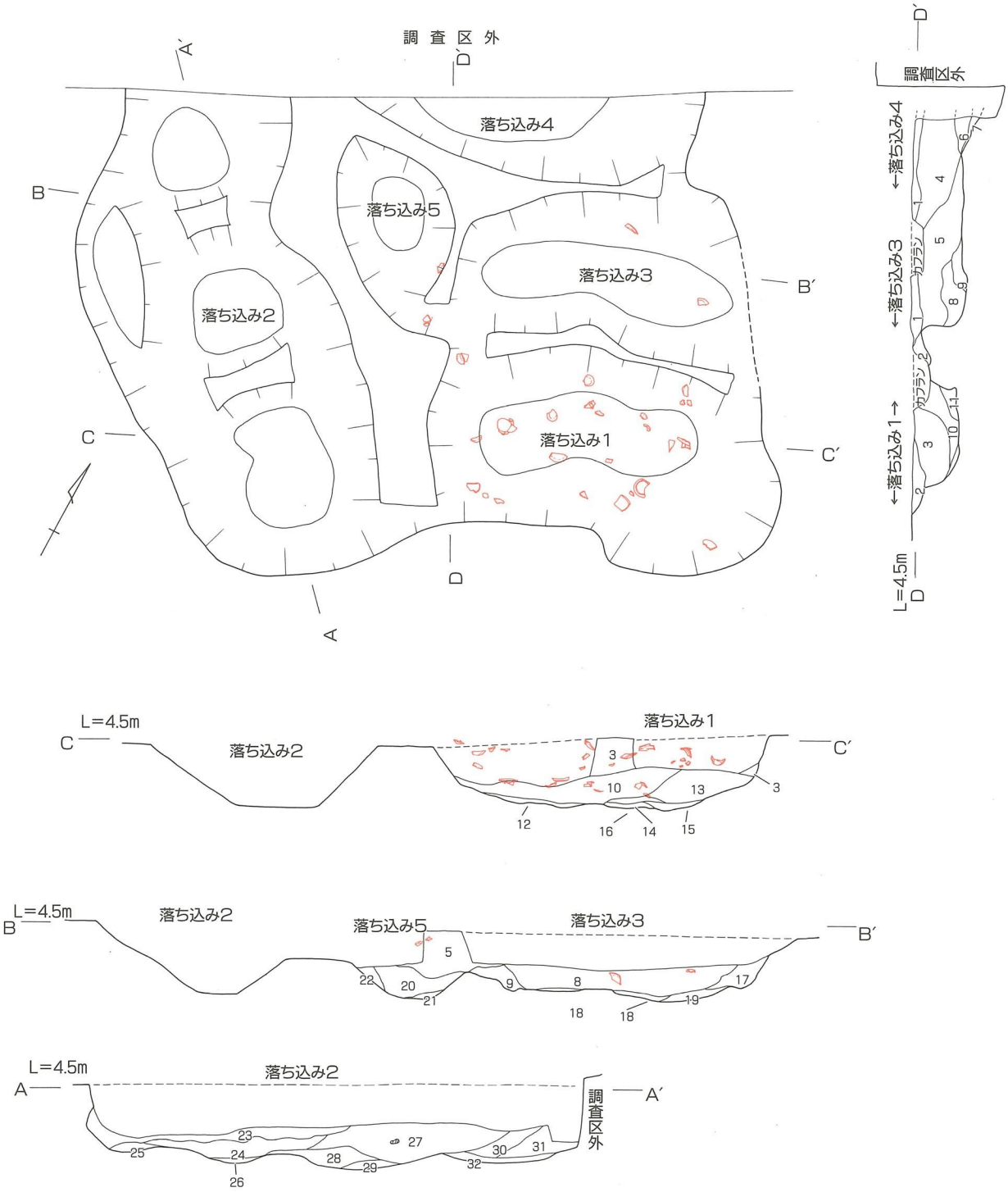
第37図　SK09実測図(S=1:40)

Ｃ１１Ｇｒ土器溜り出土遺物（第43～46図）

第43図　１～５は複合口縁細頸壺である。口径23～25cmを測る。口縁端部はいずれも外方に広がって平坦面を持つが、３は玉縁状に肥圧する。５を除いて頸部に羽状文が刺突された後、中央に沈線が巡る。３．４には羽状文の下段にも沈線が施される。さらに３の肩部には、ハケ原体による刺突文が施される。この刺突文は上段がやや長いが、４のように下段が長いものもある。外面の調整は、ヨコ方向の刷毛目で、１の胴部には荒く短い斜め方向の刷毛目が点在し、下半の調整は不鮮明であるが、所々ススが付着している。頸部内面に指ナデ痕が認められ、頸部以下ヨコ方向の削りが施される。

これらの壺は松山編年の小谷２期に相当するものと考えられる[10]

第44・45図　は複合口縁の甕である。器壁は一様に厚作りで、口縁幅はやや短くなる。45－１～４は口径17～18cmを測る甕で、45－５は口径23.2cmのやや大型品である。端部には平坦面を持つが、44－７～45－５は外向きに面を作り、外方にやや肥厚する。複合口縁の稜は鋭く突出するもの（44－３～７．45－２～４）もあるが、いずれも形骸化している。外面は胴上半部にヨコ方向の刷毛目調整であるが、弱いタテ刷毛目の残るもの（44－３．８．９、45－３．４）がある。内面はやや下がった位置からの削り調整であるが、45－４には指圧痕が見られる。44－３．４．５．10の肩部にはハケ原体



1. 暗灰黄色土(ややソフト. 粘性弱)
2. 暗褐色土(固い)
3. 黒褐色土(2より黒褐色土多く含む)
4. 褐灰色土(ソフト. 粘性中)
5. 褐灰色土(黒褐色土含む)
6. 黒褐色土(粘性弱)
7. 褐灰色粘質土(ソフト. 粘性中)
8. 褐灰色土(ソフト. 粘性中)
9. 暗褐色土(粘性弱. 砂ブロック混)

SK10上層

10. 褐灰色土(ややソフト. 粘性中)
11. 暗褐色土(9層に似る)
12. 褐灰色粘質土(ソフト. 粘性強)

落ち込み1a

13. 褐灰色土(ソフト. 粘性中)
14. 灰色砂
15. 褐灰色粘質土(ソフト. 粘性強)
16. 灰色砂質土

落ち込み1b

17. 黒褐色土
18. 褐灰色土(ややソフト. 粘性中)
19. 褐灰色土(ややソフト. 粘性中)
20. 褐灰色土
21. 褐灰色粘質土
22. 褐灰色砂質土
23. 褐灰色土(ややソフト. 粘性弱)
24. 褐灰色土(23よりソフト. 粘性中)
25. 褐灰色砂質土
26. 灰色砂質土(粘土に近い)

落ち込み2a

27. 褐灰色土(粘性弱)
28. 褐灰色砂質土
29. 灰色砂質土(粘性強)

落ち込み2b

30. 黒褐色土(固く. 粘性弱)
31. 褐灰色土(ソフト. 粘性中)
32. 灰色粘質土(粘性強)

落ち込み2c

0　2m

第39図　SK10実測図(S=1:60)

による刺突列点文が施され、３には列点文の下方に緩やかな波状文が巡る。45－７は口縁に沈線状の凹凸が見られるが、これはナデの痕である。肩部に米粒形刺突列点文が施されており、吉備系布留式甕の影響が窺える。小谷３期に相当すると考えられるが、全体に作りが甘く、外来者の手になる可能性も考えられる[10]。45－８は平底を呈する鉢の底部である。内面に指頭痕が見られ、底面は刷毛目調整である。

第46図　１～３は布留式甕系の単純口縁甕である。やや内湾気味であるが、「く」の字状に屈曲する。１の端部は上方に引き上げ、２．３は面を持つ。布留１期[7]に相当しよう。46－４は複合口縁直口壺で、口縁外面にタテミガキが施される。46－５～７は高坏で、刺突痕αを持つ接合である。坏部はヘラミガキ調整を施す。46－８は高坏脚部で、裾部に円形透かしが穿たれる。46－９は口径19.4cmを測る低脚坏である。坏部は直線的に低く開く。46－10．11は鼓形器台である。10は器高13.1cmを測るが、筒部が接合せず、図面上で合成したものである。他の器台と異なり、赤い橙色を呈し、作りがやや粗雑な印象を受ける。外来者の手になるものか。11は受部径19.2cm、器高9.7cmを測る。筒部は狭く、草田７期[11]に相当しよう。46－12は砥石である。４面を使用し、鋭い擦痕が認められる。

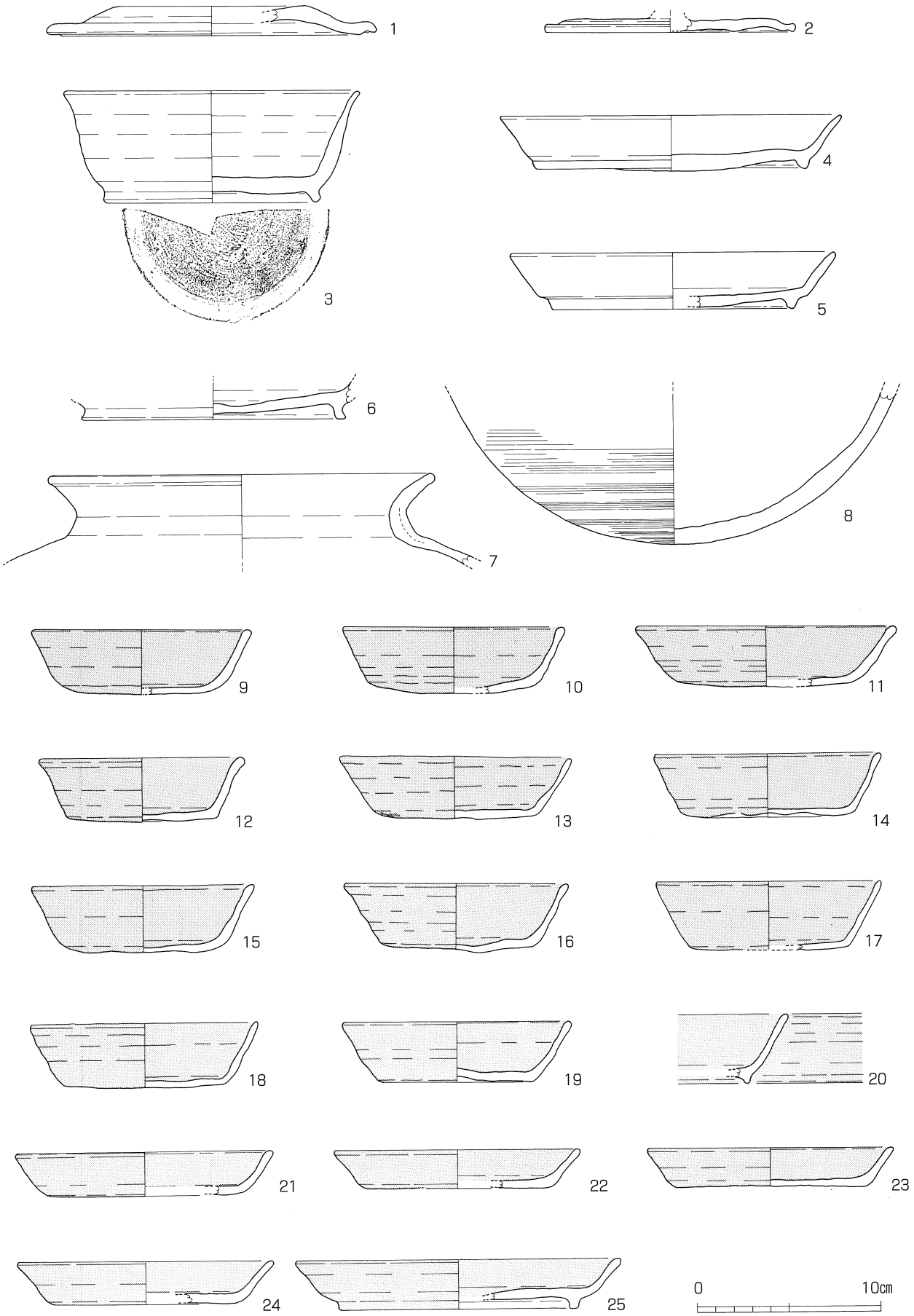
整理作業中、この砥石と中世末のＳＤ０１から出土した砥石（50－５）が接合し、同一個体であることがわかった。ＳＤ０１の砥石がＳＤ０１が掘り込んでいるＳＤ０４からの混入とすると、この砥石は２つに割れた後、別の場所に破棄されたものと考えられる。２つの砥石の出土地点は15m近く離れている。研ぎ面が一致することから、割れた後使われることなく破棄されたと思われる[15]。

Ａ・Ｂ１１Ｇｒ土器溜り（第47図）

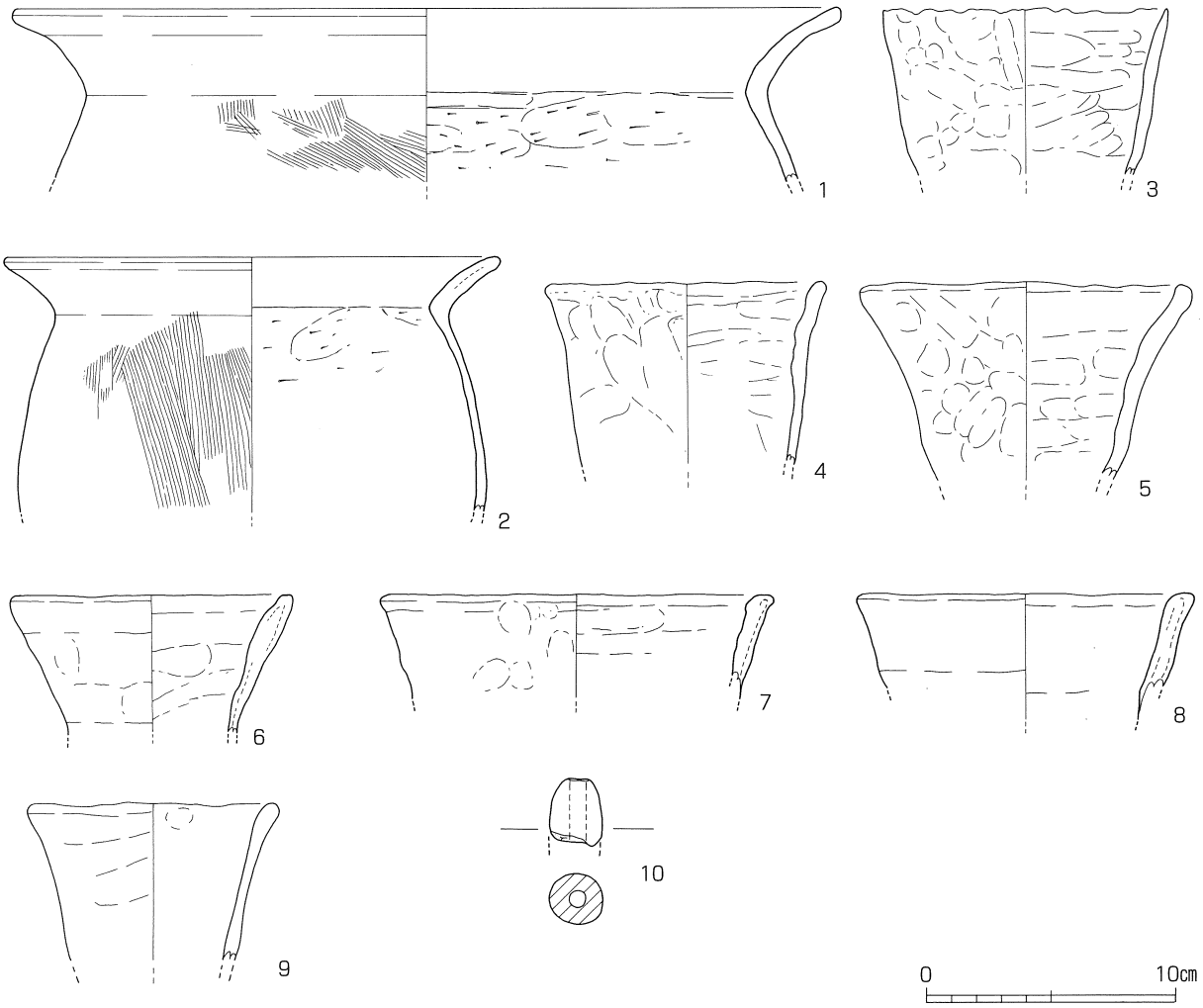
Ａ・Ｂ11グリッドで同様に検出した、土器破片の集まりである。「Ｃ11グリッド土器溜り」との間は攪乱によって遺構面ごと削られてしまっているが、本来はＣ11グリッドから連続して土器破片が堆積していたものと考えられ、攪乱内で同様の土器破片を多量に収集した。土器溜りは古墳時代前期前葉に埋まったと思われる、ＳＤ０３と０４のほぼ中間に位置している。地山がやや低くなっている５層の落ち込み状になった範囲で、土器が堆積したものと考えられる。

遺物のほとんどは小谷２期（草田７）のもので、小谷３期に入る遺物も若干見られる。ＳＤ０３・０４との時期差はほとんどなく、これらの溝が最終的に埋没する段階で、形成されたものと考えられる。

出土遺物（第48図）　１～７は複合口縁の甕である。ほとんどの口縁端部は平坦面を持つ松山編年による口縁Ⅱ類[6]に相当するが、３はやや丸みを持ち、１は玉縁状に膨らむ。口縁の稜は６を除いて甘く突出する。頸部のやや下がった位置から始まる内面の削りは、肩部まではヨコ方向、以下は斜め方向になる。外面の調整は横方向の刷毛目が主で、６．７には荒い刷毛目が見られる。また、６の肩部にはハケ原体による刺突文が施される。２点づつ付けられたように見えるが、１回の刺突によって間が途切れたように施文されている。この刺突文は一巡しない。いずれの甕も器壁が厚く、胴部下半を欠いているが、おそらく丸底を呈するものと考えられ、小谷１～２期に相当するものと思われる。８は受部径17.8cm、脚部径16.8cmを測り、器高10cmに満たないやや小型の鼓形器台である。脚部内面にヘラ描きの線刻が2本並行して施されている。同様の線刻はＳＤ０３の鼓形器台（60－５）や高坏脚部



第40図　SK10出土遺物実測図1(S=1:3)



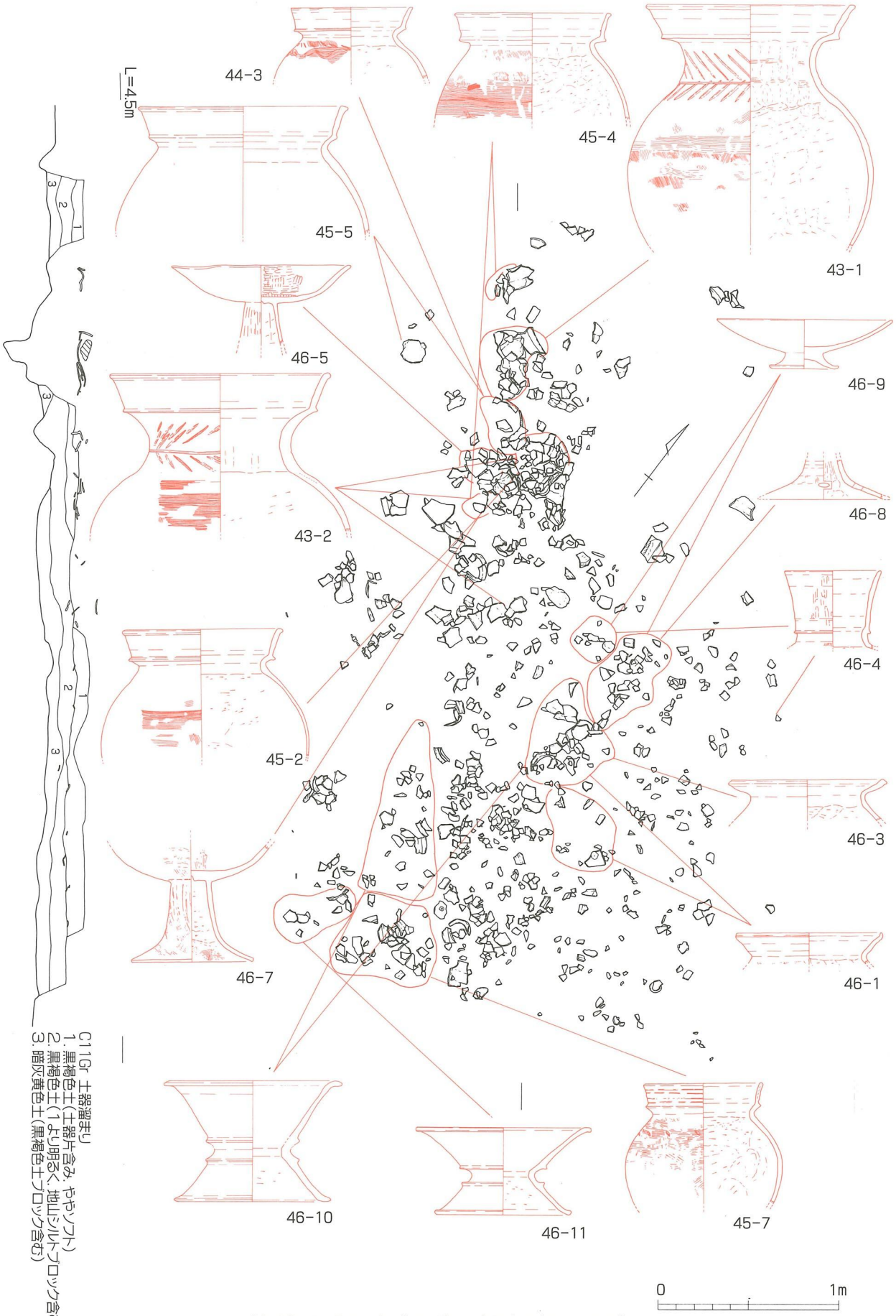
第41図　SK10出土遺物実測図2(S=1:3)

(59－18) にも見られる。制作者の何らかの記号であろうか。9は口径27.4cm、底径19.3cm、器高15.8cmを測る大型の高坏である。段を有する坏部は緩やかに口縁が外反し、脚部は低く大きく開く。ともに端部に平坦面を持つ。脚部の外面は刷毛目、内面は削り調整で、坏部は全体に丁寧なナデが施される。接合部に径４㎜、深さ８㎜の刺突痕が確認される。裾部欠損部に円形透かしの痕が確認される。10は土師器の小皿である。底部は回転糸切り離しで、轆轤成形時のナデ痕が顕著である。ＳＸ０１から同種の小皿が出土しており、ＳＸ０１が土器溜りを掘り込んでいることから、10はＳＸ０１からの混入と考えられる。

9．溝状遺構（第49図～72図）

ＳＤ０１・０２（第49図）

調査区の東端で検出した溝で、平行して南東方向から北西方向に向かって走っている。この２本の溝はＳＫ０１とＳＥ０２を切っており、さらに古い遺構であるＳＤ０４を切って掘られている。巾はＳＤ０１が1.0～1.6m、ＳＤ０２が1.4～1.8mを測り、深さはともに60cm程で、逆台形の断面を呈す。覆土からは須恵器・土師器の破片とともに青白磁の破片がわずかに出土しており、中世の利水目的の溝



第42図　C11Gr土器溜り実測図(S=1:30)

と考えられる。

出土遺物の中には、弥生時代終末から古墳時代前期前葉にかけての土器破片が何点か見られたが、ＳＤ０１．０２が切っているＳＤ０４からの混入品と考えられる。ＳＤ０１．０２とも、底面のレベルは北側で標高3.9m前後、南側で4.0m前後と、南から北に向かってわずかに下る。

ＳＤ０１・０２出土遺物（第50．51図）

50－１は弥生時代後期前葉の甕で、口縁に４条の沈線が施される。ＳＤ０１が切っているＳＤ０４からの混入と考えられる。50－２は貼付高台を持つ須恵器坏である。体部外面に２本の線刻が見られる。上部が欠損しており、文字としては読めない。何らかの記号であろうか。50－３は須恵器の灯明皿である。口径10cm、器高2.8cmを測り、口縁部は鋭く外反する。底面は回転糸切り離し後ナデ調整され、内面の一部には自然釉が付着している。「三田谷Ｉ遺跡ＳＤ０６[12]」や「湯峠遺跡」において類似の灯明皿が出土しており、奈良時代後半に相定される。50－５は砥石である。細かな砂岩質で、４面を使用している。Ｃ１１Ｇｒ土器溜まり出土の砥石（46－12）と接合した

51－１は複合口縁の甕である。ヨコ刷毛目調整された肩部に刺突列点文が施される。小谷１期に相当する。51－２～５は布留式系の単純口縁甕である。いずれも「く」の字状に開き、端部に面を作る。51－７は須恵器高坏の脚部である。51－６は高台付の土師器で、口縁部を欠くが皿になるものと思われる。

ＳＤ０１からは李朝の施柚陶器である紛青沙器の皿が１点（50－４）出土している。釉薬は薄く、やや粗雑な印象を受ける。同様の紛青沙器は「大井谷Ⅱ遺跡」においても報告例がある[13]。ＳＤ０２からは同じく李朝と思われる白磁椀の底部（51－８）が出土している。この白磁椀の底部には、断面に４ヶ所、高台に１ヶ所鋭い刻み目が見られる。破損後砥石として転用したものであろうか。いずれも16世紀代の物と思われる。また、刀子状の鉄製品が１点（51－９）出土している。

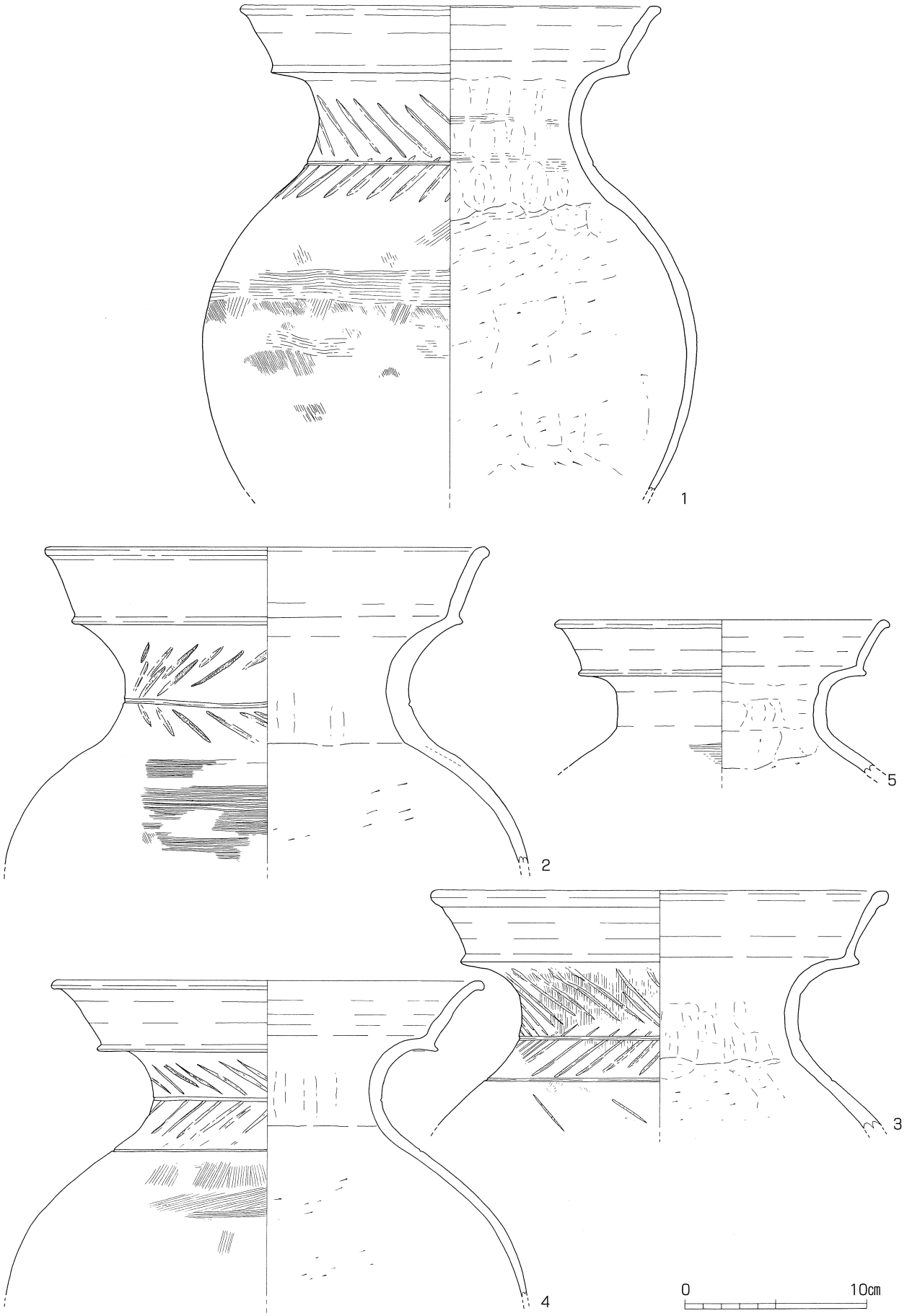
これらの遺物のうち、51－１～５はＳＤ０２が切っているＳＤ０４からの流れ込みと考えられる。50－３、51－６．７もＳＤ０２に伴うものではないと考えられる。遺構ＳＤ０１．０２の埋まった時期は、ほぼ中世末（16世紀）と考えられる。

ＳＤ０３（第52図）

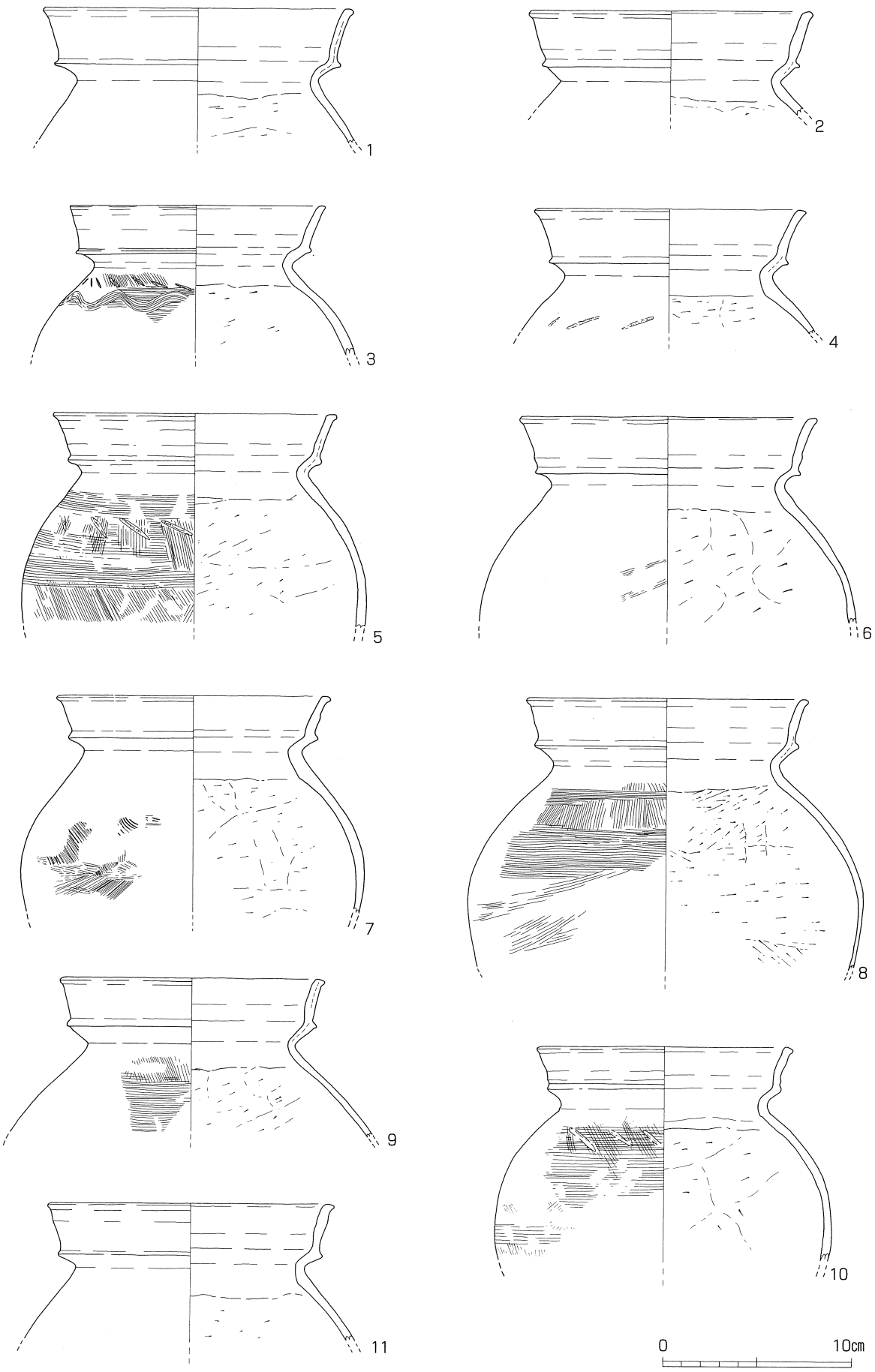
調査区の中央から東の部分で、南北に走る大溝である。次に記述するＳＤ０４と同様やや東に向かって湾曲している。巾は最大で6.0mを測るが、北側と南側の東肩は攪乱により大きく削られている。断面は皿状を呈し、深さ90cmを測る。何回かの堀直しが行われ、巾広の大溝となったと考えられる。

遺物の出土状況を見ると、弥生時代中期後葉から後期前葉にかけての遺物を多く出土する下層と、弥生時代終末から古墳時代前期前葉にかけての遺物を多く出土する上層に分けられる。中心より東寄りで黒褐色土が溝状に堆積しており、その中で古墳時代前期前葉の土器が列状に密集して出土している。ほとんどは破片であるが、復元可能な個体も多くあり、まとめて廃棄されたものと思われる。遺物の中には畿内系の布留式系土器も若干見られる。この土器の列状に出土している部分が、最終的に埋まった溝と考えられる。

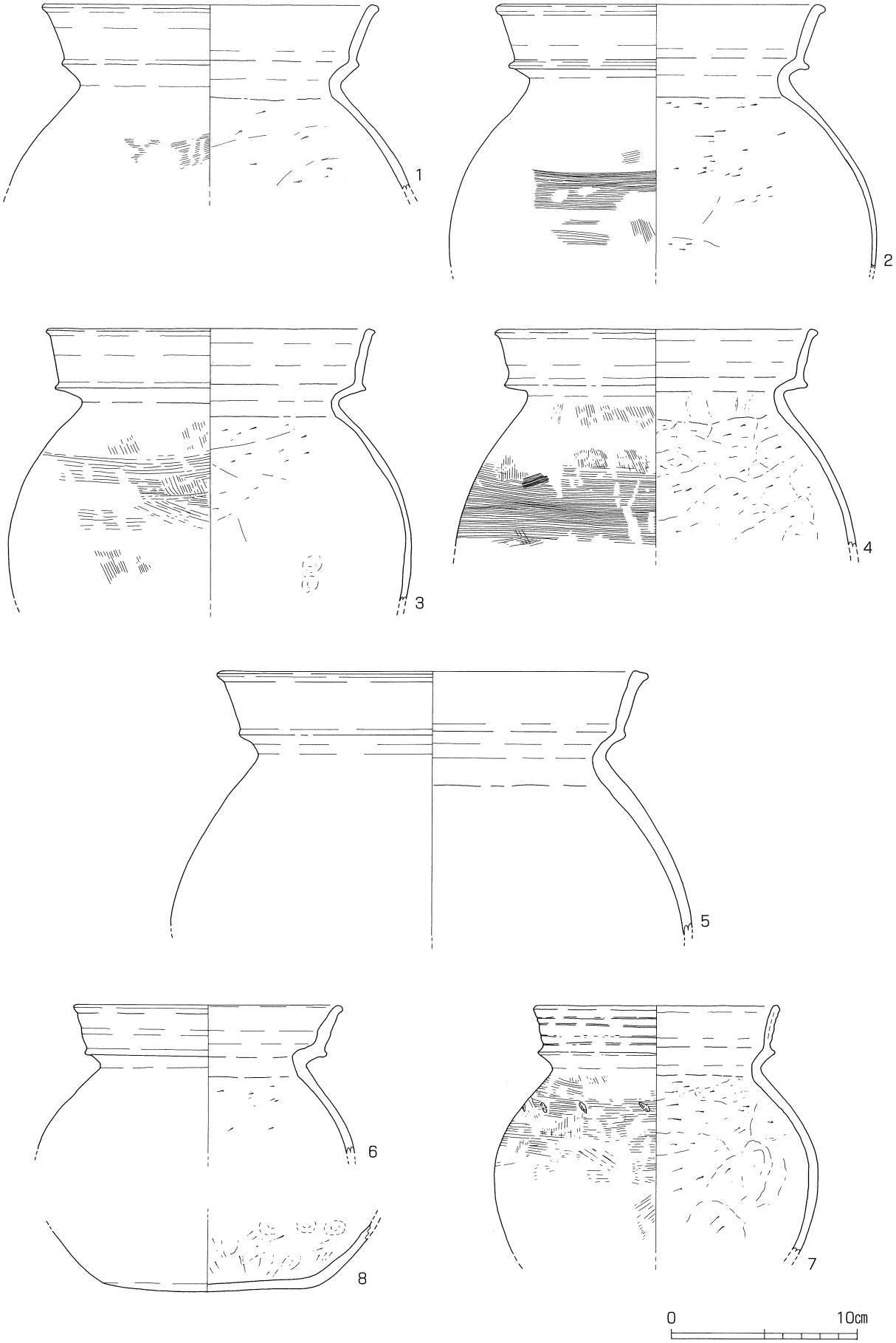
土層の観察から、大きく分けてＩ～Ｖの掘り直しが行われたものと考えられる。Ｉの１．２層に草



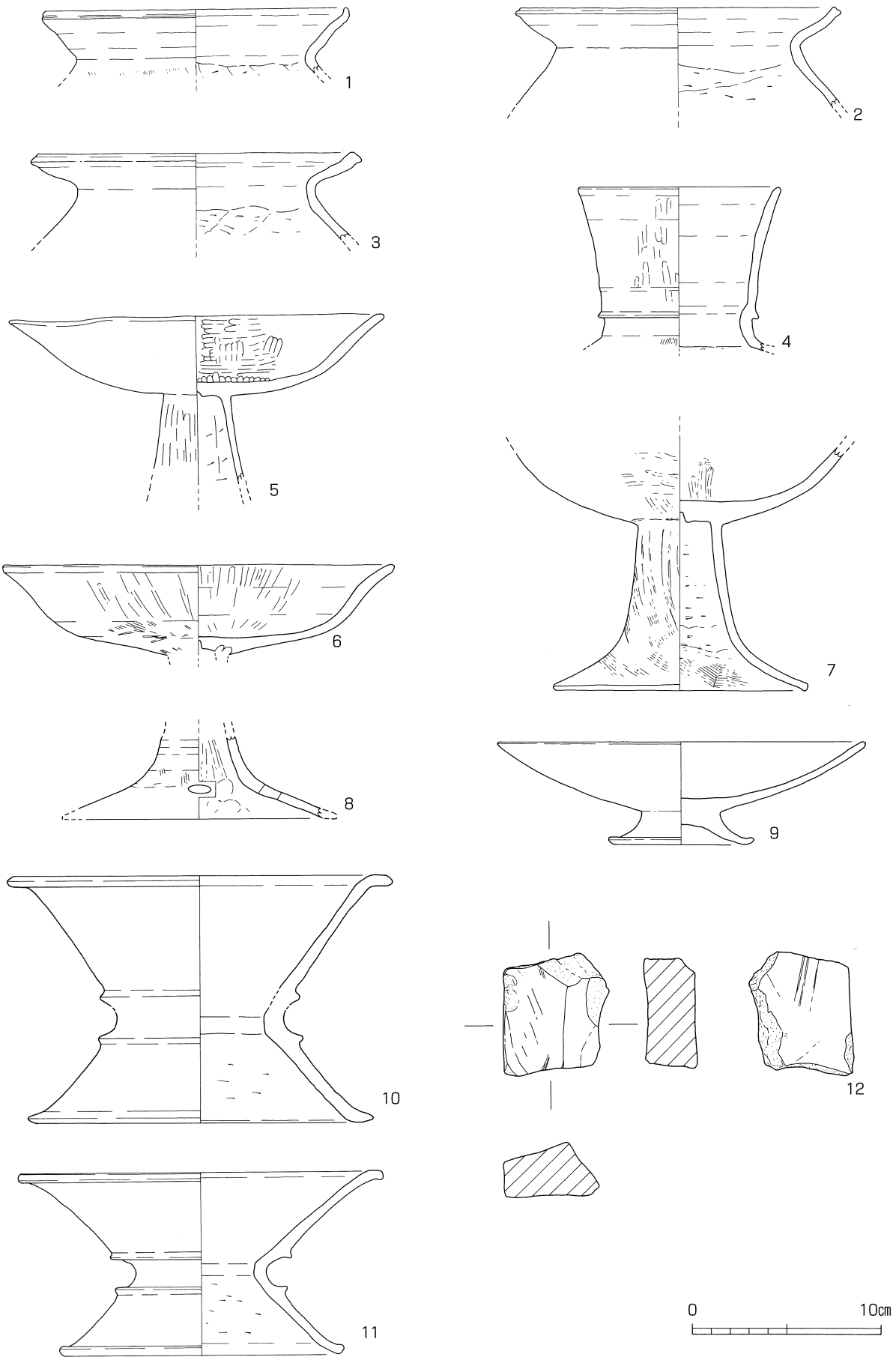
第43図　C11Gr土器溜り出土遺物実測図1(S=1:3)



第44図　C11Gr土器溜り出土遺物実測図2(S=1:3)

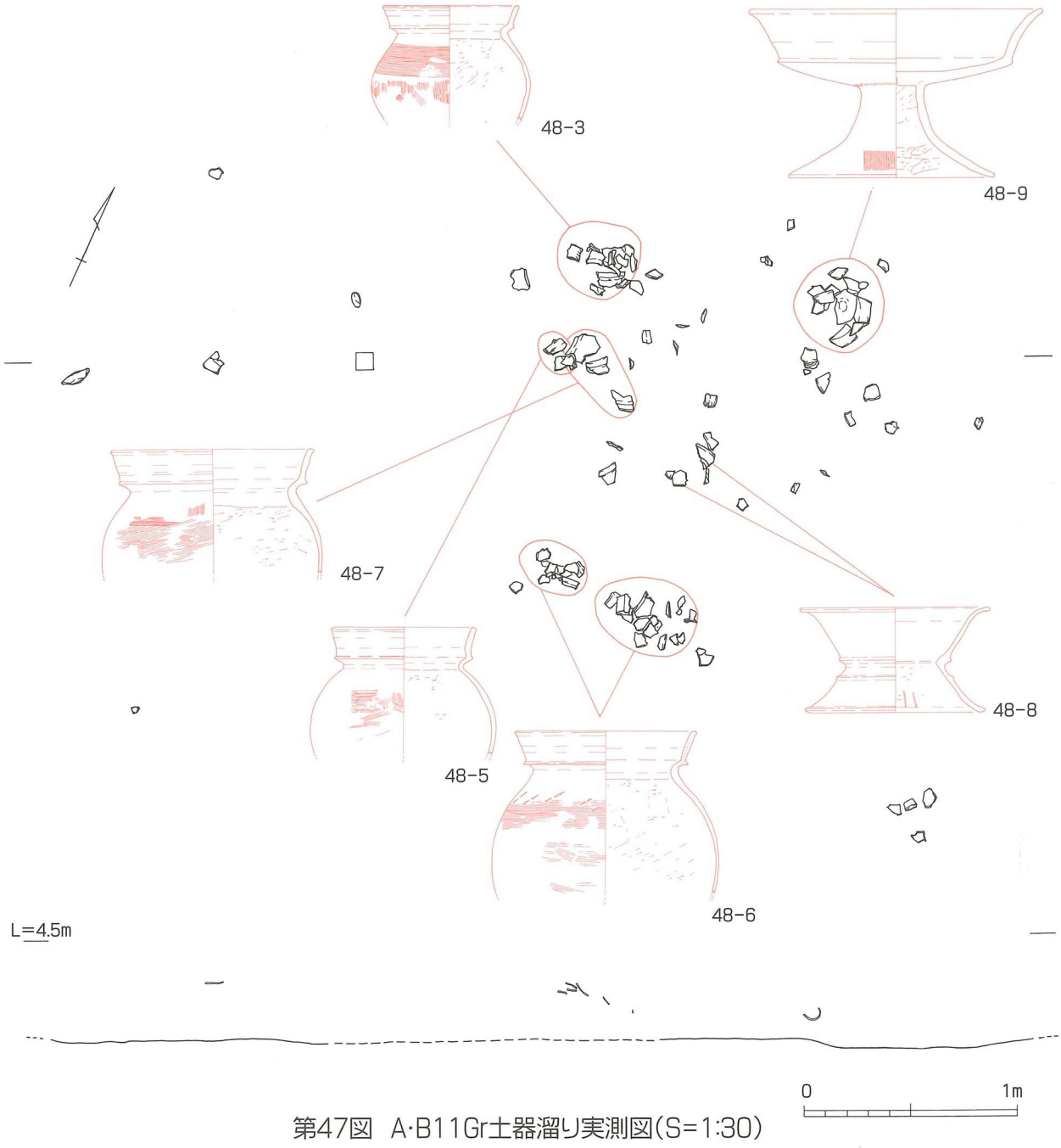


第45図　C11Gr土器溜り出土遺物実測図3(S=1:3)

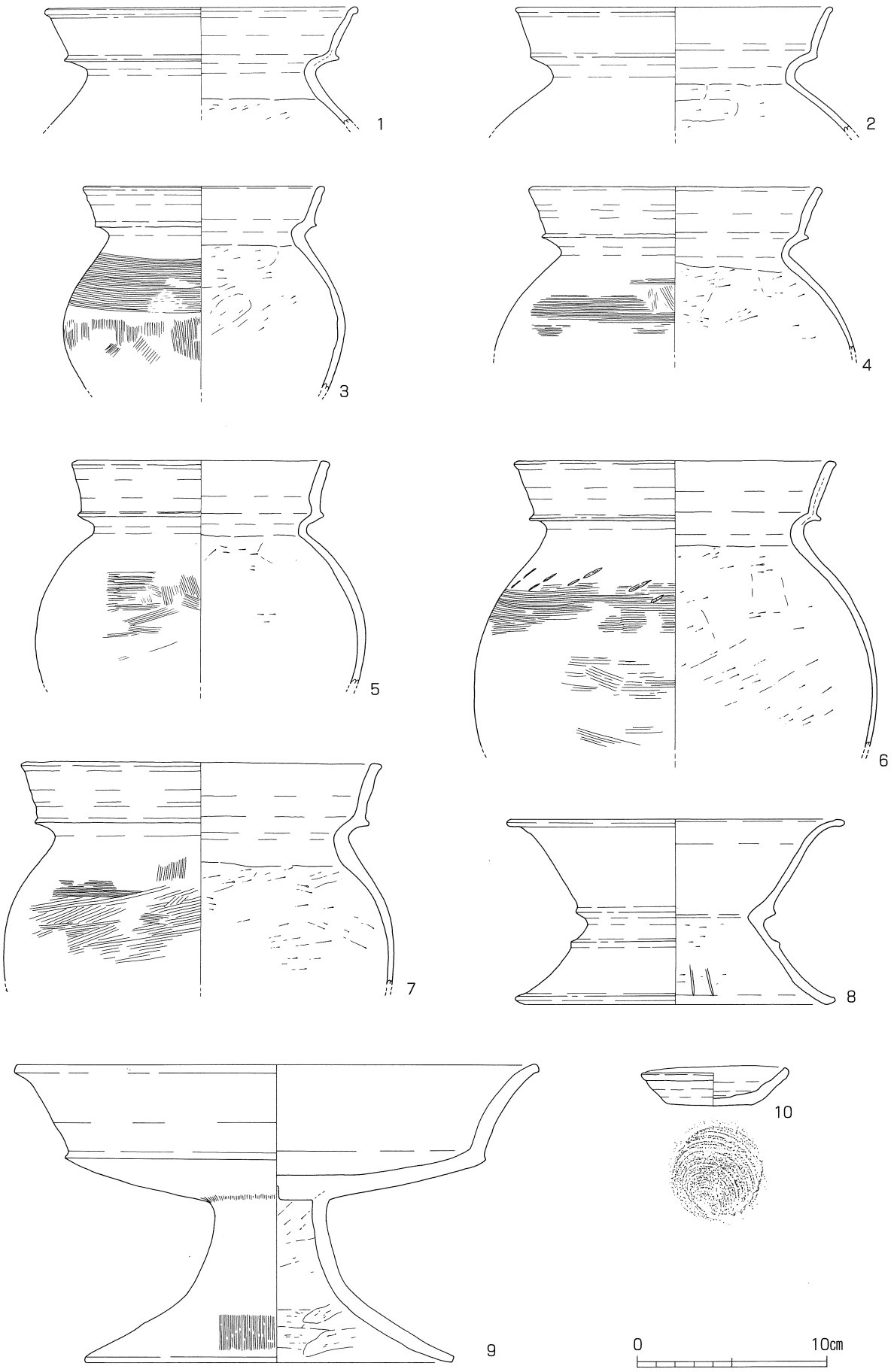


第46図　C11Gr土器溜り出土遺物実測図4(S=1:3)

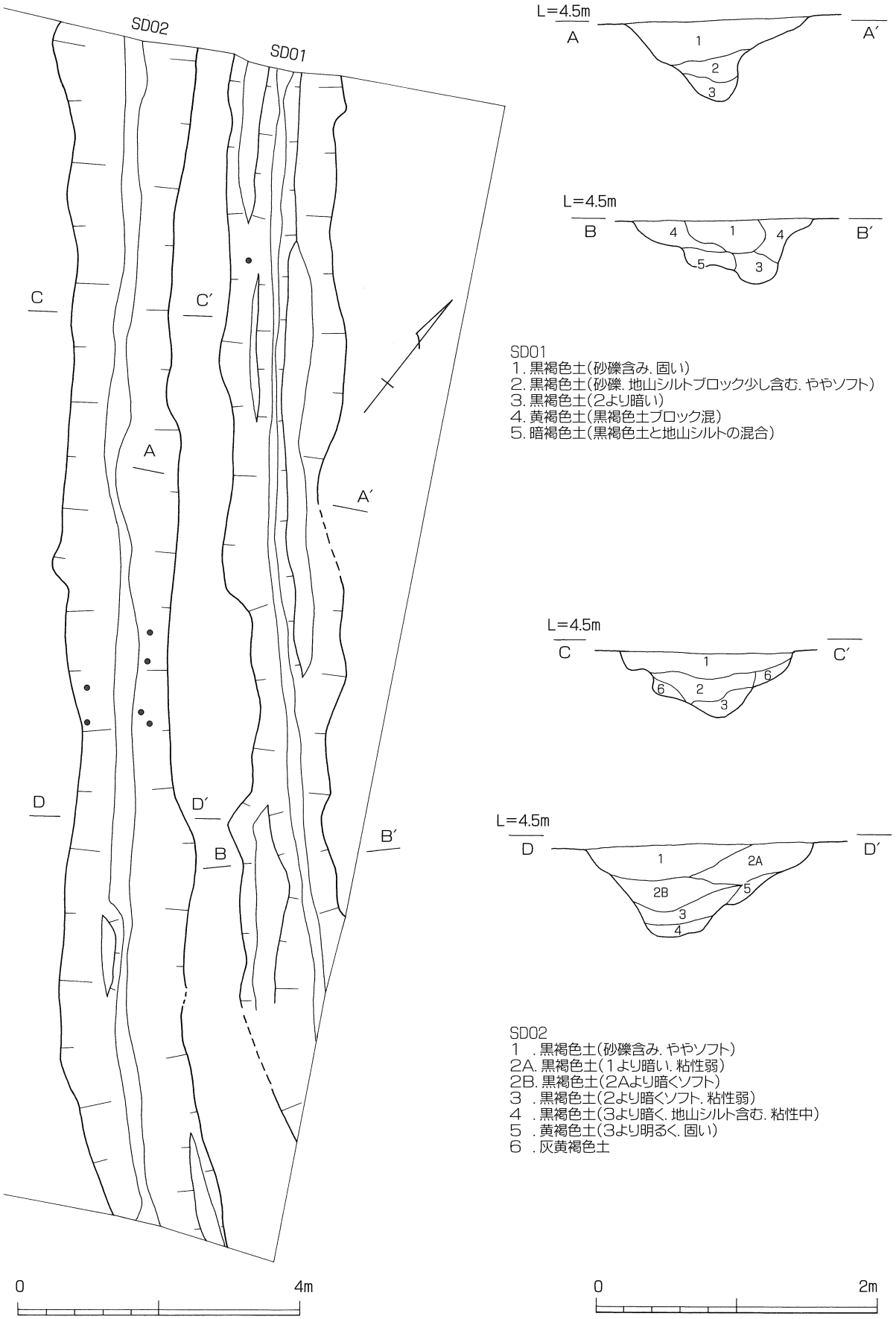
田６新～７期（小谷２期）の遺物が集中しており、この落ち込みがＳＤ０３の最終段階の溝と考えられる。１．２層はその上層に当たるが、上層が後世に削平されていることを考えると、本来の溝の中では中層に位置するものと思われる。ⅡはⅠの西側に掘られており、そのうちで何回かの掘り直しが行われたことが土層から窺える。埋土からの出土はまばらで、遺物は弥生時代終末から古墳時代前期前葉にかけての遺物がほとんどであるため、Ⅰとの時期差はあまりないものと考えられる。Ⅲ・Ⅳの段階で弥生時代後期前葉の遺物を含むが、Ⅴは弥生時代後期前葉の遺物を主に含み、弥生時代中期後葉の土器片が数点見られることから、最初の溝は弥生時代中期後葉に掘削され、後期前葉に埋没したものと考えられる。古段階の溝Ⅴはその完掘状況を見るとゆるやかな「Ｓ」字状になっており、当初は溝幅も細く、環濠といえる規模ではなかった可能性も考えられる。その後、時期をおかずしてⅢ・Ⅳと掘り直される過程で大溝化したものと考えられる。



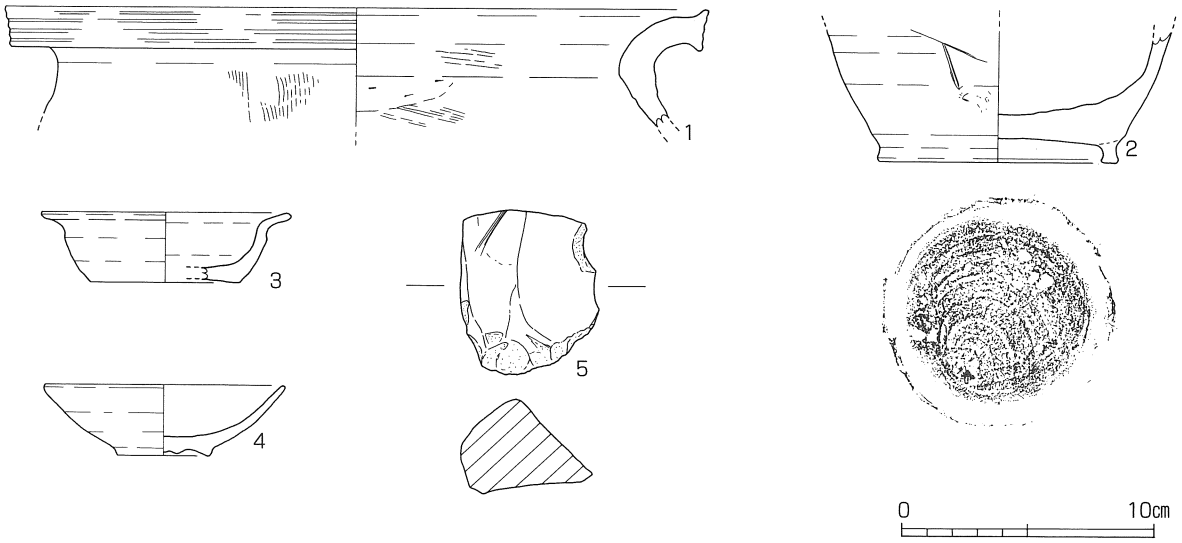
第47図　A·B11Gr土器溜り実測図(S=1:30)



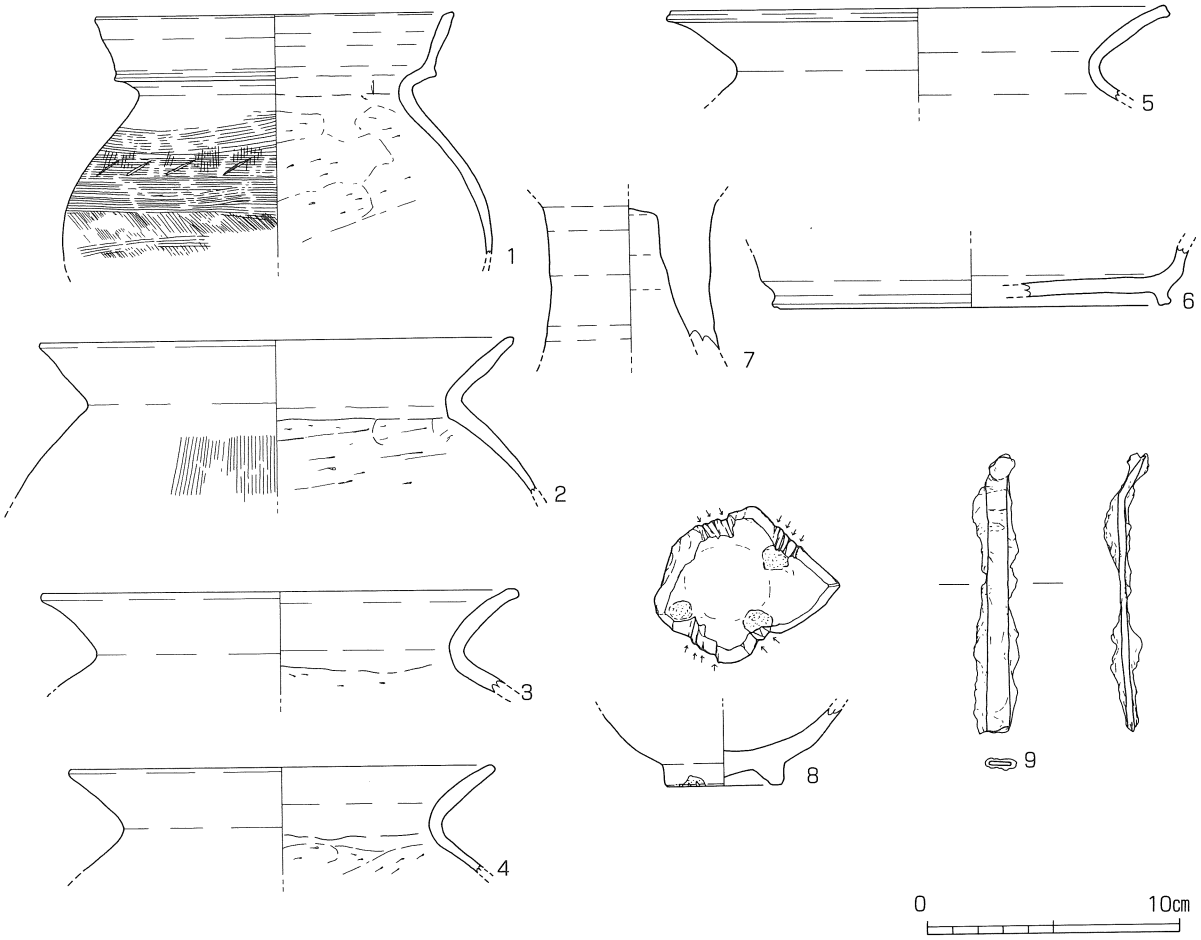
第48図　A·B11Gr土器溜り出土遺物実測図(S=1:3)



第49図　SD01·02実測図(遺構 S=1:80)(土層 S=1:40)



第50図　SD01実測出土遺物図(S=1:3)



第51図　SD02実測出土遺物図(S=1:3)

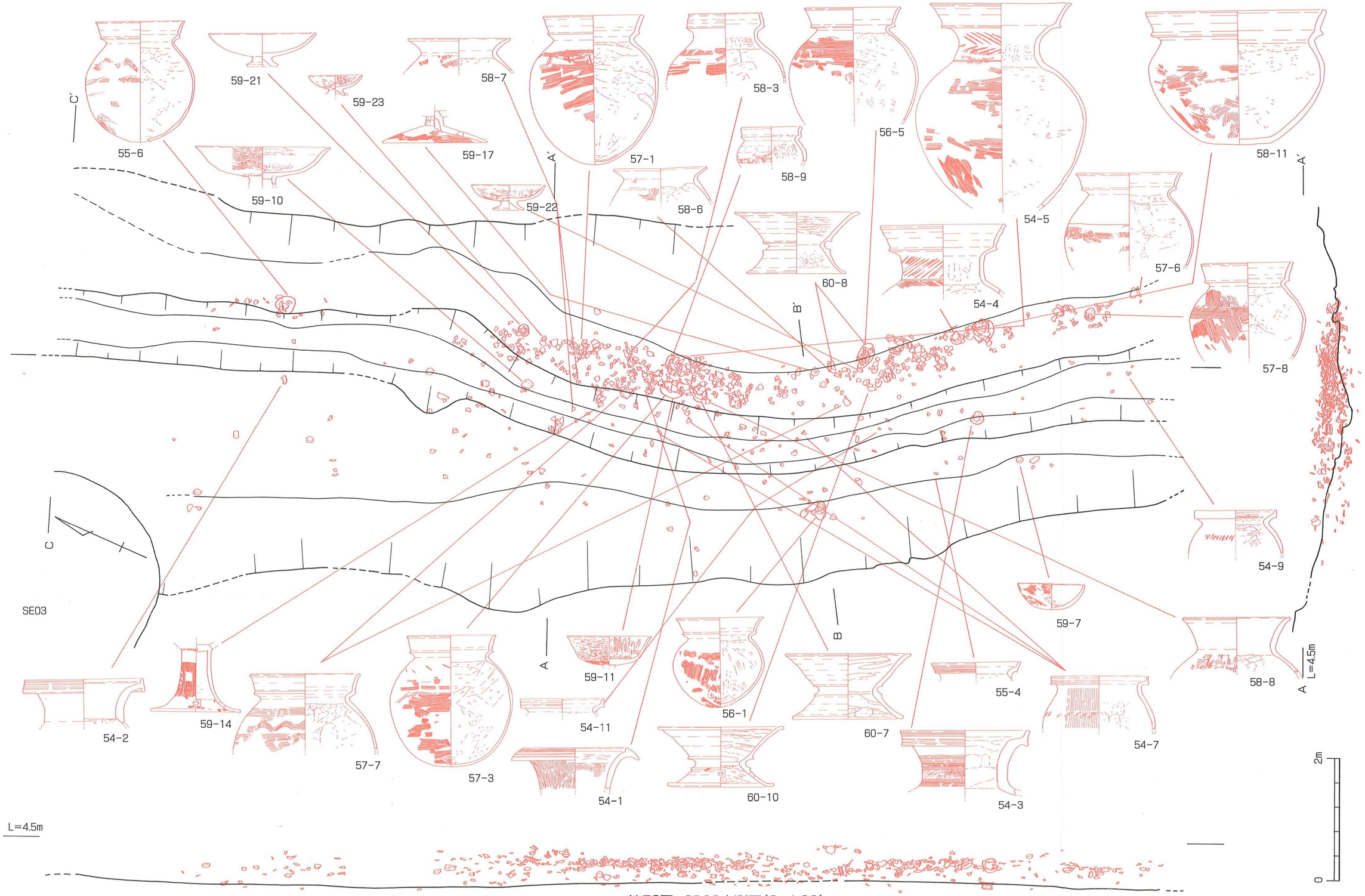
ＳＤ０３出土遺物（第54～60図）

第54図１は広口壺の口縁部である。口縁に５条の凹線が施され、内外とも刷毛目調整である。下層より出土しており、弥生時代中期後葉の壺と考えられる。２．３は弥生時代後期前葉の壺で、橙色を呈す。拡張した口縁に４条の櫛描き凹線を施し、３の頸部には擬凹線文に区画された中に、細かな波状文が巡る。草田１期に相当する。４．５は複合口縁細頸壺である。頸部に板状工具の刺突による羽状文が施される。４は間に沈線が１条入って有軸となる。刺突文は上段が長く刺突される。頸部内面には指のなでつけ痕が見られる。５は底部を欠いた状態で、33.6cmの器高を測る。これらの壺は小谷２期に相当する。６は直口壺の口縁部である。７．８は弥生時代中期後葉の甕である。７はタテ刷毛目調整された胴部に、板状工具の木口による刺突列点文が巡る。８は口縁を欠くが、７と同様タテ刷毛目の上に、小豆状の刺突列点文が巡る。内面胴部下半は削り、上半部には刷毛目と指圧痕が残る。

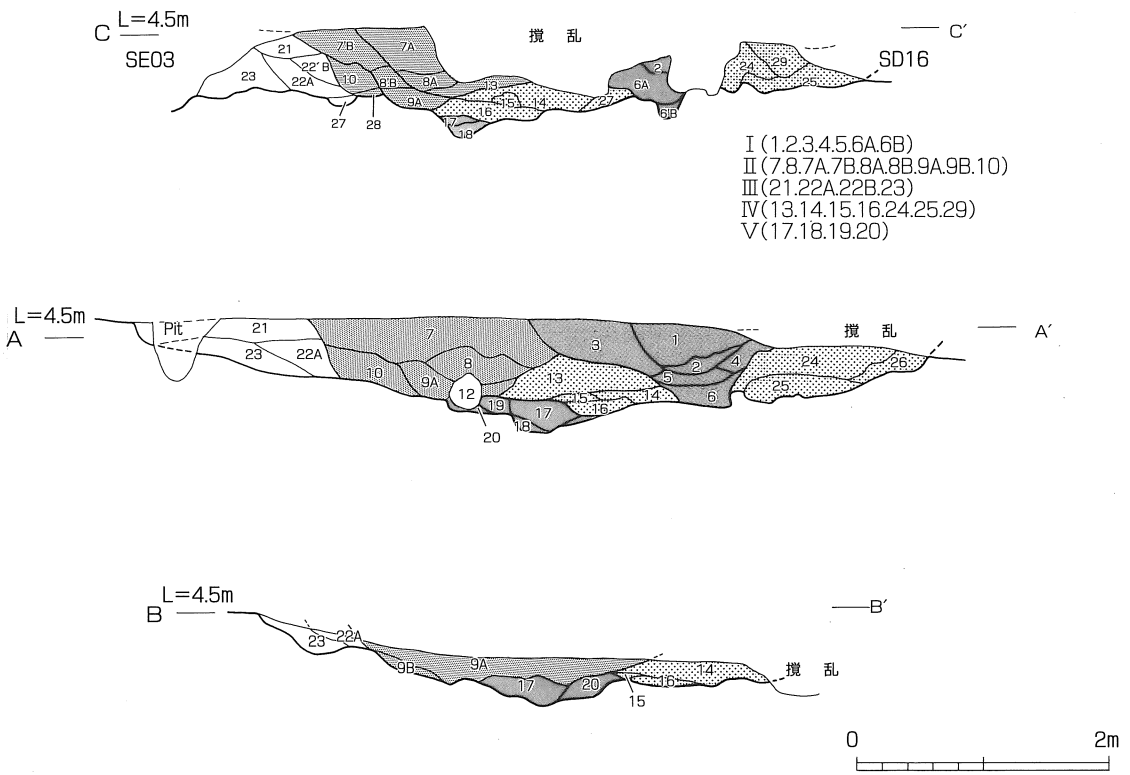
第54図９～11、第55図１～４は弥生時代後期前葉の甕である。54－９の肩部には木口による刺突列点文が施される。55－２の口縁はややダレて拡張し、擬凹線も不明瞭である。胴部に小さな刺突列点文が施される。３．４は口縁の形状から草田１期に相当しよう。５は拡張した口縁に貝殻複縁による沈線が施される。草田３期に相当する。

第55図６～10、第56図１～７、第57図１～８、第58図１～２は複合口縁の甕である。55－６～８は全体に器壁が薄く、口縁端部は外側につまみ出す。６の肩部には櫛状工具による波状文が施され、底部は痕跡的平底になると思われる。これらの甕は草田６期に相当する。９の胴下半部は荒いヨコ刷毛目調整され、肩部には板状工具による刺突列点文が施される。10は長胴の体部で、上半部は細かなヨコ刷毛目、下半部はタテ刷毛目で調整され、内面の調整もそれに対応するように上半部が横方向の削り、下半部は削りの後指ナデの指圧痕が残る。口縁端部外側にも面を作る。９．10は小谷1期に相当しよう。

第56図１～５の甕の口縁はいずれも端部を外側に引き出して面を作るものである。１は口径13.6cm、器高14.6cmを測る小型の甕で、やや尖り気味の丸底を呈す。肩部外面にはヨコ刷毛目の後細かな波状文が巡り、タテ刷毛目調整された胴下半にはススが付着している。内面下半部には指のナデ上げ痕が残る。また、底部近くには小さな穿孔があり、廃棄時に穿たれたものと思われる。小谷１期に相当するものと考えられる。この甕は列状に出土した土器群からやや西にはずれた位置で、ほぼ完形の状態で出土しており、最終的に埋まった溝Ｉの前段階の溝の遺物と考えられる。２は口径17.8cmに対して器高19.1cmを測る扁平な甕である。類似の土器は「古志本郷遺跡」や鹿島町の「南講武草田遺跡」からも出土している。底部は薄く幅広の平底をなす。胴上半部外面はヨコ刷毛目、下半部はタテ刷毛目が施されるが、底部に向かって消えていく。胴中央部はススにより黒変している。内面は胴上半部がヨコ削り、下半部がタテ方向の削りに指頭痕が見られ、底にかけて指でナデ上げられる。底には焦げ付きの痕が残る。３．４は18～19cmの口径を測る甕で、体部は球形をなすが、３はやや張った胴部を持つ。いずれも胴上半部は外面がヨコ刷毛目、内面はヨコまたは斜め方向の削り、下半部は外面タテ刷毛目、内面はタテ方向の削りに指圧痕が残る。６．７は口縁が肥厚し、端部外側に面を作る。ともに上半部はヨコ刷毛目調整され、肩部に浅い刺突列点文が巡る。６の底部内面には指圧痕が顕著に見られる。「姫原西遺跡ＳＫ１７」から類似の甕が出土している。



第52図　SD03実測図(S=1:60)



1 .黒褐色土(土器片多く含む)
2 .黒褐色土(しまっている)
3 .黒褐色土(暗褐色土ブロック混)
4 .黒褐色土(ややソフト)
5 .黒褐色土(4より明るい)
6 . 黒褐色土 (黒褐色土. 地山シルトをブロック状に含む)
6B. 暗灰黄色土(6より砂質)
7B. 黒褐色土(7Aより明るくソフト)
8A. 黒褐色土(暗褐色土ブロック混)
8B. 黒褐色土(8Aより明るい)
9A. 黒褐色土(砂礫多く含み. 固い)
9B. 暗灰色砂質土
10 .暗褐色土(固い)
11 .暗灰黄色土
12 .暗褐色土
13 .黒褐色土(土器片含む)
14 .暗褐色土(暗灰色砂ブロック混. 固い)
15 .黒褐色砂質土
16 .黒褐色土(ややソフト)
17 .暗褐色土(暗灰色砂ブロック混)
18 .暗灰黄色砂質土(もろい)
19 .灰黄色土
20 .暗灰色砂
21 .黒褐色土(7層より明るい)
22A. 暗褐色土
22B. 暗褐色土(22Aより暗い)
23 .灰黄色土(やや砂質)
24 .暗灰黄色土(黒褐色土ブロック混)
25 .暗灰黄色土(24より明るい)
26 .灰黄色土
27 .灰黄色土(ソフト)
28 .暗灰黄色土(ソフト)
29 .黒褐色土
24.25層に近い

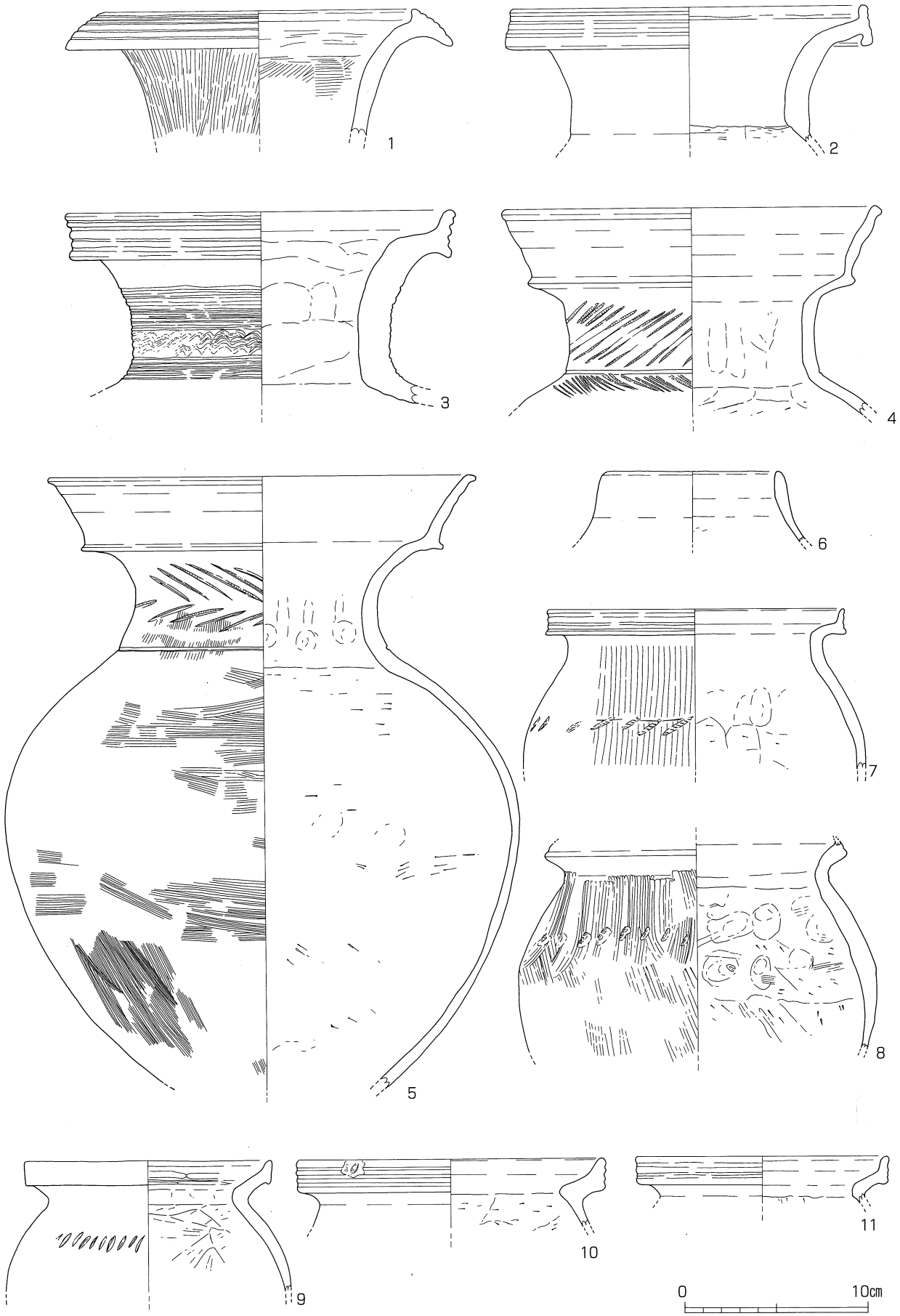
第53図 SD03土層図(S=1:60)

これらの甕は概ね小谷２期に相当するものと考えられる。

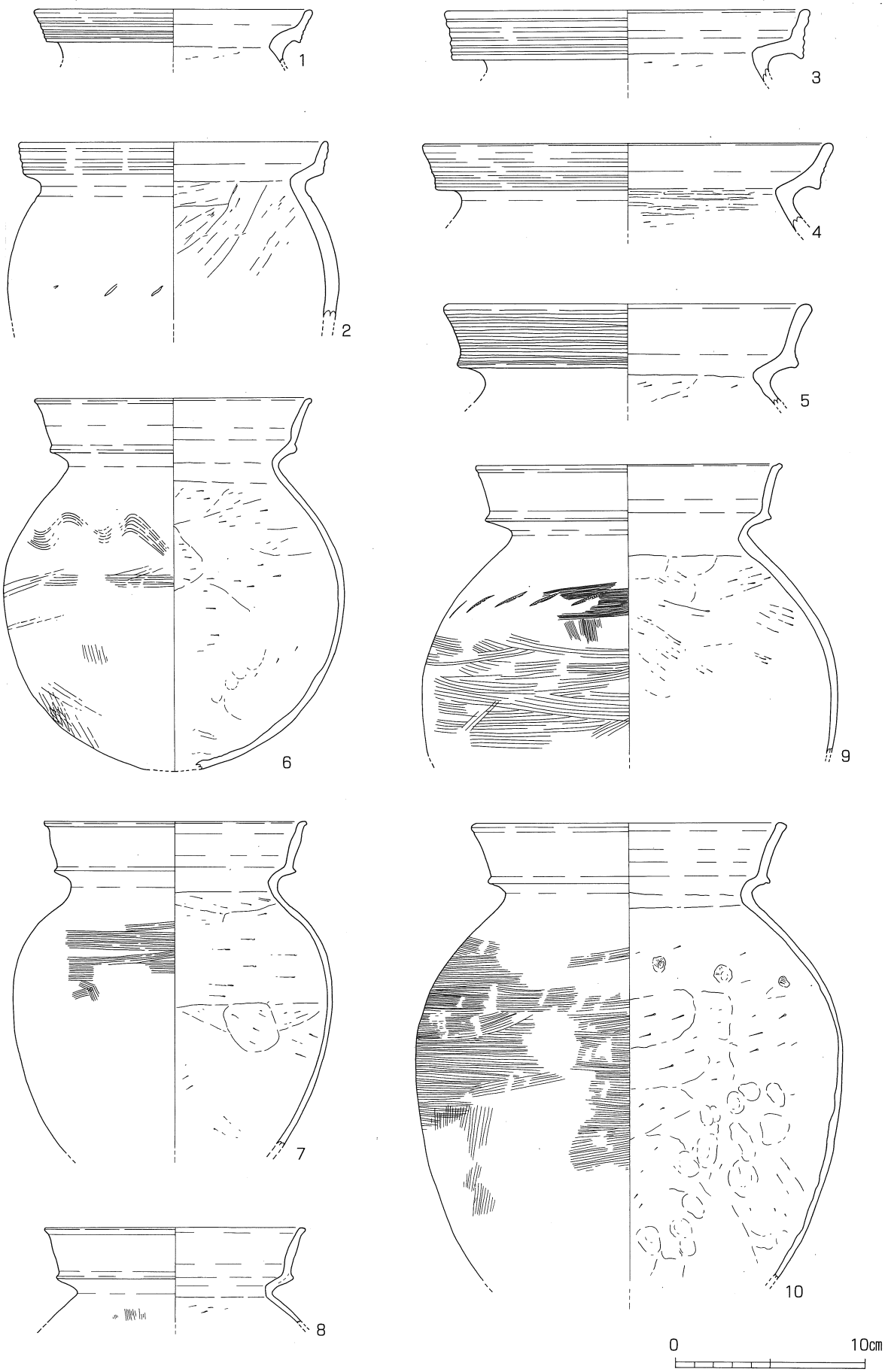
第57図１は肥厚した口縁端部に平坦面を持つ。体部は倒卵形を呈し、丸底をなす。外面の調整はヨコまたは斜め方向の刷毛目で、下半部ははっきりしない。肩部には帯状に施された刷毛目の上に板状工具による刺突列点文が巡る。底部内面には指のナデ上げ痕が見られ、焦げ痕が残る。**２**は肩部に弱いタテ刷毛目の後、長さ１cmほどの刺突文を施す。**３**．**４**は口径13～14cmを測り、肥厚した口縁が先細りになる端部に面を作る。体部は球形を呈し、肩部には板状工具による刺突文が簡略的に施される。外面の調整は底部までヨコ刷毛目が施され、内面下半部には指圧痕とナデつけ痕が見られる。**５～７**は口径16～18cmを測る甕である。複合口縁の稜は甘い作りで、端部は外側に肥厚して面を持つ。**５**は板状工具による刺突列点文が、**６**はヘラ描きの沈線が、**７**は櫛状工具による波状文がそれぞれ肩部に巡る。内面頸部直下の削りが始まる部分に指圧痕が見られる。**５**には肩部にも指圧痕とナデつけの痕が見られ、それは外面の刺突文に対応しているようである。**８**は短く肥厚する口縁で、タテ刷毛目の後につけられたヨコ刷毛目の上に、長さ1.4cmの刺突文が施されるが周巡しない。

これらの甕は概ね小谷２期に相当するものであるが、**８**は小谷３期に入る可能性がある。

第58図１は小谷２～３期に入ると思われる甕で、器壁が厚く、ダレた稜の作りである。頸部内面に指圧痕が見られ、外面には刺突列点文を施す。**２**は口径22cmを測る中型の甕で、小谷２期に相当する。

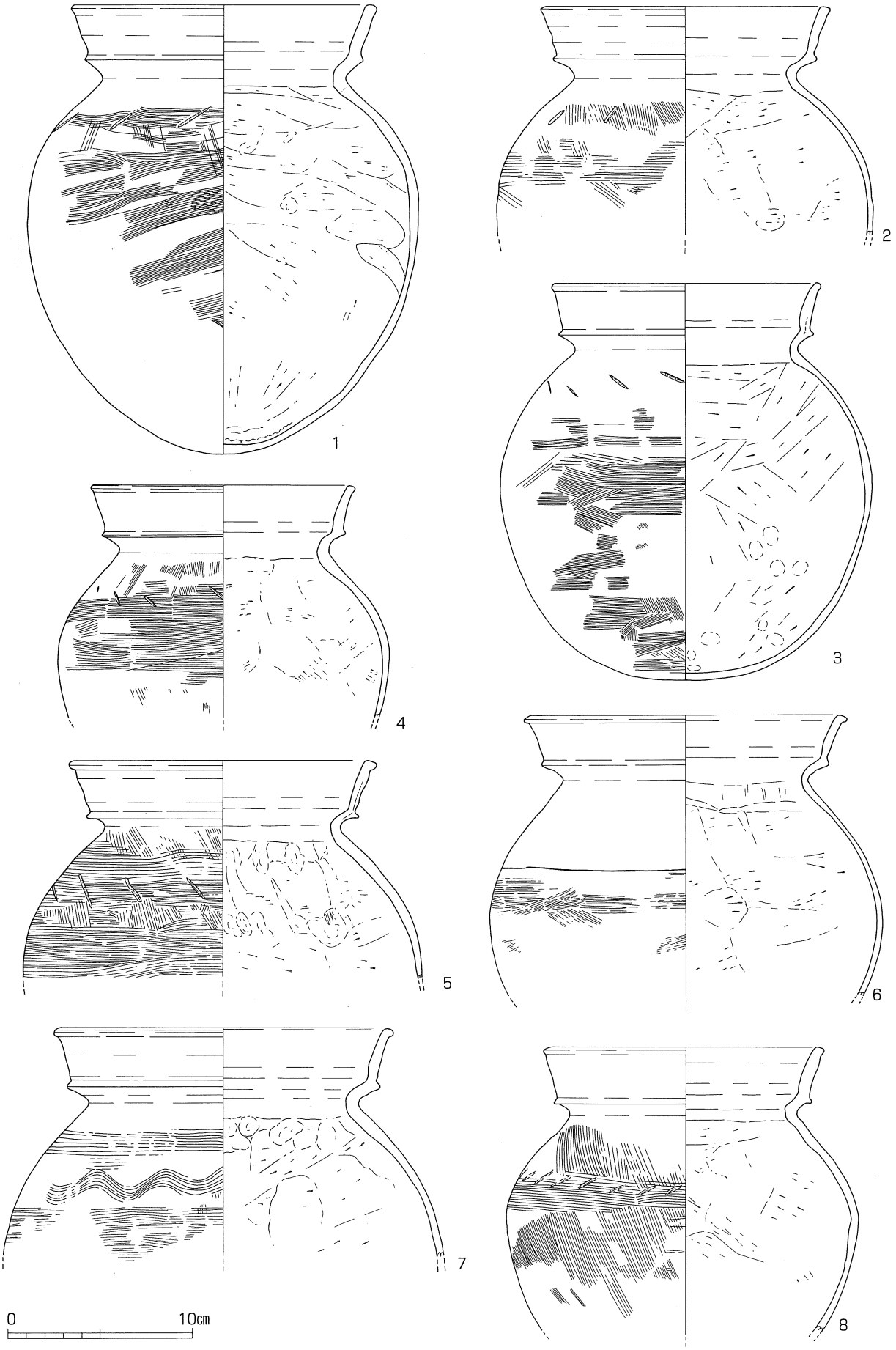


第54図　SD03出土遺物実測図1(S=1:3)

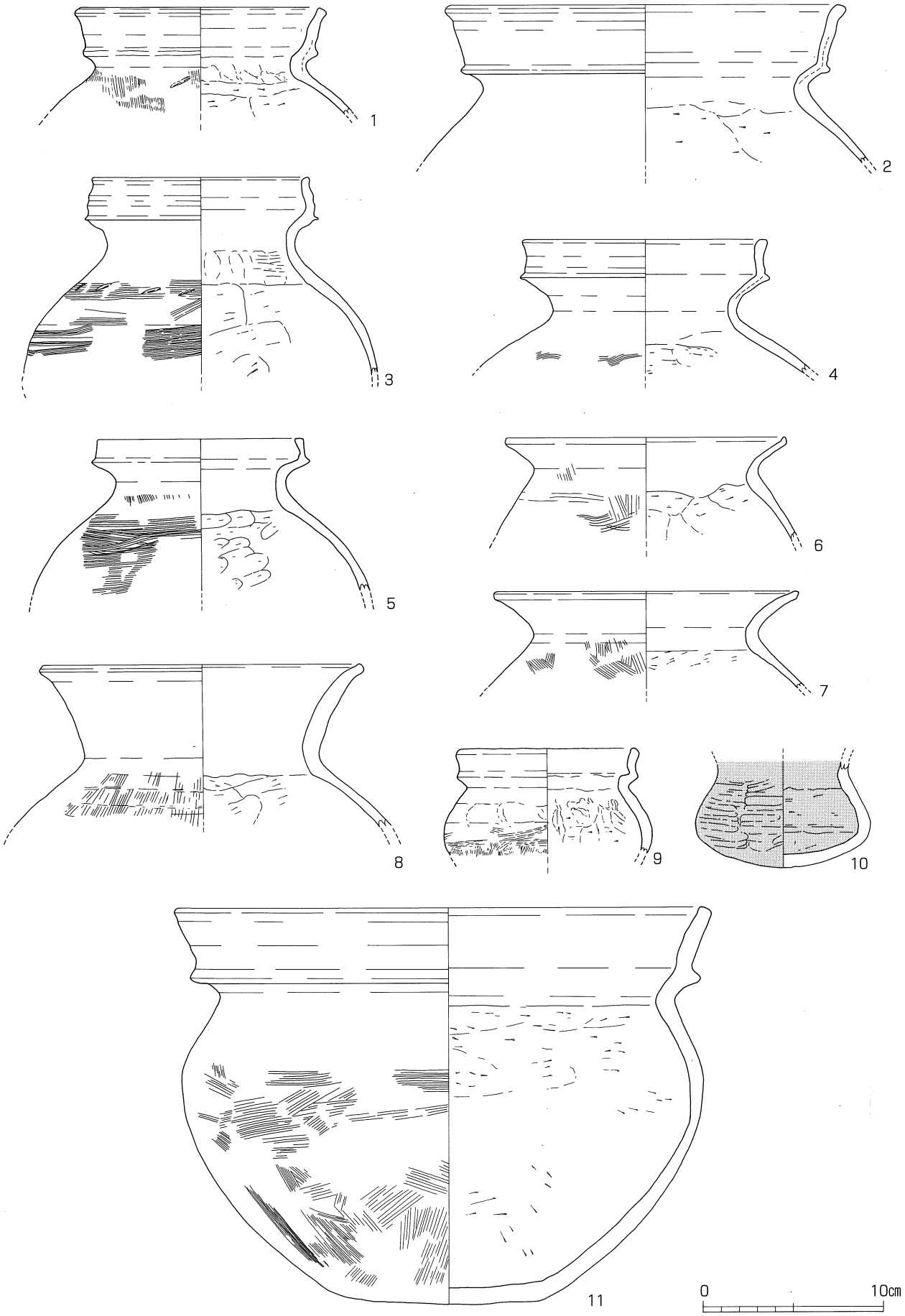


第55図　SD03出土遺物図実測2(S=1:3)

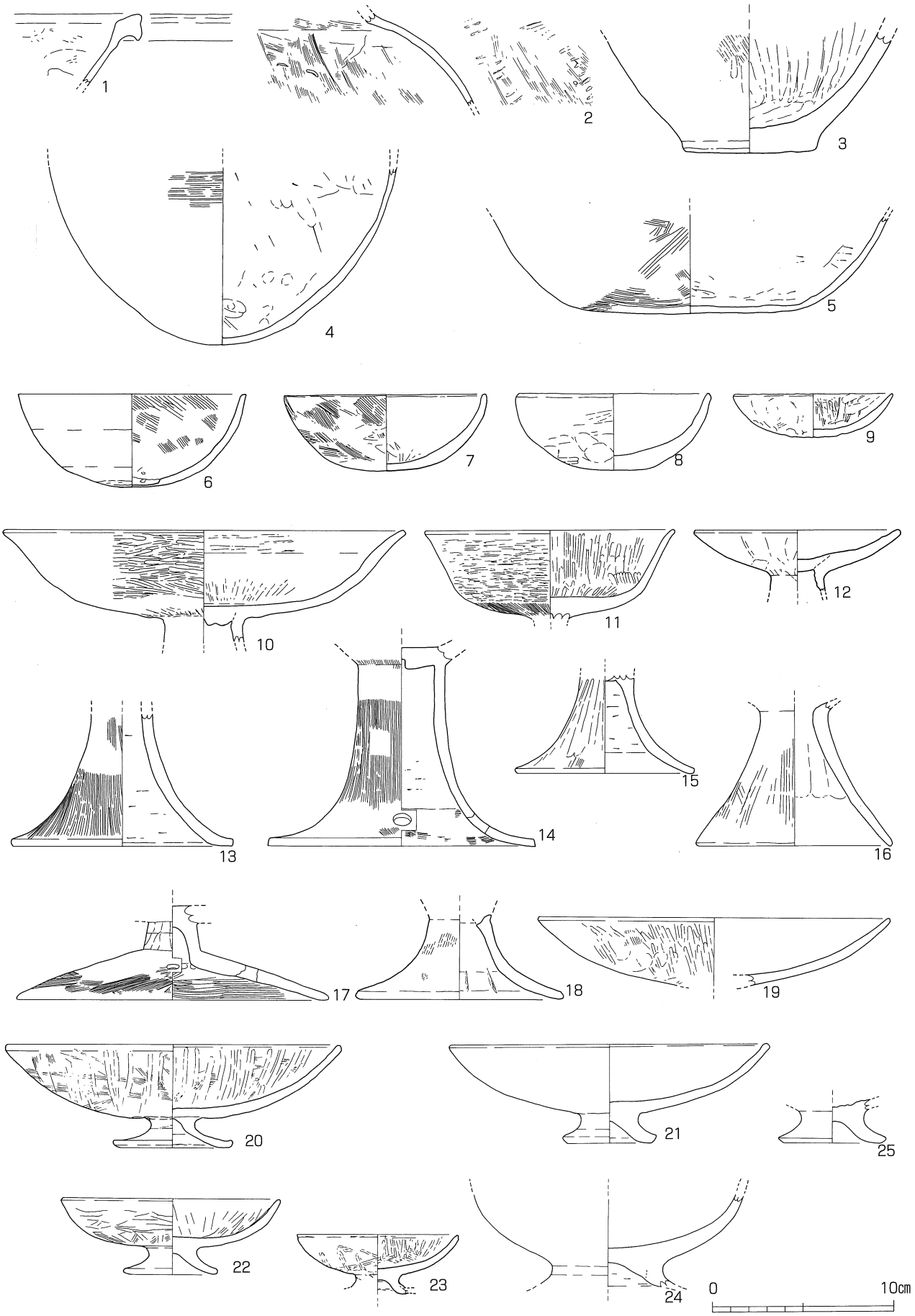
第56図　SD03出土遺物実測図3(S=1:3)



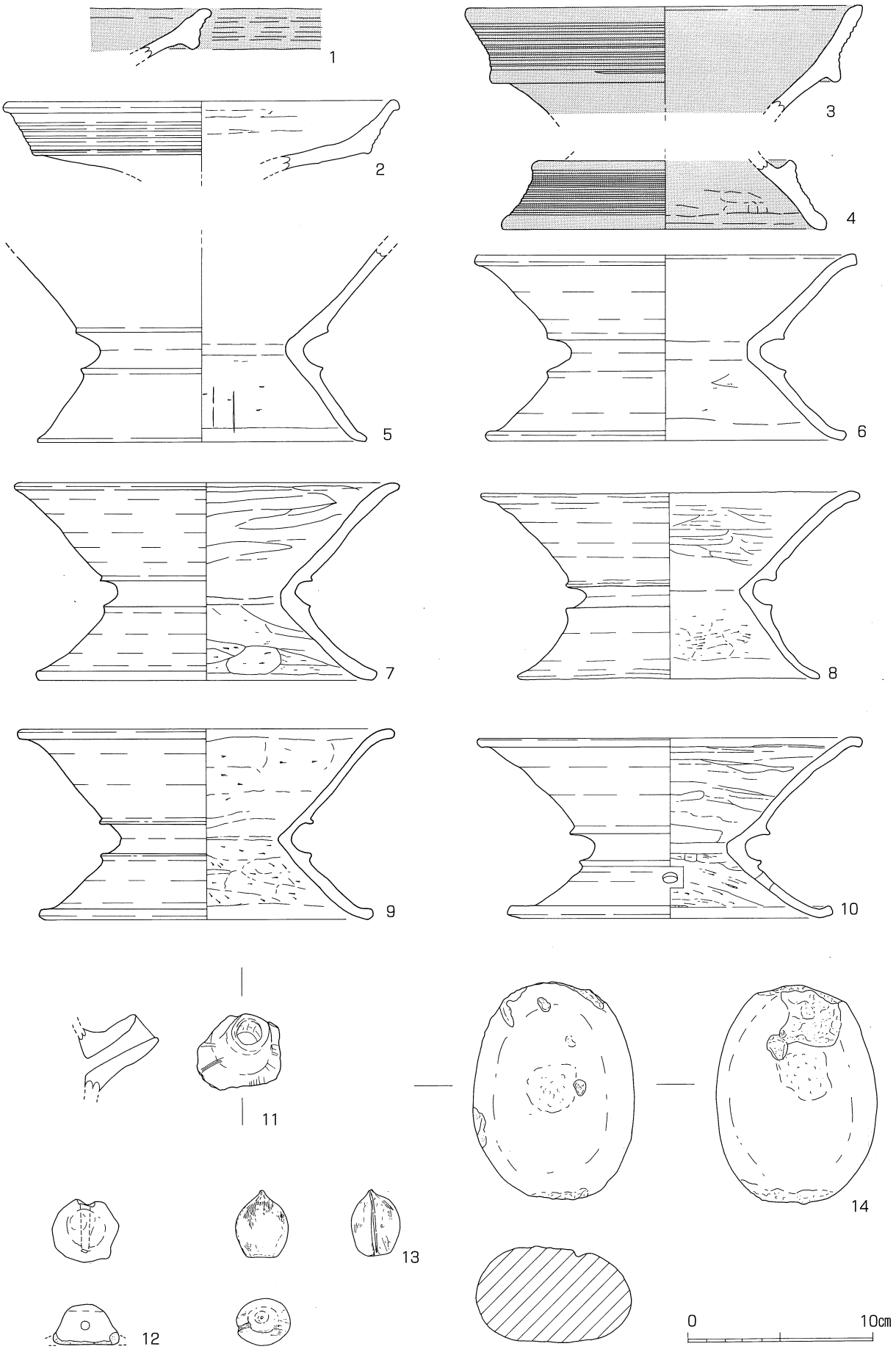
第57図　SD03出土遺物実測図4(S=1:3)



第58図　SD03出土遺物実測図5(S=1:3)



第59図　SD03出土遺物実測図6(S=1:3)



第60図　SD03出土遺物実測図7(S=1:3)

３～５は内傾する複合口縁の甕である。いずれも口縁端部に面を作る。３の肩部には、ヨコ刷毛目の上に木口による刺突列点文が施される。６点のみで、周巡しないものと思われる。４の肩部には、風化のため不鮮明であるが、波状文の痕跡が残る。いずれも球形の体部を呈するものと考えられ、小谷２期に相当しよう。６．７は布留式甕系の単純口縁をなすもので、６は端部を薄く上方に引き上げ、７は「逆ハ」の字状に外反する。８は長く外反して立ち上がる口縁の甕で、外面はタテ刷毛目の後ヨコなでられる。布留１期併行のものと思われる。９はミニチュアの甕である。内面は肩部を強くヘラ削りされ、その外面には指圧痕が見られる。手づくね成形のような雑な作りで、祭祀用の土器と考えられる。10は小型丸底壺と思われる。口縁部を欠損する。体部はそろばん状に張り、底部はやや尖り気味の丸底である。精製された土器で、外面には横方向の丁寧なヘラミガキが施され、内外とも赤色塗彩される。11は口径約30cm、器高22cmを測る大型の鉢で、口径に比して器高が低い。器壁が厚く、口縁は肥厚して端部に面を作る。径９cmを測る平底の底部外面は刷毛目調整される。胴部中央部はヨコ刷毛目、下半部はタテ刷毛目が施される。内面は胴上半部は横方向の削りで、下半部はタテ方向の削りであるが不明瞭になる。胎土はやや脆く、浅黄橙色を呈す。小谷２期に相当するものと思われる。

第59図１は鉢と思われる口縁の破片である。口縁端部が肥厚して拡張する。内面は削り後ナデ調整され、外面は漆塗りされる。弥生時代後期前葉のものと思われる。ＳＤ０３の旧溝下層より出土している。２は土師器の肩部破片である。内外面とも刷毛目調整であるが、外面にはタタキの痕跡が見られる。庄内系の甕であろうか。３は底径7.4cmを測る底部で、内面にミガキが施される。４．５は胴下半部で、４は丸底、５は扁平な平底になる。器壁は薄く、指圧痕が認められる。５は56－２のような甕の底部と考えられる。６～９は土師器の坏である。６は口径13cm弱で、薄い器壁の体部は内湾して立ち上がる。内面の調整は細かな刷毛目で、見込み中心が窪み薄くなっている。坏の中心に穴を開け脚を接合する制作途中のものであろうか。７．８は口径10～11cm、器高４cmを測る同型状の坏で、体部は内湾して立ち上がる。外面は、７が刷毛目の後ナデ、８はミガキの後ナデ調整される。底部は削り後ナデ。９は器高2.4cmと浅い小型の坏で、外面は刷毛目と指圧痕が見られ、内面はヘラミガキ調整される。精製された白っぽい胎土で、畿内系の影響が窺える。10～12は高坏の坏部、13～18は脚部である。10は口径22cmを測り、外反する口縁の内外面は細かいヨコミガキ、体部内面はタテミガキが施される。脚との接合は円盤充填法である。11の体部は直線的に立ち上がり、外面は細かな横方向のミガキ、内面は縦方向のミガキが施される。脚との接合部は刷毛目調整される。12の坏部は浅く直線的に開き、内外面ともミガキの後ナデ調整される。脚との接合は円盤充填によるものと思われる。胎土は荒く砂粒を多く含み、畿内系の高坏と考えられる。13・14の脚部はラッパ状に開き外面には細かい刷毛目が見られる。14の裾部には、径１cmの円形透かしが３～４方に施される。坏との接合部には刺突痕αが見られる。15はやや小型の脚で、外面を磨き調整する。16は「ハ」の字状に開き外面は刷毛目、内面はナデ調整する。「古志本郷遺跡Ｉ」に類似する高坏があり、畿内系の高坏と考えられる。17は裾部が低く開くもので、円形の透かしが穿たれる。内外とも刷毛目調整され短い脚の上には、椀状の小型坏が乗るものと思われる。精製された胎土は赤い色調で、坏との接合法も在地のものとは異なることから、他地域からの搬入品と考えられる。18の内面には、２条の平行する沈線が線刻される。同様の線刻は、第３次調査区ＳＤ23出土の低脚坏脚部「小山遺跡第３地点第３次調査報告書」(31－

７）や本調査区Ａ・Ｂ１１Ｇｒ土器溜り出土の鼓形器台脚部（48－８）にも確認され、いずれも脚部の内面に施されている。19～21は口径17.6～19.3cmを測る低脚坏で、坏部は緩やかに内湾しながら浅く開く。21は風化が著しく調整が不明であるが、19は縦方向のミガキが、20は内外ともヨコ刷毛目の後タテミガキが施される。22・23は小型の低脚坏である。内湾して立ち上がる体部はミガキ調整される。24は口縁部と脚端部を欠いているが、その形状は、「第３次調査区ＳＥ０１」出土の低脚坏（11－２）に類似する。25は低脚坏の脚部である。

これらの土器は概ね小谷２期の範疇に入るものと思われる。そのうち、16. 23は最終段階の溝Ｖの下層より出土している。

第60図１・２は器台の受部で、１の口縁には４条の凹線が施され、全体に赤色塗彩される。２の内面はヘラミガキ調整される。溝の下層から出土し、松本Ｖ－２様式に相当する。３．４は鼓形器台の受部と脚部である。内外面に赤色塗彩の痕跡が見られる。草田２期に相当する。５～10は筒部の狭まった鼓形器台である。いずれも、受部径20cm前後、器高10cm前後の大きさで、縮まった器形になる。器壁が厚く、８．９の筒部は鋭角に屈曲する。脚部内面はいずれも削り調整である。受部内面にはミガキが施される（７．８．10）が、削りの後ナデ調整するもの（９）もある。５の脚部内面には先述の２本の平行する線刻が見られる。また、10の脚部には円形の透かしが穿孔される。これらの器台はいずれも小谷２期に相当するものと考えられる。11は短めの注口である。12は種別不明の土製品としたが、半球状に成形した凸部に径４～７mmの穴が穿たれる。片面には削りのような面があり、甕または鉢の取っ手ではないかと思われる。13は種のような形をした土製品で、上層から出土している。長さ3.6cm、幅2.8cm、高さ2.6cmの大きさで、片方の側面には溝が作られ、底部には丸い小さな凹みがある。非常に写実的に作られており、一見桃の実のような形をしている。種とすれば実物大になると考えられる。桃の種は井戸などの水に関わる祭祀においてよく用いられるものであるが、この土製品が桃の種を模したものかどうかは分からない。このような土製品は他に類例が知られず、判別しがたい。14は敲き石である。表裏とも中央部に打瘤痕が見られる。両端に敲き痕があり、側面をミガキに使用したのか擦痕がわずかに見られる。

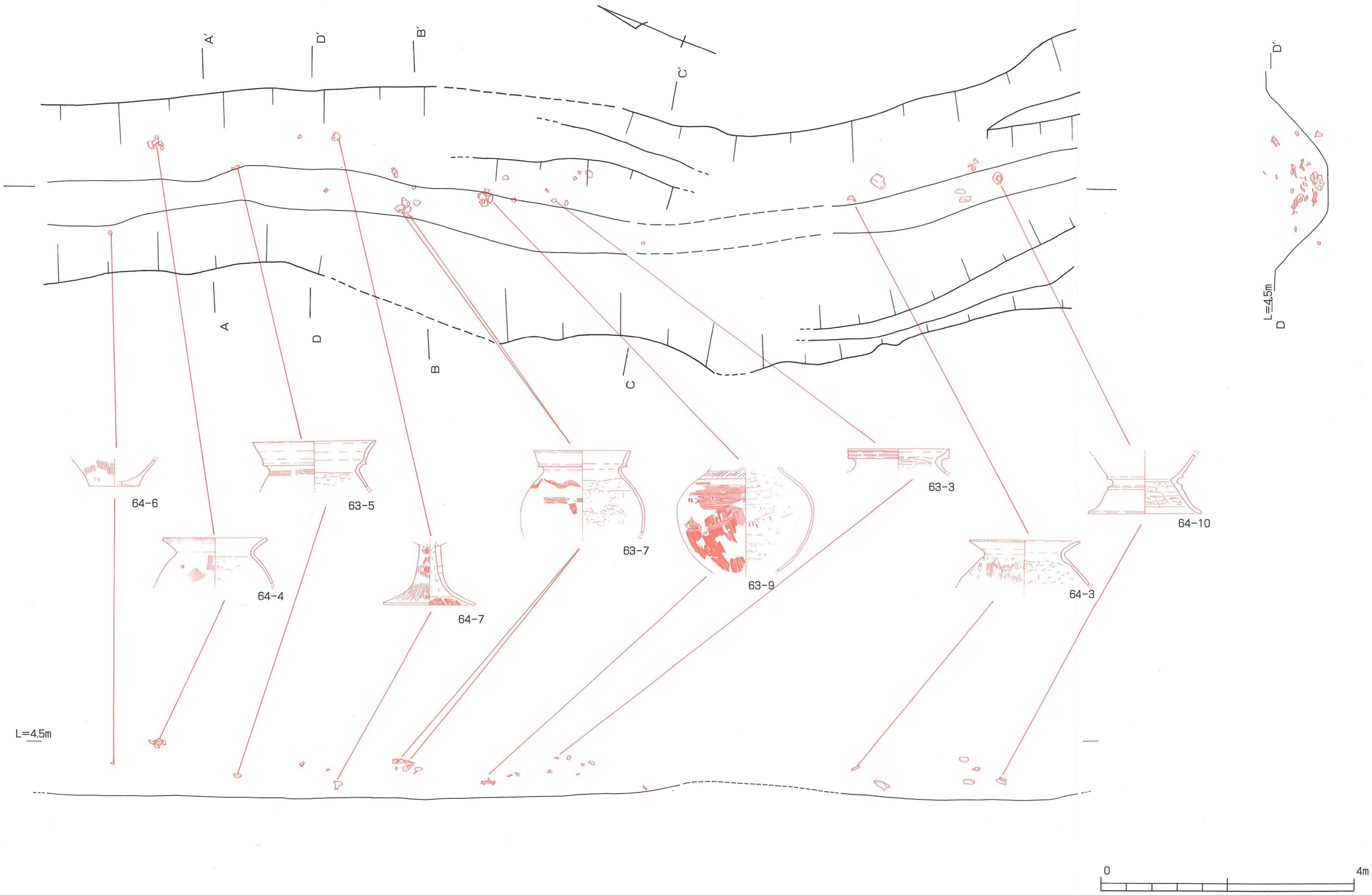
ＳＤ０４（第61図）

調査区の東端で検出した溝状遺構で、中世の溝であるＳＤ０１．０２に遺構の一部を切られている。巾2.8～3.5m、深さ80cmを測り、逆台形の断面を呈す。

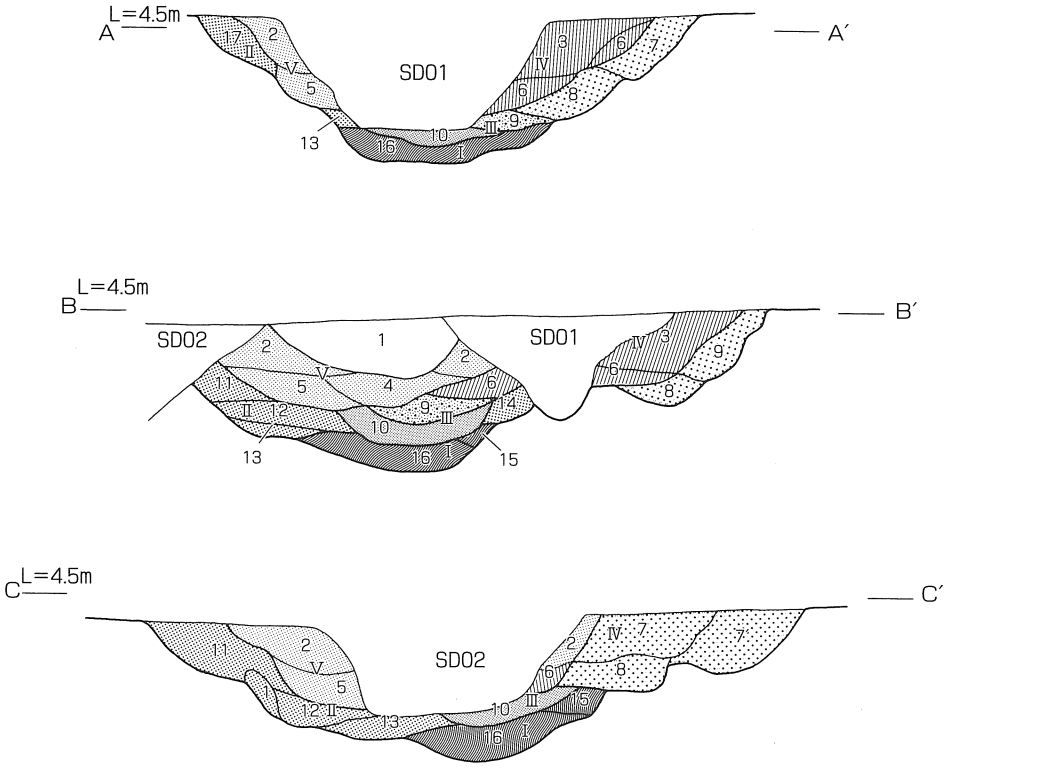
覆土からは、弥生時代終末から古墳時代前期前葉の土器が、中層から下層にかけて出土しているが、その出方はＳＤ０３のように密ではなく、まばらに点在する状況である。弥生時代中期後葉から弥生時代後期前葉にかけての土器も出土している。

ＳＤ０１．０２に切られるため埋土の堆積状況が不明な部分があるが、土層の観察から最低４回の堀直しが行われたことが窺われる。Ｉが最初に掘削され、その後、弥生時代終末から古墳時代前期前葉にかけてのⅡ→Ⅲ→Ⅳと掘り直され、最終的にＶの段階で埋まったものと考えられる。

大溝のＳＤ０３から約15m東に位置し、ＳＤ０３に併行するように、緩やかな「Ｓ」字状を呈し、やや東に向かいながら南北に走っている。道路を挟んだ２０m程北にある、先に調査された四絡30号



第61図　SD04実測図(S=1:60)



1．黒褐色土(砂礫多く含む)
2．黒褐色土(1より明るい)
3．黒褐色土(砂礫少し含み．黄褐色土ブロック混)
3′．黒褐色土(3より明るく．黄褐色土ブロック多い)
4．黒褐色土(小炭化物若干含む)
5．黒褐色土(黒褐色土ブロック混)
6．暗褐色土(5より明るく．砂礫少ない)
7．灰黄褐色土(黒褐色土と地山シルトの混合)
7′．黄褐色土(7より明るい)
8．黄褐色土(7より暗い)
9．暗灰黄色土(砂礫含み．黒褐色土ブロック混)
10．褐色土(砂粒．黒褐色土ブロック含む．粘性中)
11．暗褐色土(地山ブロック混．しまっている)
12．暗褐色土(11より明るく．砂礫多く含む)
13．灰黄褐色砂質土(ザラザラ)
14．褐色土
15．灰黄色砂質土(ザラザラ)
16．暗灰黄色砂質土(黄灰色土ブロック混．砂粒多い)
17．黄褐色土(しまっている)

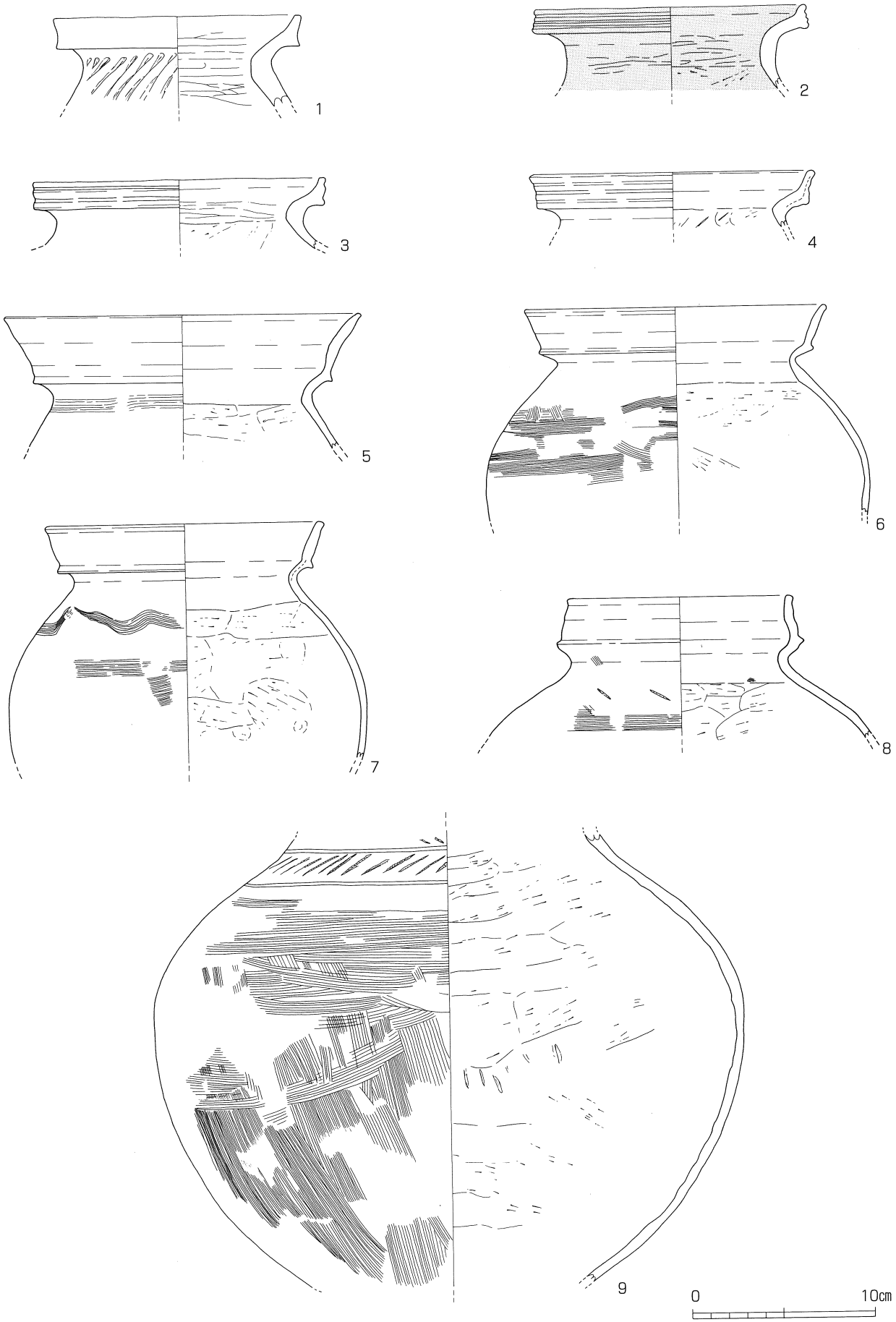
0　2m

第62図　SD04土層図(S=1:40)

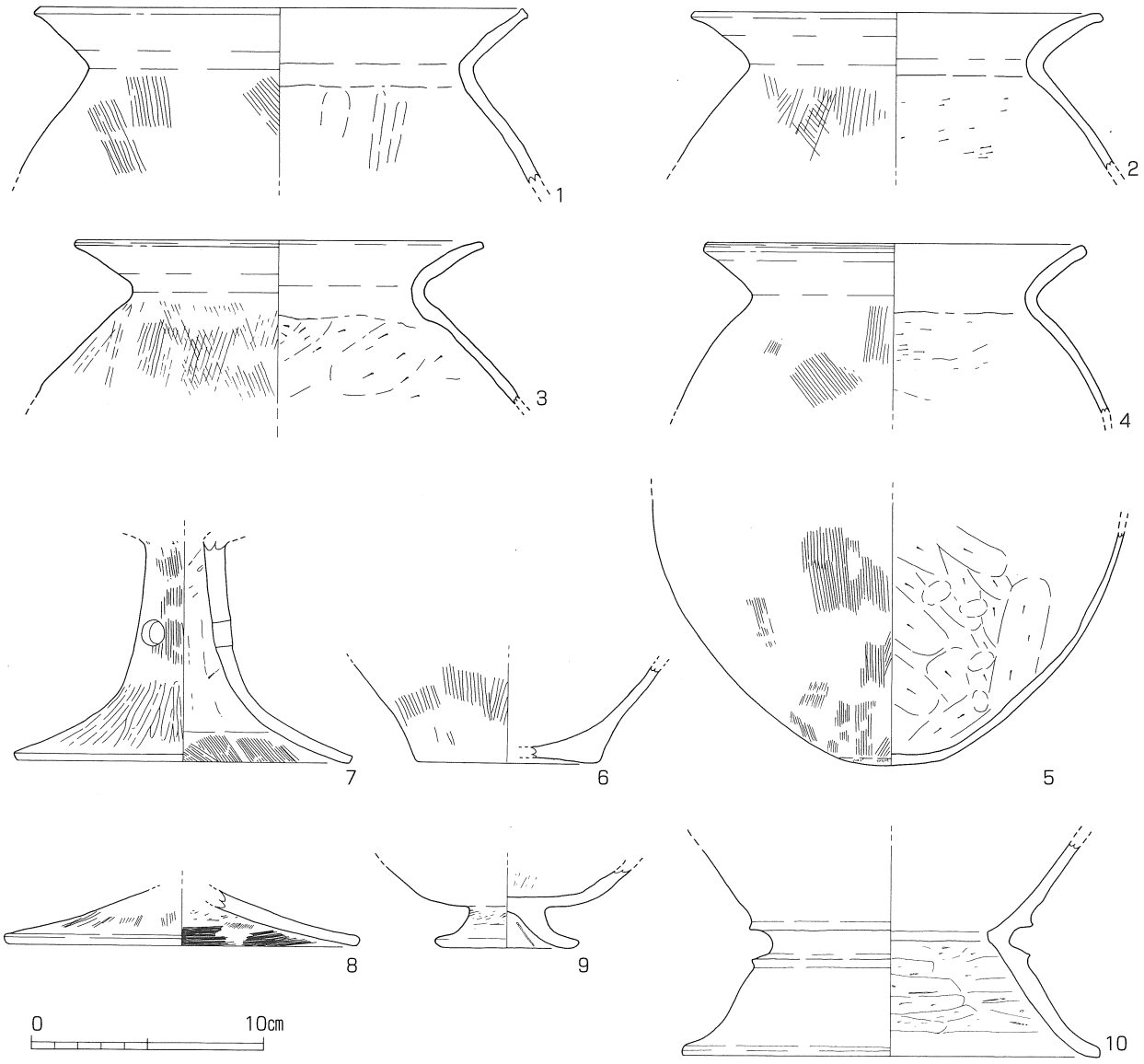
外１線道路改良工事に伴う発掘調査（第３次調査）区で規模・形態の類似する溝状遺構ＳＤ23を検出した。ＳＤ２３はやや北西方向に傾いて走っており、ＳＤ０４はＳＤ２３につながるものと考えられる。この大溝を「環濠」と考える根拠ともなっている。

ＳＤ０４出土遺物（第63・64図）

第63図　１は弥生中期後葉の甕である。頸部にハケ原体による刺突文が巡る。頸部内面はヨコミガキである。２は松本Ｖ－１様式に比定される甕で、内外面に赤色塗彩が施される。３～７は複合口縁甕で、３．４は口縁に２．３条の凹線が巡る後期前葉の甕である。５は細く外反する口縁で草田５期に相当する。５．６は口縁幅がやや狭くなり、端部に平坦面を持つ甕である。外面調整はヨコ刷毛目



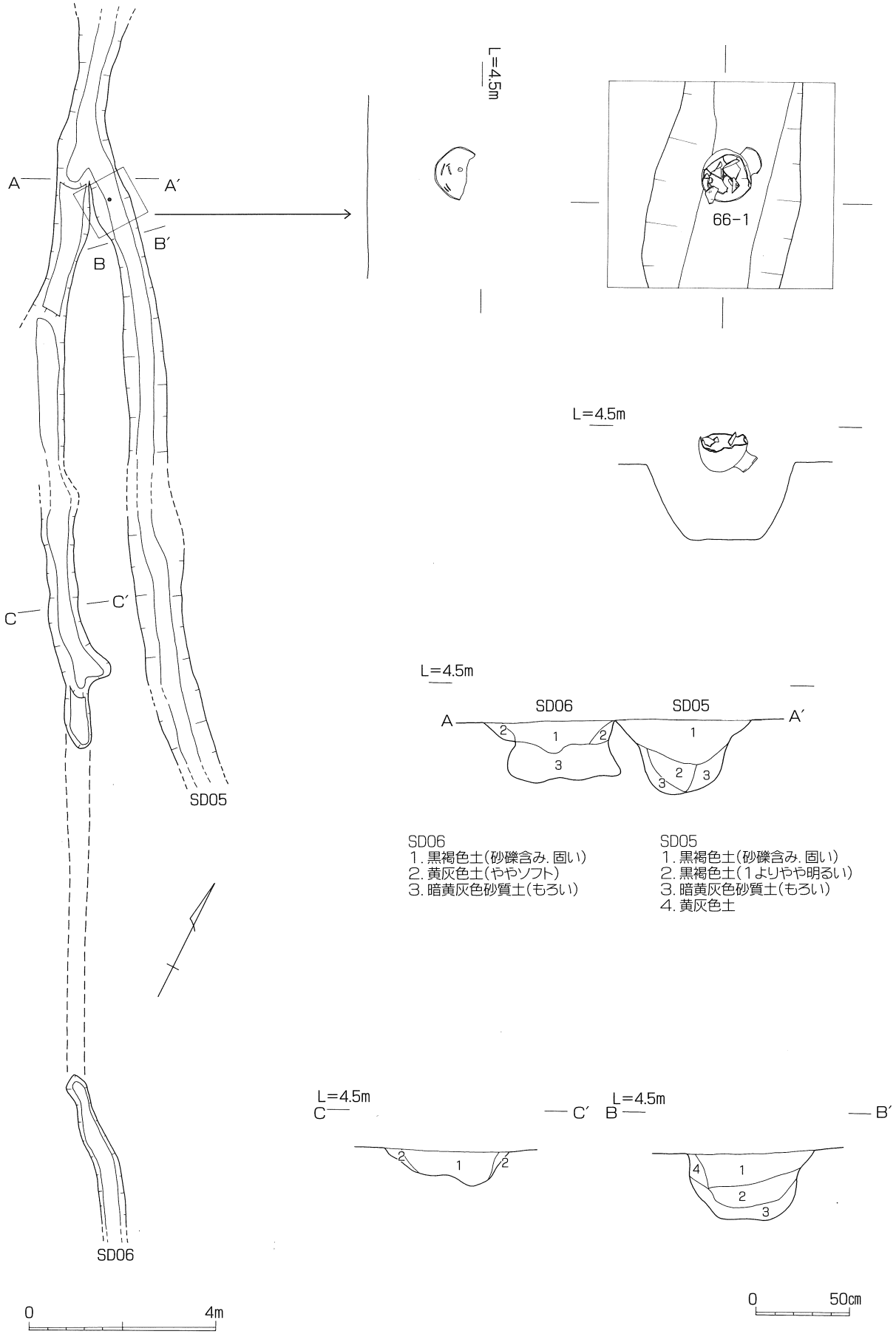
第63図　SD04出土遺物実測図1(S=1:3)



第64図　SD04出土遺物実測図2(S=1:3)

で、７の肩部には幅８㎜の弱い波状文が施される。６．７とも内面の削りはやや下がった位置から始まる。８は内傾する口縁を持つ甕で、肩部に刺突列点文が施される。これらのうち、６～８は小谷１～２期に相当しよう。９は大型の壺の胴部で、頸部以上と底部を欠く複合口縁の細頸壺である。胴部最大径32.2㎝を測る。頸部から肩部にかけて２条の沈線に区画された中に刺突文が巡る。外面の調整は胴上半部が横方向、下半部が縦方向の刷毛目で、内面は横方向の削りが施される。

第64図　１～４は布留式甕系の単純口縁甕である。２の口縁は大きく外反し、１．３．４の端部には面を作る。外面に荒い刷毛目が施され、色調は浅い黄橙色を呈す。５は甕の下半部で、丸底に近いが平底の痕跡が残る。内面には削りと指圧痕が認められる。弥生時代終末に相当しよう。６は弥生時代後期前葉と考えられる甕の底部で、器壁がやや薄い。７．８は高坏の脚部である。７の外面にはミガキが施され、径1.2㎝の透かしが３方に穿たれ、８にも円形穿孔の痕跡が見られる。９は低脚坏で、坏部上半部を欠く。脚部内面にヘラ描きの沈線が１条施されている。10は鼓形器台で、底径18.0㎝を測る。受部端部を欠くが、器高は低いものと思われる。５．６を除いて小谷１～２期に相当するものと考えられる。



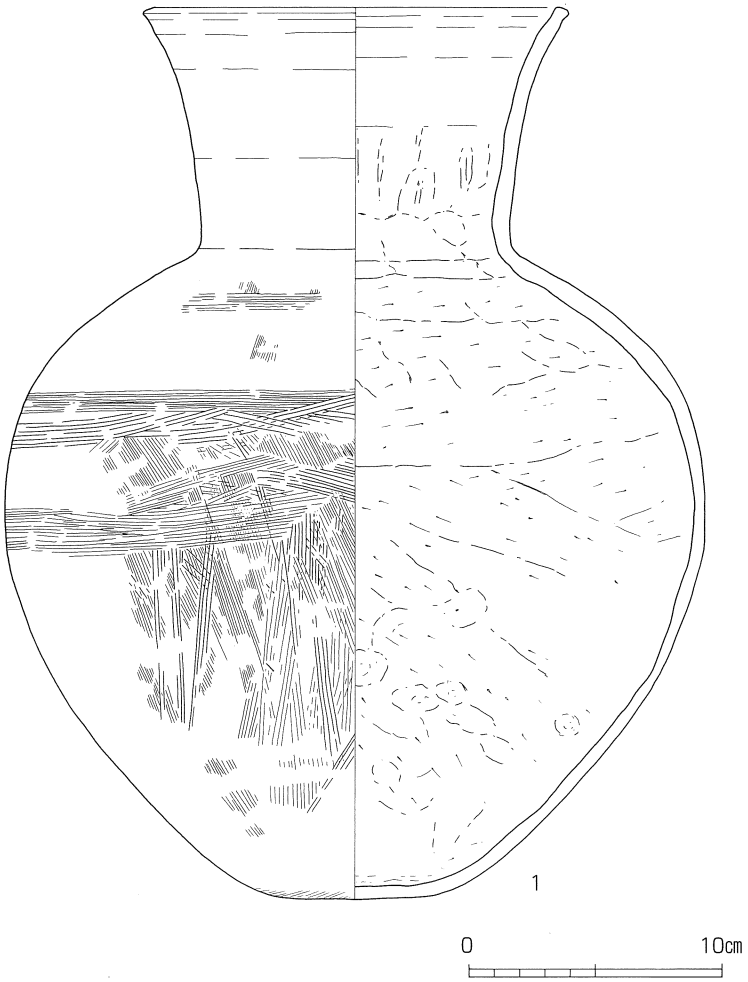
第65図　SD05·06実測図(遺構 S=1:120　拡大図·土層図　S=1:30)

これらの遺物のうち、63－１．５．７．は溝の下層から出土している。

ＳＤ０５・０６（第65図）

ＳＤ０４の西で検出した南北に走る細い溝状遺構である。約16m分を調査した。北壁近くで合流する形になる。ＳＤ０５は巾0.6～0.9m、深さ40cmの規模で、底レベルは標高3.90m前後になり、南北ほとんど変わらない。ＳＤ０６は南側になると一部攪乱によって消失するが、南壁近くでわずかに底面が検出された。巾0.5～0.7m、深さは30cm程と浅く、「U」字状の断面を呈す。底のレベルは標高3.95m前後と、南北ほとんど変わらない。南側の上層は攪乱により削平され、底面の一部が残る。

ＳＤ０５が２又に分かれる東側の溝の上層からは古式土師器の壺が１個体出土している。口縁をやや下に向けた状態で出土した。胴部が破損しているが、破片は体内に残っており、完形品の上部が押しつぶされたものと思われる。全体のプロポーションは神原神社古墳土器埋納坑出土の壺に類似している。

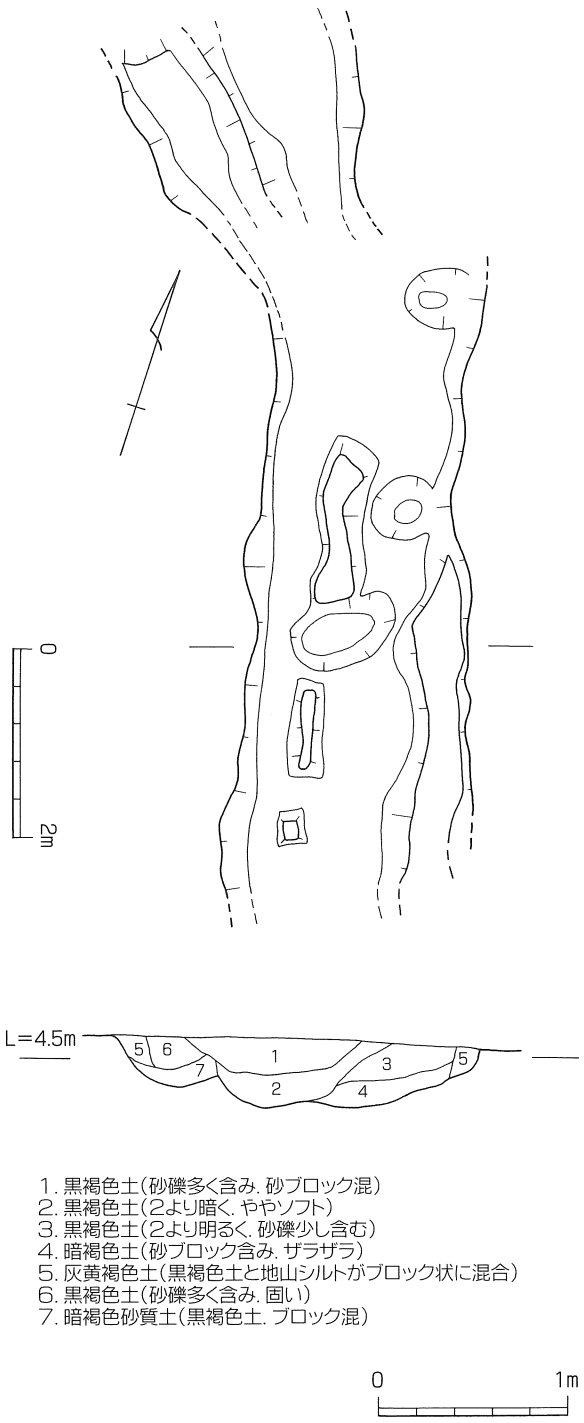


第66図　SD05出土遺物実測図(S=1:3)

出土遺物（第66図）　１の古式土師器の壺は、口径16.0cm、器高35.4cmを測る。直口の口縁はやや外反気味に立ち上がり、端部に平坦面を持つが、神原神社古墳出土の壺程には張り出さない。体部は倒卵形を呈し、最大胴部径はやや上方に位置し、27.8cmを測る。径6.0cmを測る平底を成すが、正立はしない。底面には刷毛目が残る。底部外面にはススが付着し黒変している。胎土は精緻な粘土を使用し、浅黄色を呈す。外面の調整は胴部上半が横方向、同下半は縦方向の刷毛目が施される。内面は頸部以下横方向の削り、底部に指頭痕が多く残る。また、胴部下半には指でなでつけたような痕が見られ、肩部内面の一部に指頭痕が認められる。調整法は外面と内面で対応しているようである。小谷２期に相当するものと考えられる。

ＳＤ０７（第67図）

ＳＤ０３の西側で検出した幅広の浅い溝状遺構で、北に向かうと攪乱により消失する。約９m程の長さを検出し、南の調査区外へ続くものと思われる。北側の攪乱で消失する手前で、２筋になってやや西に屈曲する。巾2.0～2.5m、深さ20～40cmを測り、北の底レベルは標高4.4m、南の底レベルは



第67図　SD07実測図
(遺構 S=1:80　土層 S=1:40)

4.2mと北から南へわずかに下っている。覆土には土師器の破片が少量含まれるのみで、時期は不明である。ＳＡ０２のピットが掘り込まれている。

方向としては、Ｎ－15°－Ｗに走っており、これはＳＢ０４．ＳＩ０１の軸に一致している。しかし、本調査区では同方向の溝状遺構は他に検出されていない。

ＳＤ０８・０９（第68図）

調査区の中央で南北に並行して走る浅い溝状遺構である。

ＳＤ０８は巾は0.8～1.6m、深さ10～40cmを測り、ＳＤ０８．０９とも北側は後世の削平により細く浅くなる。北側の底レベルは4.35m、南側の底レベルは標高4.13mと、北から南へ向かって下る。

ＳＤ０９は巾0.4～1.2m、深さ20～30cmを測る。底レベルは標高4.3m前後である。ＳＤ０８から須恵器の坏底部（71－５）が出土している。底径8.8cmを測り、回転糸切り後無調整である。奈良・平安時代の溝状遺構と考えられる。

しかし、ＳＤ０９からは土師器の破片がわずかに見られるのみで、時期を決定する資料に乏しい。ＳＤ０１．０２と同軸方向に走る。ＳＤ０８．０９の東にはＳＥ０４が掘られ、西にはＳＥ０５が掘られている。ＳＥ０５の西、ＳＡ０１の南側にあるＳＫ０７．０９も同時期の遺構と推察される。ＳＤ１０の南北方向と同軸になるが、南側でＳＤ10に切られる。

ＳＤ１０（第69図）

調査区の中央部から南から北に向けて「く」の字に屈曲して走る溝状遺構である。ＳＤ０８．０９を切って東西方向に走り、Ａ４ＧｒのＳＫ０５の北で方向を北西に向きを変えて走る。巾0.8～1.2m、深さ約30cmを測り、「U」字状の断面を呈す。上面は後世にかなり削平されており実際はもっと深かったと考えられる。南北方向はＳＤ０１．０２、ＳＤ０８．０９．１４と同軸になる。底レベルは標高4.25m前後で南北変わりない。

古墳時代初頭の土器片が数点見られるが、いずれも混入と思われる。上層から須恵器の小型坏（71

－１）と高台付き坏（71－２）が、重なって出土している。７世紀後半から８世紀にかけてのものと思われる。奈良時代の区画的な溝と考えられる。このＳＤ１０で囲まれた内側には多数のピットを検出したが、再現できた建物はＳＢ０４のみであった。また、井戸と思われるＳＥ０５やＳＫ０７．０９があるが、これらはＳＤ１０よりやや時代が下るようである。

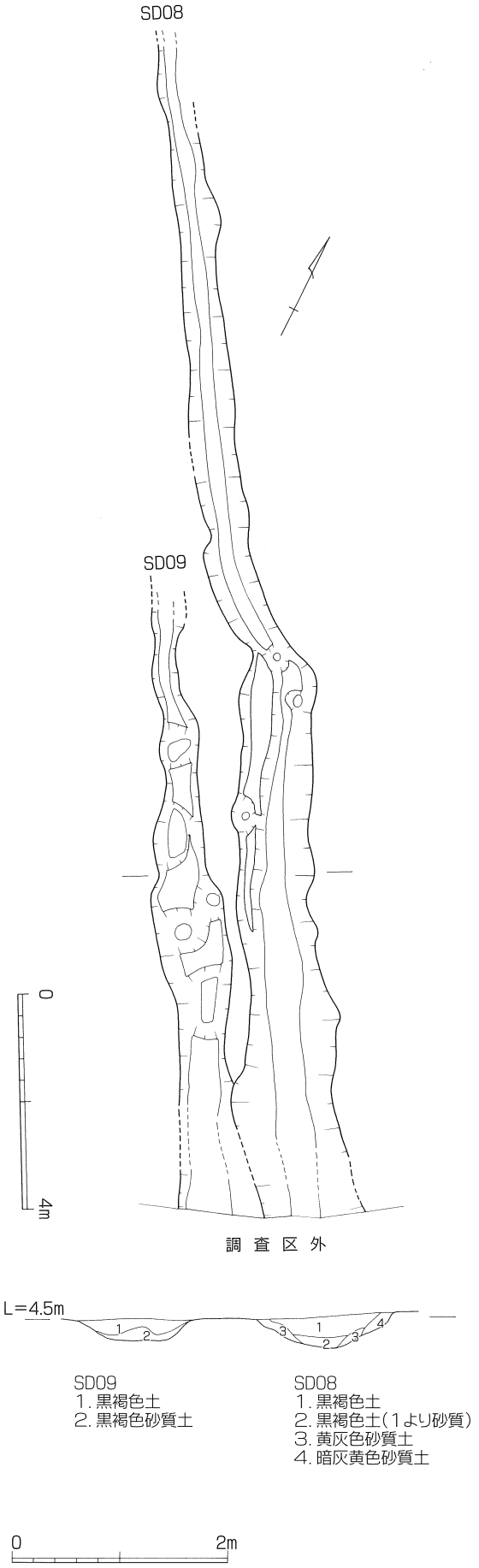
遺物は須恵器と土師器が出土している。71－１は須恵器の小型坏である。器壁の厚い体部は内湾して立ち上がり、口縁に至って薄くなる。底部はヘラ切り離し後、板状工具によってナデ調整される。71－２は高台付の須恵器坏で、体部はやや内湾気味に逆「ハ」の字状に立ち上がる。底部は回転糸切り離し後、無調整。１は出雲６期、２は出雲７期に相当する。71－３はミニチュアの鼓形器台の脚部である。小谷２期に相当するものと思われ、径１cmの円形透かしが穿たれる。胎土は精製されたものであるが、在地産と考えられる。内面に赤色塗彩の痕跡が見られる。71－４は複合口縁の甕で、口縁端部は肥厚して面を作る。小谷２期に相当しよう。

ＳＤ１１・１２（第70図）

11グリッドの地山がやや落ち込んでいる範囲で検出した細い溝状遺構で、「Ｃ11Ｇｒ土器溜り」.「Ａ．Ｂ11Ｇｒ土器溜り」をはさむ形で南北に走る。遺物はほとんどなく時期を断定しがたいが、ＳＤ１２から砥石（71－６）が１点出土している。ＳＤ０５．０６と形態・方向が類似しているため、同時期の遺構の可能性が考えられる。層序から土器溜りより新しいものと考えられる。

ＳＤ１２は巾0.6～1.3m、深さ30cm前後の規模で、断面は「Ｕ」字状を呈す。底レベルは、標高4.10mの北から3.90mの南に向かって下る。

ＳＤ１１は巾0.7m、深さ30cmを測り、底レベル



第68図　SD08・09実測図
（遺構 S=1:120　土層S=1:60）

の標高は3.78mで、南と北で高低差はない。ＳＢ０１のピットに掘り込まれる。

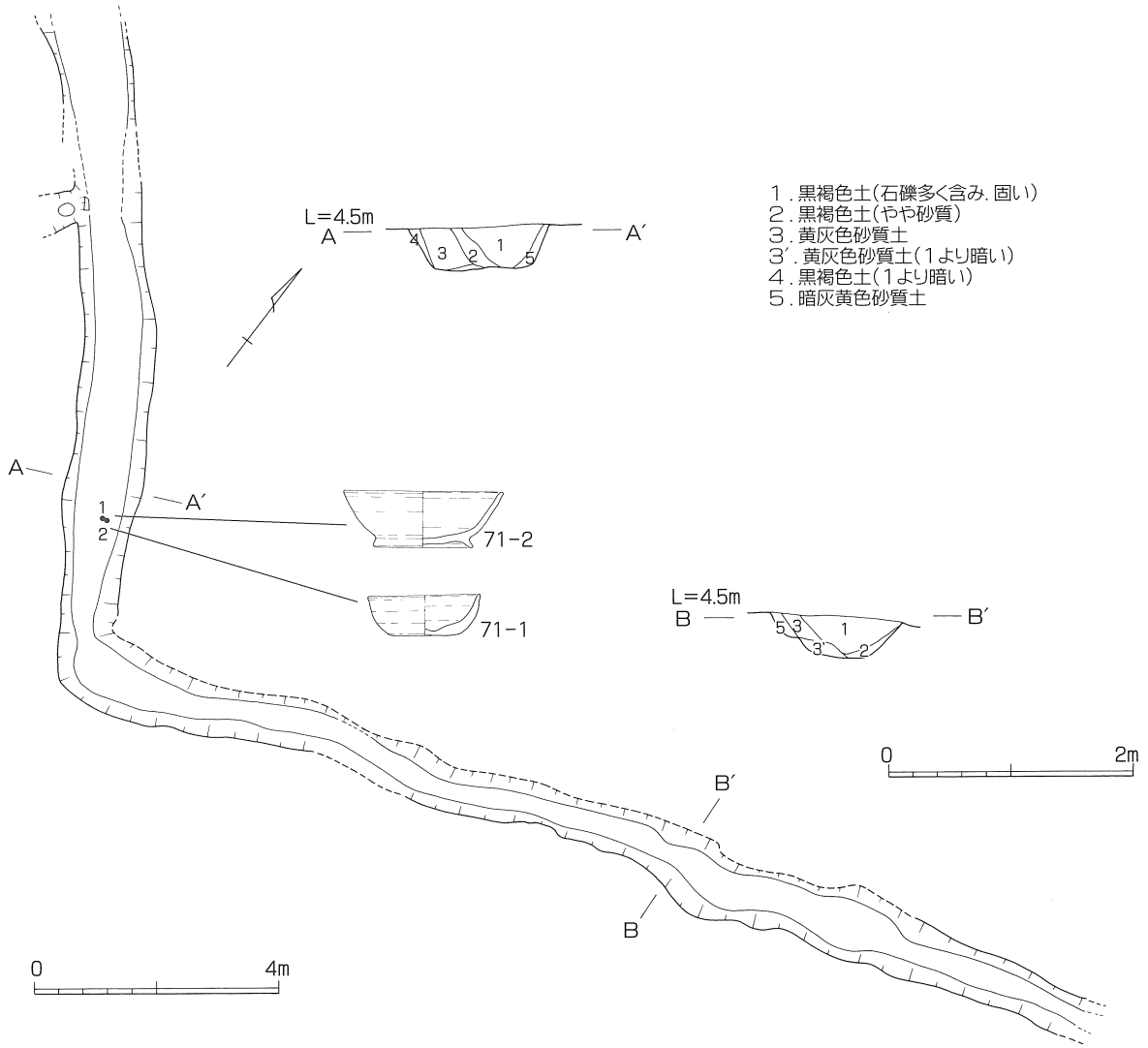
２つの溝とも南側を攪乱により上面が削平され、底面のみが検出できた。

ＳＤ１３（第72図）

Ｃ４．５グリッドで検出した浅い遺構で、巾2.0m・深さ30cmを測る。断面は浅い皿状を呈す。東側は後世の削平により消失し、西側はＳＤ１０・ＳＫ１０により切られている。南側の壁も一部攪乱により壊されているため、全体の規模・性格を把握しかねる。土坑とも考えられるが、東西方向に長く延びており、溝状遺構とした。

溝の中央部で土師器の破片がややまとまって出土している。弥生時代終末から古墳時代前期前葉の土器で、その中には当地では出土例の少ない[*①]ワイングラス状土器（73－５）も含まれている。出土遺物から、ＳＤ１３は古墳時代前期前葉に埋没したものと考えられる。

ＳＤ０３からは約17m西に位置している。この間に弥生時代の遺構は無く、同時期の遺構としては、ＳＫ０３がＳＤ１３の南で検出されるのみである。



第69図　SD10実測図(遺構S=1:120　土層S=1:60)

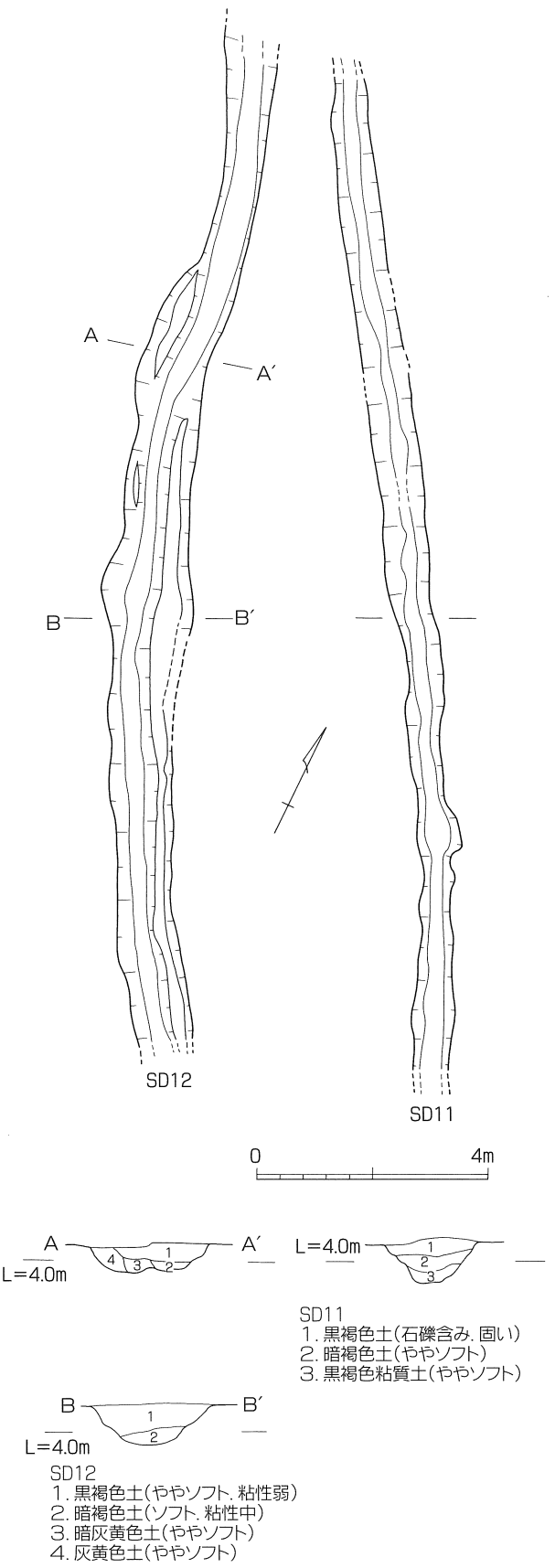
出土遺物（第73図）　１～３は複合口縁の甕で、１の口縁端部は外方へ弱く引き出し、２．３は引き出した端部に面を作るものである。いずれも草田７期に相当する。４は頸部から胴部にかけての土師器甕の破片で、外面はタテ刷毛目の後ヨコ方向の刷毛目調整が施される。５はワイングラス型の高坏坏部である。内湾して立ち上がる体部は口縁に向かって器壁は薄くなり、端部に面を作る。口縁径11.3cmを測り、しっかりした作りである。外面の調整は下半部に横方向の細かなミガキ、中央部まではヨコミガキの後タテ方向のミガキが施される。内面は細かなヨコ刷毛目調整である。脚部を欠いているが、円盤充填法による刺突痕αが見られ、在地の土器と考えられる。形状としては丹後系の高坏に類似する。西谷４号墓出土のグラス型土器に似ているが時期が異なり、直接の関係は見いだせない。このほかに遺構外からやや小型のワイングラス型の土器（76－13）が１点出土している。６は鼓形器台の脚部片で、底径23.6cmを測る。７は高坏の脚部で、裾拡がりに開くものである。精製された胎土で、畿内系高坏の流れを汲むものと考えられる。８は低脚坏の脚部である。９は扁平な円礫で、四方を打ち欠いて凹みを付けた痕があり、石錘として使われたものと思われる。

ＳＤ１４（第74図）

調査区の西端で検出した、浅い溝状遺構である。幅0.7m、深さ10cmを測る。南北方向に走り、その方向はＳＤ０８．０９．１０と同軸になる。部分的に攪乱を受けており、肩が不明なところがある。南側は攪乱を受けて消失する。

遺物は土師器片がわずかに見られ、製塩土器片（74－１）が出土している。口径12.4cmを測り、口

*①　古志本郷遺跡・勝負遺跡などで出土している。山陰東部・北陸地方によく見られるカップ状土器の流れを汲むものか。



第70図　SD11・12実測図
（遺構 S=1:120　土層S=1:60）

縁端部上面に櫛状の刻み目が見られる。奈良・平安時代の遺構と考えられるが、１点のみの遺物で、時期を決定する資料にはなり得ない。

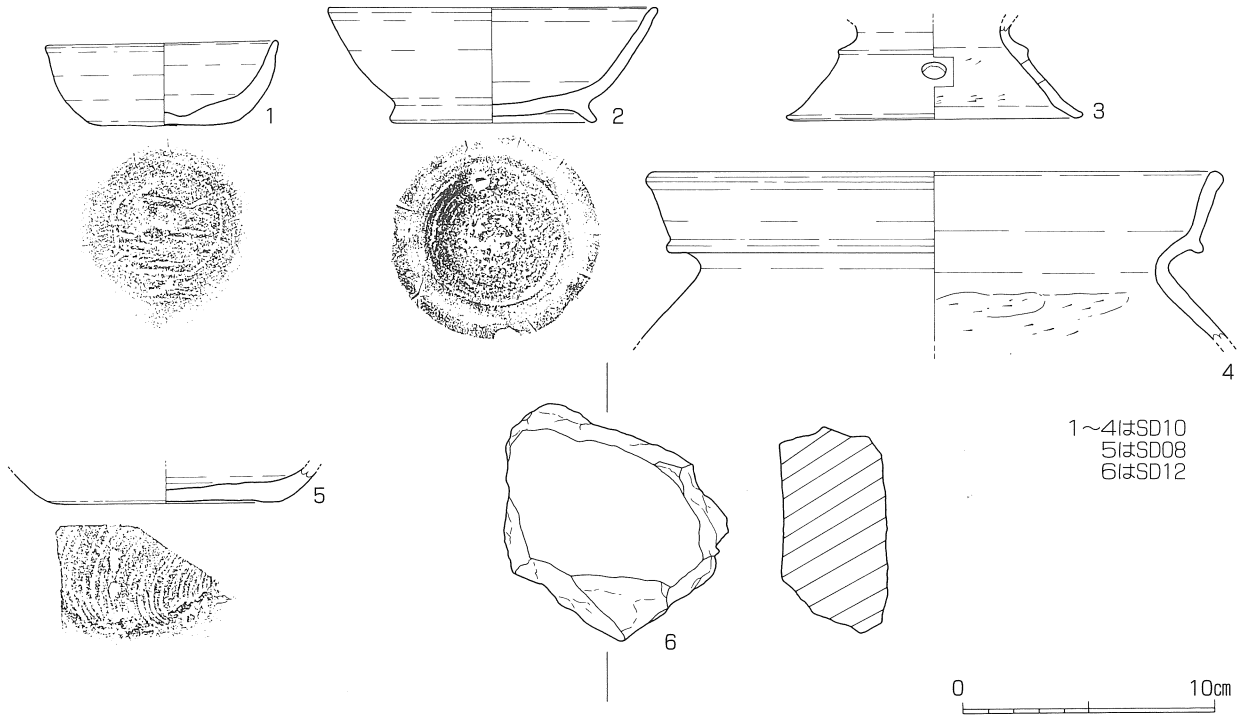
ＳＤ１６（第75図）

ＳＤ０３の東で検出。巾1.2～2.0m、深さ30cmと浅い溝状遺構である。断面は皿状を呈す。南側は攪乱により消失している。時期は土師器破片がわずかに出土するのみで断定できないが、北壁土層の観察により、ＳＤ０３の25･29層を振り込む形であるため、ＳＤ０３の古段階より新しいと考えられる。新段階との切り合いは攪乱により不明なため、ＳＤ０３の最終段階と同時期に存在していた可能性がある。その上には全５層が堆積しており、層序から考えるとＳＤ０３と同じ弥生時代終末から古墳時代前期前葉にかけての溝と思われる。

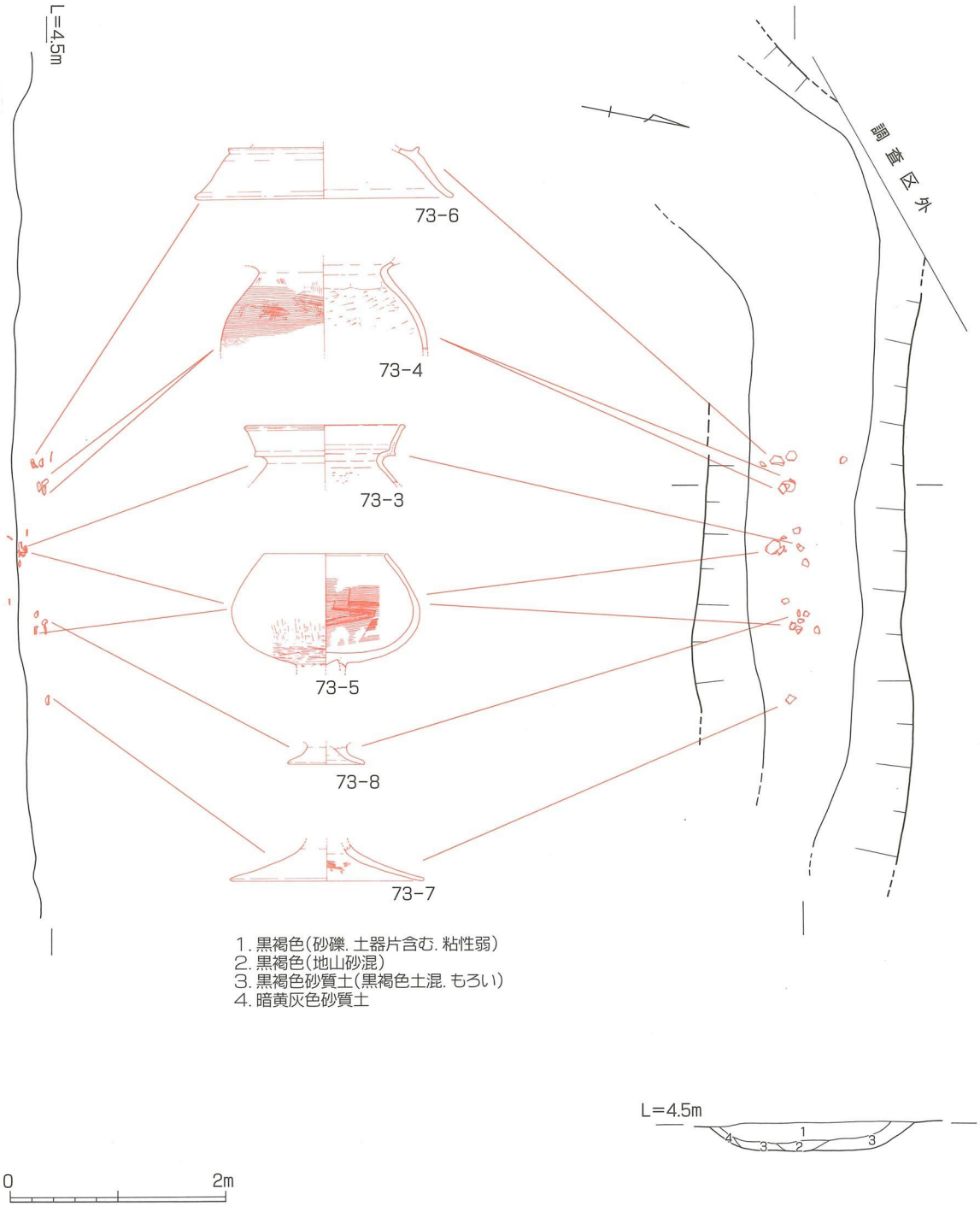
遺構外出土遺物（第76～78図）

第76図１は塩町系の甕である。やや赤い黄褐色を呈し、在地産と考えられる。爪痕状の刺突文が、頸部と凹線で区画された肩部に施文される。一部刺突文をナデ消した痕跡が見られる。口縁内面はヘラミガキ調整である。やや拡張した口縁には３条の弱い沈線が巡る。口縁の形状は松本Ⅳ－２様式に相応するが、内面の削りが頸部直下まで上がっていることから、中期後葉から後期前葉にかけてのものと考えられる。

第76図２～６は複合口縁の甕である。**２**の口縁端部は外方に引き出した上面に平坦面を作る。稜は甘く、外面はヨコ刷毛目が施される。内面はヨコ削りの後なで上げた痕が一部見られる。草田６期新段階に相当するものと考えられる。**３**の口縁端部は外方にやや丸みを持って屈曲する。器壁は厚く、体部は球形になるものと考えられる。胴部が最大になる外面には荒いヨコ刷毛目が、その上には細か

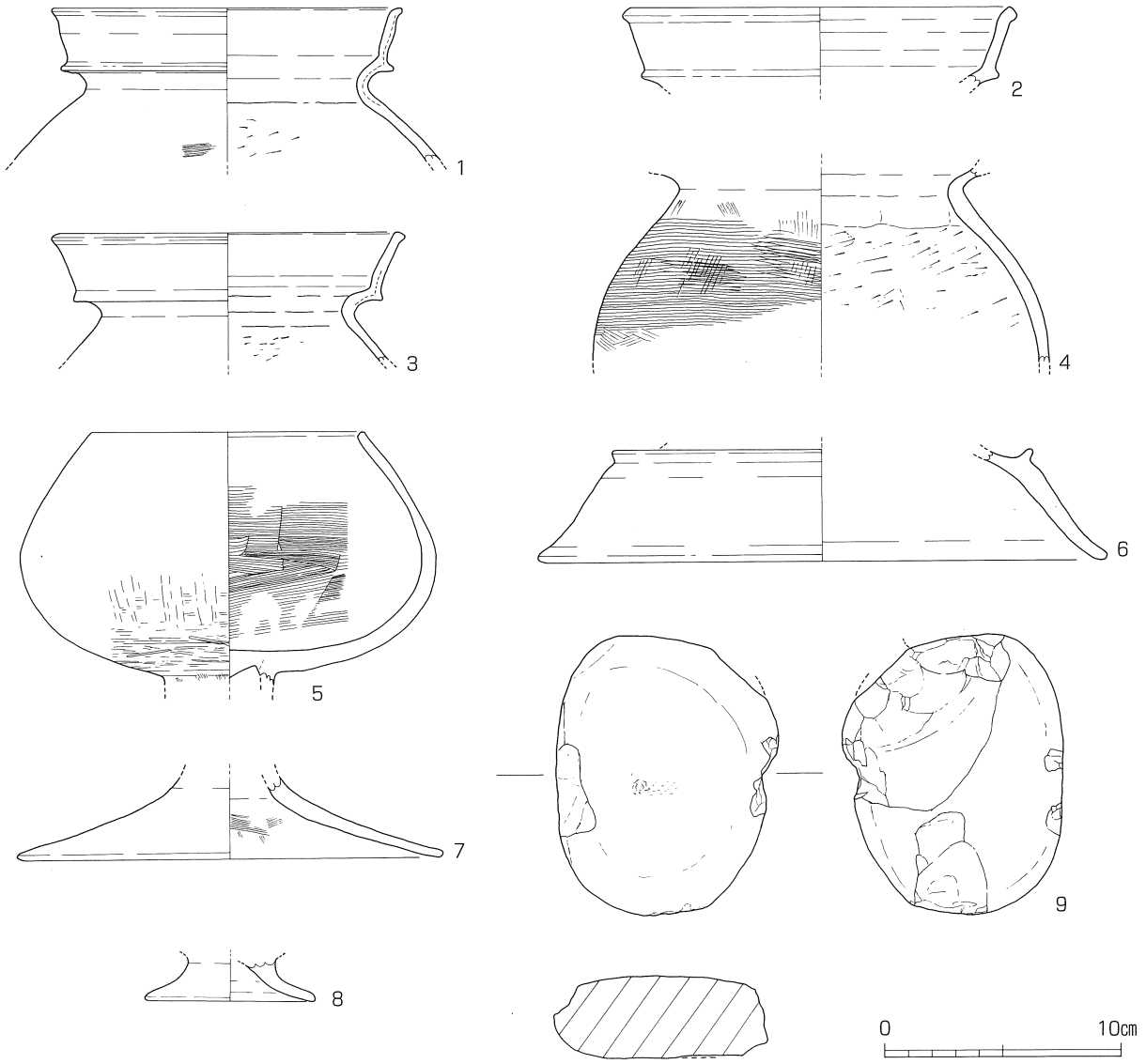


第71図　SD08･10･12出土遺物実測図(S=1:3)



第72図　SD13実測図(S=1:60)

なヨコ刷毛目が施される。４の口縁は稜の作りが甘く、強いヨコナデ痕が見られる。肩部に細かなヨコ刷毛目の上に櫛状工具による細い波状文が緩やかに巡る。内面の削りはやや下がった位置から始まり、肩部に指圧痕が認められる。この指圧痕は外面の波状文の位置に合致している。２．３は草田７期（小谷２期）に相当しよう。５は短く内傾する口縁の端部外側に面を持つものである。６は直立する口縁で、端部は５と同様外側に面を作る。肩部外面にはタテ方向の後ヨコ方向の刷毛目が施される。７は単純口縁の甕で、「く」の字状に開く口縁端部に面を持つ。布留１期段階のものと考えられる。８は底径３㎝を測る、小型の甕または壺の底部である。外面にススが付着している。９は土師器の底部で、鉄鉢状の尖底を呈する。D11グリッドの５層が落ち込んだ包含層から出土しており、「C11Ｇｒ土器溜り」に近い。器壁は厚く、精製された明るい胎土で、硬質に焼成されている。内面には指圧痕が見られる。ナデ調整された外面に、半月状の細い線刻が描かれている。半月の一端は線が交差している。何らかの記号であろうか。このような土器は、出雲平野においては他に類例が無く、３．４世紀の韓式土器に類似した底部を見ることが出来る。10は外反して開く、直口壺の口縁部である。11は頸部から胴下半部までのもので、頸部の屈曲部に沈線が巡る。内外ともタテ方向の刷毛目調整で肩部内

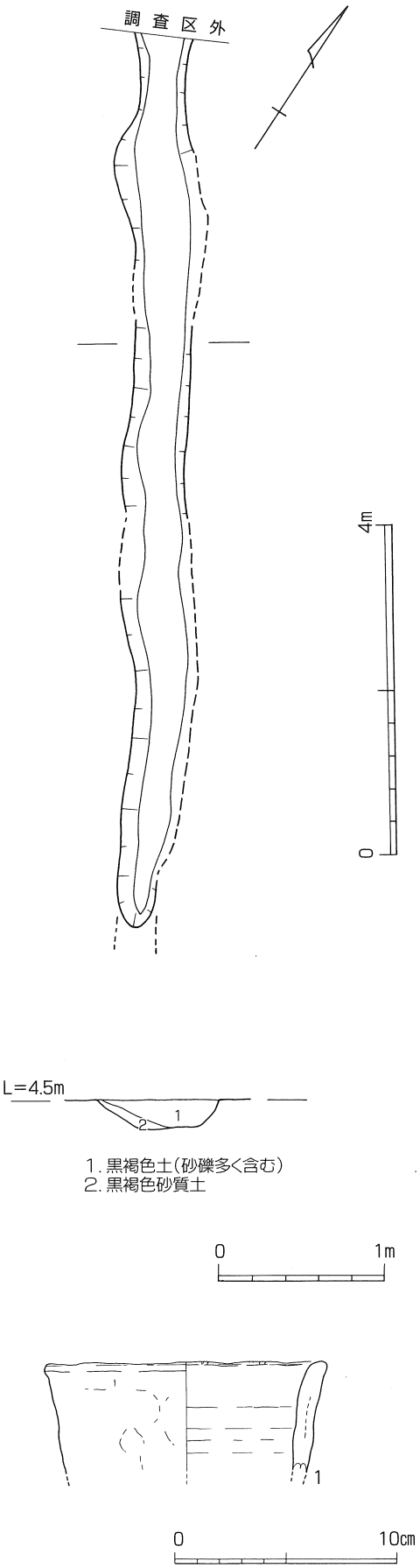


第73図　SD13出土遺物実測図(S=1:3)

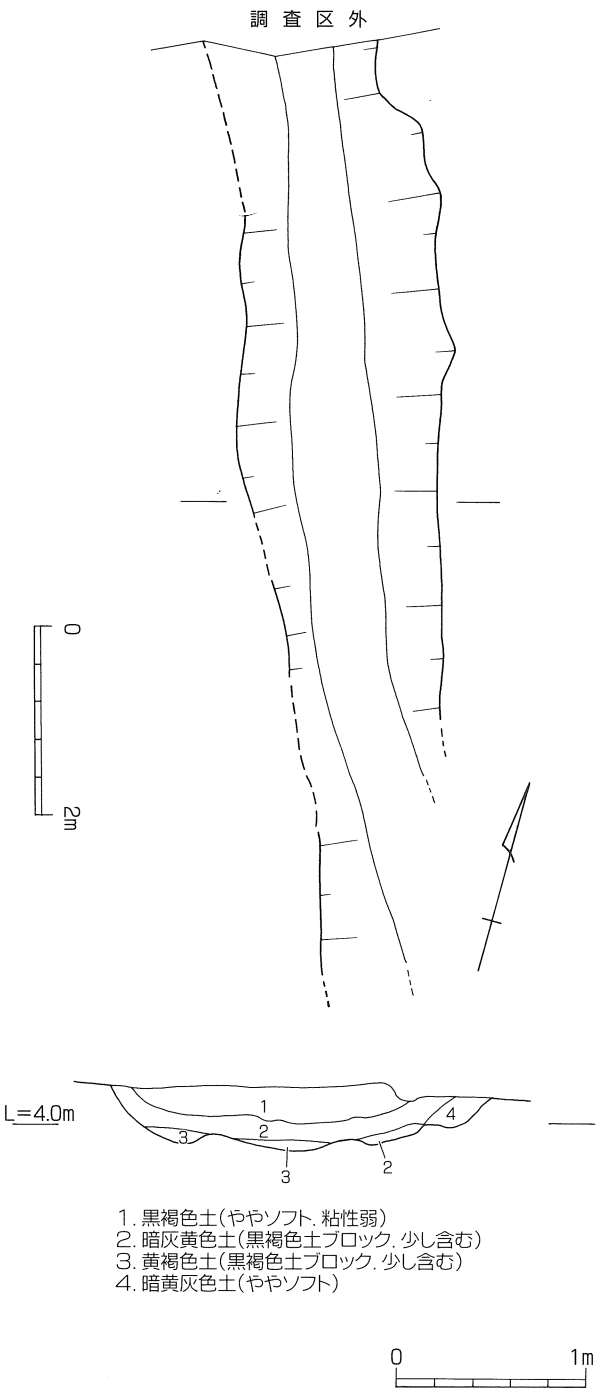
面には指圧痕が残る。弥生時代中期後葉の壺と思われる。12は丸く胴が張った小型の甕で、口縁部と底部を欠く。底部には接合痕があり、脚または台が付くものと考えられる。外面の調整は全体に細かなヘラミガキがかけられ、中心部に斜め方向の刷毛目が施される。一部ススが付着している。内面は削りに指圧痕が見られる。13はワイングラス型土器である。器壁は薄く口縁端部はやや上方に屈曲する。内外面とも風化が著しく、調整がはっきりしないが、内面上半部にはナデによる指圧痕が残る。底部を欠くが、脚が付く可能性が考えられる。類似する土器は、「山持川川岸遺跡土器群３」、「古志本郷遺跡Ｃ区ＳＤ１６．１７」、東出雲町の「勝負遺跡ＳＩ０５」、鹿島町の「南講武草田遺跡」からも出土しており、本調査区においても、これよりやや大型のワイングラス型土器がＳＤ１３から出土している（73－５）。

第77図１は土師器の高坏である。坏部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部は玉縁状に屈曲する。脚部外面にはタテ方向のミガキが施され、坏との接合は円盤充填法による。２～６は鼓形器台である。２は縦長の受部である。内外面ミガキ調整され、３は口縁端部を欠くが、開き気味の受部で、一部に赤色塗彩の痕が残る。口縁と筒部に擬凹線文が巡る。２．３は松本Ｖ－２様式に相当する。４～６は古墳時代前期前葉に入るもので、５は厚い器壁で、胎土も赤いことから、搬入品の可能性がある。６は器高10cm未満の低い器台で、脚部に円形の透かしが四方に穿たれる。受部の内外面にはヘラミガキが施される。７は甑型土器の突帯部分と思われる破片である。外面はヨコ刷毛目、内面は削りの後ナデが施される。突体部分にはナデの痕がよく残っている。８は壺または甕の取っ手である。ヘラ等で成形し、ナデつけられる。全体に赤色塗彩の痕が見られる。

第77図９～17は須恵器である。９～13は蓋で、９．10は擬宝珠状、11～13は輪状の摘みが付く。９は高広Ⅳ－Ｂ期に比定される。11は７世紀末から８世紀初めにかけてのものと思われ、他は概ね８世紀後半から９世紀前半の範疇に入るものと考えられる。14は口径11.5cmの返りを持つ小型の坏で、底部はヘラ切り離しである。15は内湾して立ち上



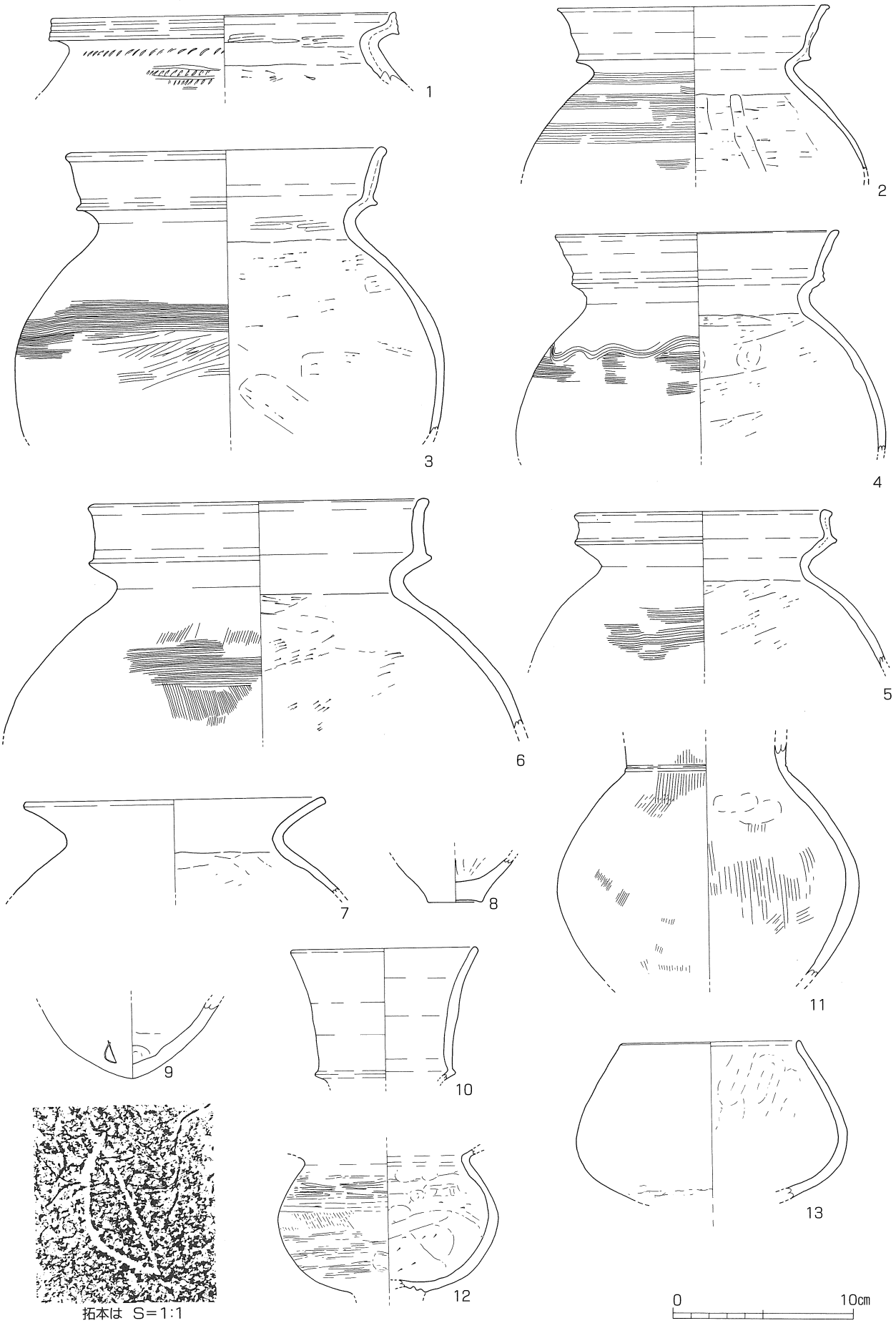
第74図　SD14実測図
（遺構 S=1:80　遺物S=1:3）



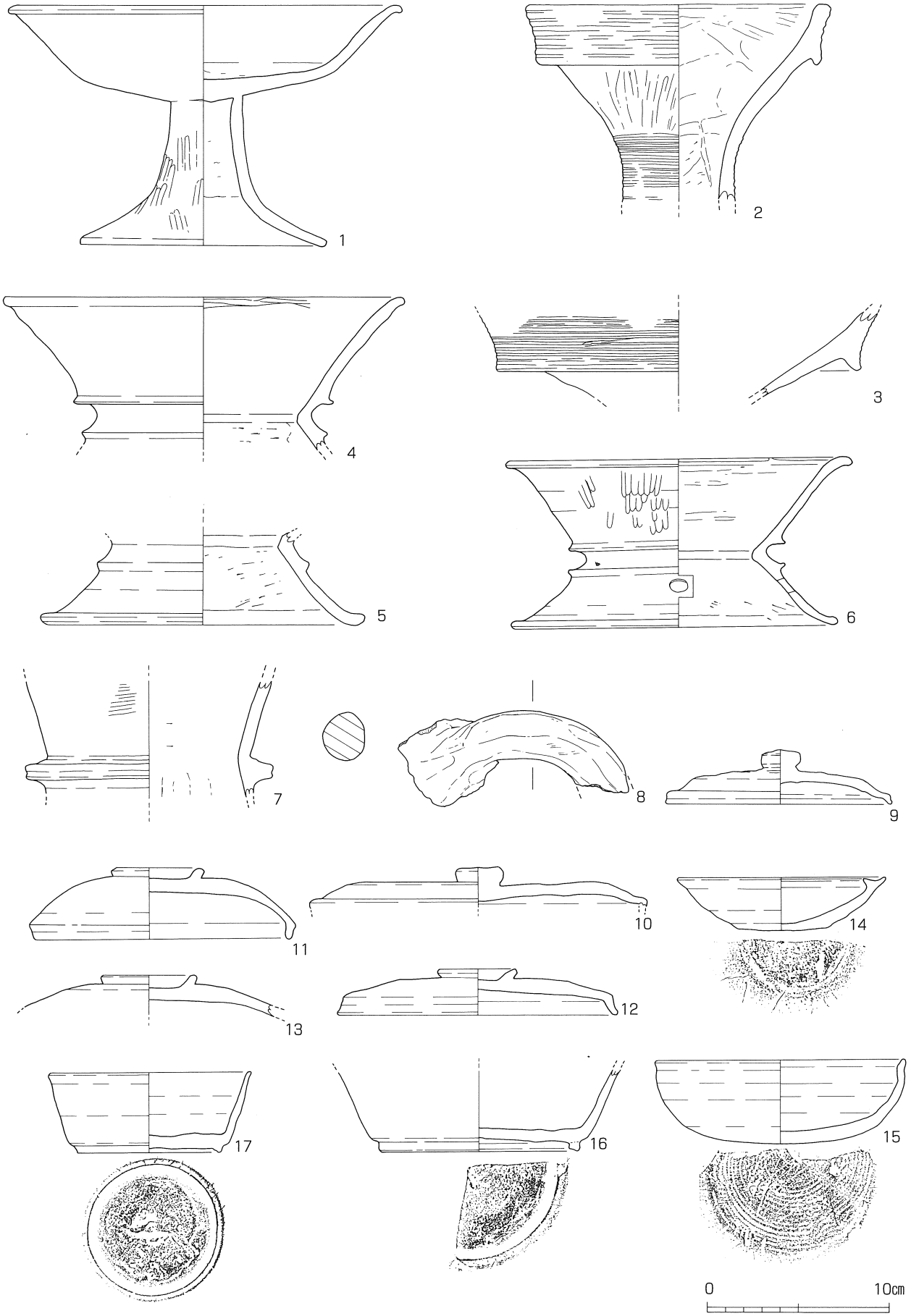
第75図 SD16実測図
(遺構 S=1:80 土層 S=1:40)

がる体部で、口縁は小さく屈曲する。底部は回転糸切りである。14は７世紀中葉、15は８世紀中葉に相当しよう。16. 17は高台の付く坏で、底部は回転糸切り離しである。９世紀前半に相当するものと考えられるが、16は石見系の所産と思われる。

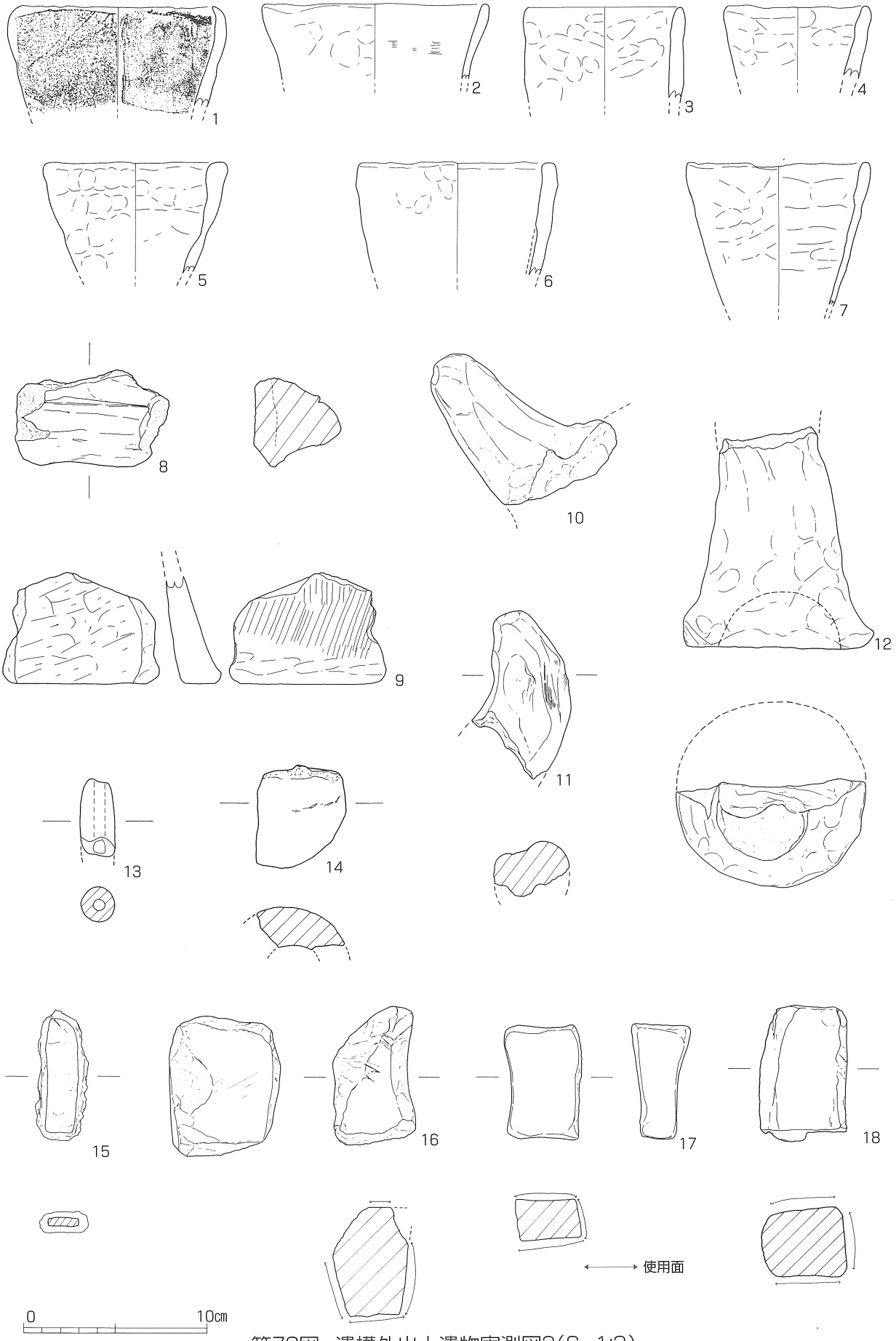
第78図１～７は製塩土器である。主に調査区の西側で出土している。破片のみで、ビニール袋(26cm×38cm) １袋分になる。１は口径11.5cmを測り、口縁端部は尖り気味に内湾する。外面には指圧痕が、内面には布目痕が残る。布目はきめ細かく、絹布を使用したものと思われる[14]。２は薄い器壁で、口縁端部を丸くおさめる。内面には指圧痕が見られず、布目をナデ消した可能性がある。３．４は口縁円端部を丸くおさめ、内外面ともナデ痕が顕著に見られる。３は胎土に小豆色の粒子を多く含む。５．６は口径10cm強を測り、口縁端部に平坦面を作る。７はやや尖り気味の口縁端部で、器壁が薄く、緻密な精製土を用いている。これらの製塩土器はいずれも底部を欠損しているが、砲弾状を呈する焼塩土器と考えられる。同様の製塩土器は第１～３次調査区においても検出している。８は厚さ５cm弱の土器破片である。断面は三角形を呈し、１面には削りが施される。移動式竈の庇部分と思われる。９は破片であるが、移動式竈の底部と考えられる。外面にタテ刷毛目、内面は荒い削りが施される。10. 11は土製支脚の受部、12は脚部で、底部は半円形に削り込んで成形される。13は径２cm弱を測る土錘である。14は鞴の羽口破片である。推定で径7.5cmになる。15は長さ7.1cm、幅2.6cmの鉄製品である。平釘の折れたものであろうか。16～18は砥石である。17は５面を使用している。きめ細かな材質で、仕上げ用の砥石と思われる。18は硬質な堆積岩を用いている。



第76図　遺構外出土遺物実測図1(S=1:3)



第77図　遺構外出土遺物実測図2(S=1:3)



第78図　遺構外出土遺物実測図3(S=1:3)

第4章　ま　と　め

まず、遺跡の変遷を通して各時期の様相について、これまで調査された第１～３次調査区と併せて述べる。

弥生時代～古墳時代前期前葉（第79図）

この時期を遺物から見ると、松本Ⅳ－２様式の弥生時代中期後葉から松本Ⅴ－１様式の後期初頭、草田１・２・３期の後期前葉から中葉、草田６・７期の終末から古墳時代前期前葉に大別される。草田５期の後期後葉はわずかに見られたが、草田４期の遺物は検出しなかった。また、中期後葉を遡る遺物は検出しなかった。

遺構としては、中期後葉から後期前葉にかけて掘削された溝状遺構ＳＤ０３・０４がある。本調査区出土の中期後葉の遺物のほとんどはこの溝の下層で検出している。ＳＤ０３と０４はその後何回か掘り直されながら継続して機能し、いずれも古墳時代前期前葉に埋没している。特に、ＳＤ０３は最終段階の古墳時代前期前葉の溝内中央に土器が一括廃棄され、その様相は古志本郷遺跡や天神遺跡の「環濠」と考えられる溝状遺構の出土状況に類似している。ＳＤ０３の東側で同方向に走る浅い溝のＳＤ１６は攪乱に破壊された部分が多いが、ＳＤ０３の掘り直し時に掘られ、埋まった跡ではないかと思われる。Ｃ11Ｇｒ土器溜り、Ａ・Ｂ11Ｇｒ土器溜りは、古い遺物を含まず、ほとんどが小谷１・２期の遺物（３期に入るものも若干ある）ことから、ＳＤ０３・０４の最終段階と同時期と考えられる。位置的にはＳＤ０３と０４の間であるが、土器の出土密度が低いＳＤ０３の北側であるＤＧｒでは土器溜りはないことなどから、ＳＤ０３に集中廃棄された遺物が流れ崩れて地山の落ち込んだ部分に溜まったとも考えられる。

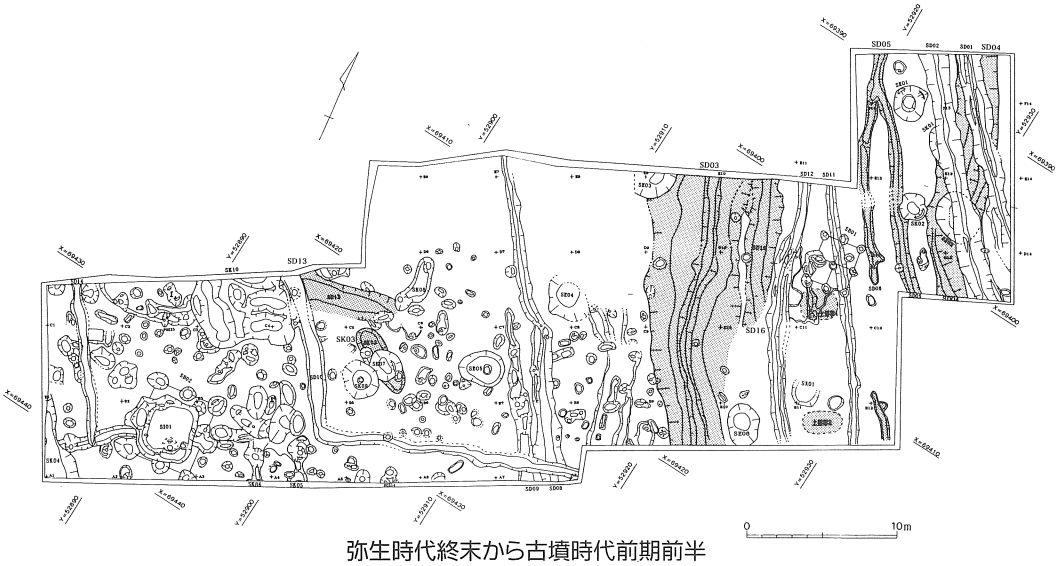
ＳＤ０３と０４の間には方向を同じくするＳＤ０５．０６の細い溝が掘られている。ＳＤ０５からは神原神社古墳土器埋納坑出土の壺に類似した土器（66－１）が出土しており、やはり前述の遺構同様古墳時代前期前葉にあたると考えられる。

調査区の西側で確認できた遺構はＳＫ０３（土杭）とＳＤ１３（溝状）のみである。いずれもほぼＳＤ０３．０４の最終埋没時と同じ古墳時代前期前葉と考えられる。ＳＫ０３からは後期前葉の土器（31－１）が完形で出土しており、土坑墓の可能性が考えられるが、古い遺構が掘り返されたものと思われる。他に当該期の遺構はなく、ＳＤ０３より西は集落の外になる印象が強い。

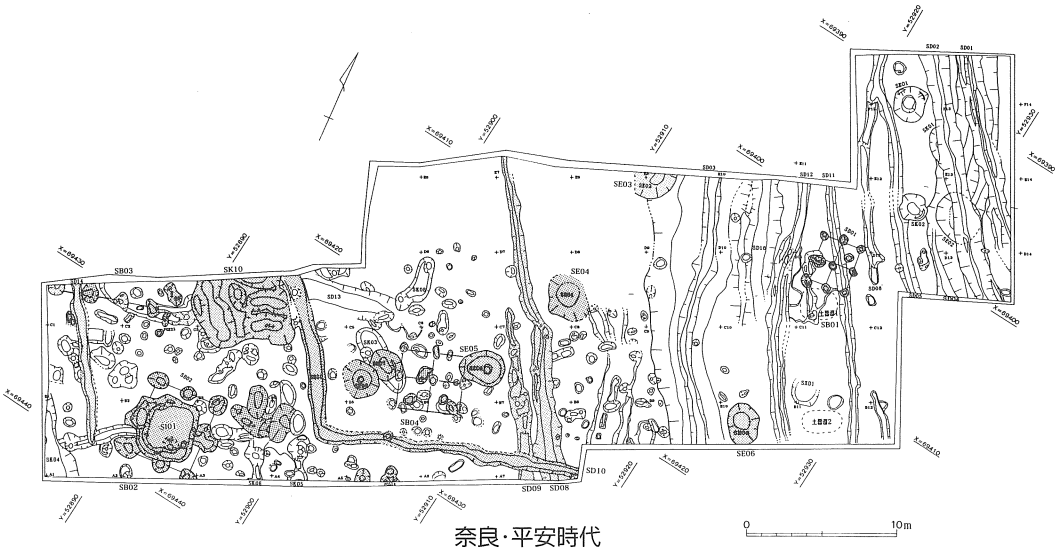
奈良・平安時代（第79図）

古墳時代前期後半から後期の遺構は検出されず、第３次調査区で古墳時代後期の土坑ＳＫ１８を検出したのみで、出雲平野の他の遺跡同様に集落の断絶が見られる。

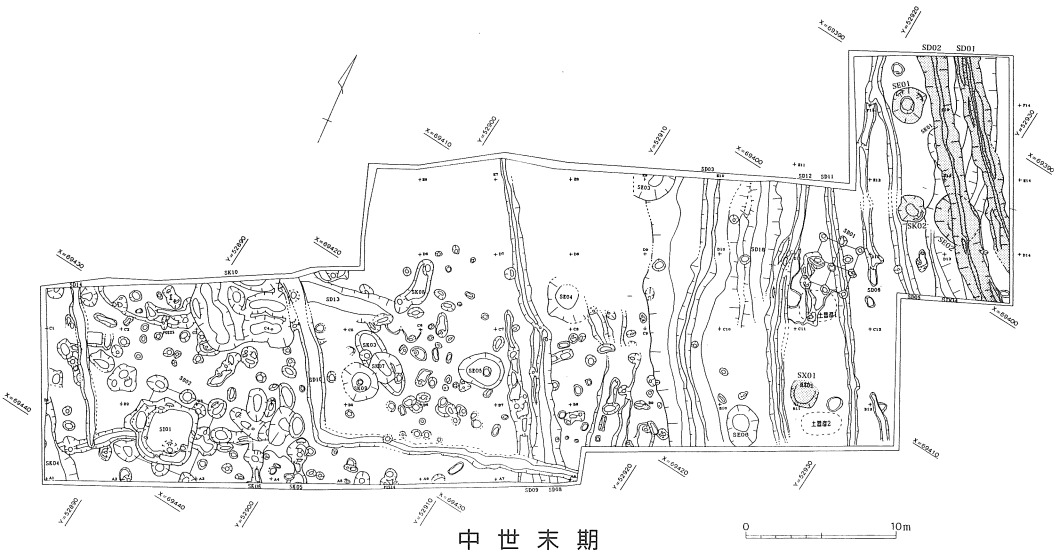
ＳＤ１０からは終末期の坏（71－１）が出土しているが、遺構としては奈良・平安時代に入るものである。溝は他にＳＤ０８．０９があり、いずれも農業用水目的の溝と考えられる。この時期になって本遺跡は再び盛隆期を迎えたと言え、第１～３次調査区同様遺物・遺構とも検出数が多くなる。



弥生時代終末から古墳時代前期前半



奈良・平安時代



中 世 末 期

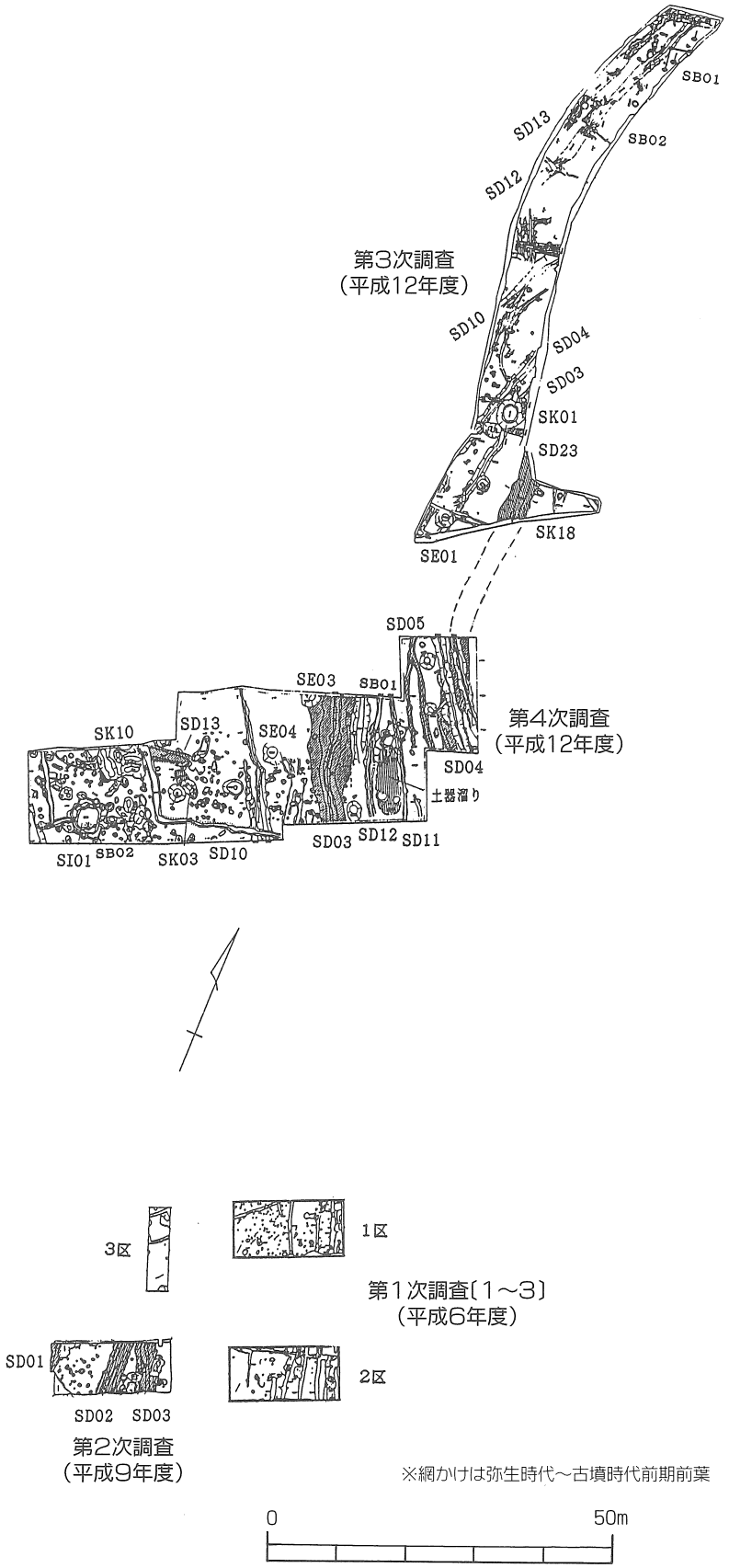
第79図　小山遺跡遺構変遷図(S=1:500)

調査区の中央部で井戸４基と３つの土坑を検出した。奈良時代にＳＥ０４．０５．０６が作られ、ＳＫ０７が掘られている。その後、平安時代にかけてＳＥ０３とＳＫ１０が掘られている。廃棄坑と考えられるＳＫ１０からは、須恵器の皿や赤色塗彩された土師器の坏・皿、製塩土器などがまとまって出土しており、生活の豊裕さを感じさせる。

また、本調査区では４棟の掘立柱建物を検出したが、それらはすべてこの時期のものである。小型の柱穴のＳＢ０１とやや大型の柱穴を成すＳＢ０２は倉庫跡と考えられ、ＳＫ１０と共存していたものと思われる。ＳＩ０１はＳＢ０２との切り合いから、それよりやや下ってＳＢ０４と同時期にあたる。墨書土師器を出土する柱穴を持つＳＢ０３は、ＳＫ１０より前に建てられたものと思われるがその時期差は少なく９世紀代と考えられる。その他建物にはなり得なかったが、検出したほとんどのピットは概ね当該期に掘られたものと思われる。

中世末（第79図）

10世紀以降、14世紀まで遺物・遺構とも検出されず、本遺跡では集落の衰退期であったのであろうか。蔵小路西遺跡では朝山氏の居館跡に比定される遺物・遺構が確認されており、中心は他所へ移動した可能性も考えられる。



第80図　小山第3地点遺跡遺構配置図(S=1:1000)

15・16世紀代になって、生活の痕跡であるＳＥ０１．０２と素堀の井戸と考えられるＳＫ０２が現れる。これらの井戸は第３次調査区で検出した中世末の井戸と同じ地下水脈に沿って掘られている。ＳＥ０２の後ＳＤ０１．０２の並行する溝が掘られるが、いずれも農業用水用の溝と考えられる。当該期の建物跡は検出しなかったが、土坑墓ではないかと思われる不明遺構ＳＸ０１がある。また、第３次調査区では区画溝が何本も掘られており、耕作地・居住区とも計画的な土地利用がなされていたと思われる。16世紀後半（近世）以降、明確な遺構はなく、埋土の様相から耕作地の状態が続いたものと考えられる。

小山遺跡第３地点遺構配置図（80図）

これまでの調査によって中心部の南北約200m間の様相が明らかになってきた。本遺跡におけるもっとも繁栄した時期は遺物・遺構の数から奈良・平安時代であるといえる。遺跡全域に展開しており、墨書土器（第１・３・４次調査）やヘラ描き土器（第１次調査）などを出土することから官衙施設の存在を窺わせる。第４次調査区は遺構・遺物の検出密度の高さから、当該期の位置的中心にあたると考えられる。しかし、官衙に比定される明確な資料はなく、集落の範囲内にとどまるものと思われる。ただし、調査区の西側へ遺跡が展開することが推察され、その存在を考慮する必要がある。

本遺跡では弥生時代から古墳時代にかけての環濠と思われる溝状遺構を合計６条検出している。その検出状況を表１に表した。

表１

溝状遺構	調査区	幅(m)	深さ(cm)	底標高(m)	時　　期
ＳＤ０１	第２次	1.20以上	60～70	3.76	弥生時代後期前葉
ＳＤ０２	第２次	2.40～3.00	70	3.84	弥生時代後期前葉
ＳＤ０３	第２次	3.00	60	3.92	弥生時代中期後葉～後期前葉
ＳＤ２３	第３次	3.30	80	3.74(旧) 3.72(新)	弥生時代後期前葉 弥生時代終末～古墳時代前期前葉
ＳＤ０３ (土器廃棄)	第４次	6.00	80～90	3.70(旧) 3.85(新)	弥生時代中期後葉～後期前葉 弥生時代終末～古墳時代前期前葉
ＳＤ０４	第４次	2.70～3.50	75～80	3.60	弥生時代中期後葉～後期前葉 弥生時代終末～古墳時代前期前葉

これらの溝は、幅が第４次のＳＤ０３を除いて、幅・深さ・底レベルも同程度である（ＳＤ０１は調査区隅での検出幅）。断面も逆台形で、環濠の様相を呈している。これらの溝のうちＳＤ２３（第３次）とＳＤ０４（第４次）は、規模・方向・時期ともに符合し、同じ溝と考えられる。ＳＤ２３とＳＤ０４をつなげた溝とＳＤ０３（第４次）は平行して右にやや弧を描くように走っており、弧の内側になる第４次調査区の東側の微高地上に集落の中心が展開していたものと考えられる。

ＳＤ２３（第３次）．ＳＤ０３．０４（第４次）とも、弥生時代中期後葉から後期前葉にかけて掘削されていることから、第２次調査区の溝と同時期に存在していたと考えられる。その後、第２次調査区のＳＤ０１．０２．０３は埋没したが、ＳＤ２３（第３次）．ＳＤ０３．０４（第４次）は、弥生時代終末から古墳時代初頭まで継続し、古墳時代前期前葉に廃棄されたものと思われる。あるいは、また、第３・４次調査区の溝（ＳＤ２３・０３・０４）は旧溝段階では第２次調査区の溝とつながって

おり、後の掘り直しにより経路が変わった可能性も考えられる。

このように遺跡の形成の早い段階で数条の溝が掘削され、そのうちの何本かが掘り直され継続して使用され、しかも、古墳時代初頭ほぼ同時期に一様に溝が廃棄され、終息していくという様相が、古志本郷遺跡・下古志遺跡・天神遺跡など、出雲平野の遺跡では共通して見られる。その理由については未だ不明であるが、そこには何らかの政治的・社会的要因が関わっているものと考えられる。

本遺跡より直線距離で約0.5km南に位置する蔵小路西遺跡では、旧自然河道から弥生時代前期の土器が出土しており、その初現は本遺跡よりかなり早い段階である。第３次調査区において古墳時代後期の土坑（ＳＫ１８）の混入遺物としてではあるが、松本Ⅲ－１様式の甕破片を１点検出しており、区域によっては中期中葉に遡る可能性もある。

四絡遺跡群の形成と発展は矢野遺跡を拠点として形作られたものであるが、初段階では点的に拡散し、密接に関わり合いながらもその発展には少なからず差異を持つと思われる。今後とも四絡遺跡群の形成については多方面からの調査が必要と思われる。

参考文献一覧

田中義昭　「出雲市小山遺跡第１地点の調査」『古代金属生産の地域的特性に関する研究』　1992

田中義昭他　「出雲市矢野遺跡の発掘調査」『昭和63年度科学研究費補助金（一般研究Ａ）研究成果報告書』　1989

寺井　誠　「近畿地方の三韓系土器」『研究紀要』第４号　大阪市文化財協会　2001

「古墳出現前後の韓半島系土器」『３・４世紀日韓土器の諸問題』釜山考古学研究会・庄内式土器研究会・古代学研究会　2001

近藤義郎編　『日本土器製塩研究』　1994

島根県教育委員会　「勝負遺跡・堂床古墳」『一般国道９号安来道路建設予定地内発掘調査報告書西区10』　1998

島根県教育委員会　「古志本郷遺跡Ⅰ」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ』　1999

島根県教育委員会　「古志本郷遺跡Ⅱ」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅠ』　2001

四絡郷土誌編集委員会　『四絡郷土誌』　1986

出雲高校社会部　「発掘レポ」『紫苑』７号　1968

出雲市教育委員会『市道四絡30号外１線道路改良工事に伴う小山遺跡第３地点発掘調査報告書（第３次発掘調査）』　2002

註

(1)　出雲考古学研究会　『古代の出雲を考える５　出雲平野の集落遺跡Ⅱ』　1986

(2)　出雲市教育委員会　『島根県立看護短大教職員宿舎建設に伴う小山遺跡発掘調査報告書』　1999

(3)　出雲市教育委員会　「小山遺跡」『出雲市埋蔵文化財調査報告書　第６集』　1996

(4)　島根県教育委員会　「蔵小路西遺跡」『一般国道９号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書２』　1999

(5)　平石　充氏に解読していただいた。

(6)　古墳時代前期前葉の編年は、松山智弘「小谷式再検討－出雲平野における新資料から－」『島根古学会誌』　第17集　2000による。

(7)　次山　淳「初期布留式土器群の西方展開－中四国地方の事例から－」『古代』第103号　1997による

(8)　弥生時代中期後葉から後期前葉の編年は松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年』　1992による。

(9)　島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書－和田団地造成工事に伴う発掘調査－』　1984による。

(10)　壺・甕の口縁形態と底部の調整については、上述(6)の文献を参考とし、その位置づけについては松山智弘氏よりご教示頂いた。

(11)　弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての編年は、鹿島町教育委員会「南講武草田遺跡」『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５』　1992と、中川　寧「山陰の後期弥生土器における編年と地域間関係」『島根考古学会』第13集　1996を参考とした。

(12)　島根県教育委員会「三田谷Ⅰ遺跡（Vol２）」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ』　2000

(13)　出雲市教育委員会「大井谷Ⅱ遺跡」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』　2001

(14)　内田律雄氏のご教示による。

(15)　羽木伸幸氏のご教示による。

出土遺物観察表（土器）

挿図番号	図版	出土地点	種別	器種	法量(単位:cm) 口径	底径	器高	形態・調整の特徴	色調	胎土	備考
7-1	23	SI01	須恵器	坏	10.6	8.2	2.7	回転糸切り 回転ナデ	灰色		
7-2	23	SI01	須恵器	坏	12.0	8.8	4.6	回転糸切り後、ナデ 回転ナデ	灰色		
7-3	23	SI01	須恵器	坏 (底部)	16.2	8.3		回転ナデ	灰色	微砂粒含む	高台付
7-4	23	SI01	土師器	坏	11.8	7.3	3.6	回転ナデ	外／橙色 内／明赤褐色	密	赤色塗彩
7-5	23	SI01	土師器	甕	33.2			外／荒い縦刷毛目 内／削り	外／橙色 内／灰褐色	微砂粒多く含む	頸部にスス
7-6	23	SI01	土師器	甕	28.7			外／荒い縦刷毛目 内／削り	にぶい黄橙色	微砂粒多く含む	
7-8	23	SI01	弥生土器	高坏 (坏部)	22.0			口縁に４条の擬凹線	にぶい黄橙色	微砂粒若干含む	赤色塗彩
11-1	24	SB02-P2	須恵器	坏	13.2			回転ナデ	黄灰色	密	
11-2	24	SB01-P1	土師器	坏	12.1			回転ナデ	明赤褐色	密	赤色塗彩
13-1	37	SB02-P2	土師器	坏 (底部)		8.2		糸切り後、ナデ	外／橙色 内／明赤褐色	密	赤色塗彩 墨書
13-2		SB02	土師器	製塩土器				指圧痕、ナデ	青灰色	密、１㎜以下の砂粒を少し含む	
16-1	23	P0422	土師器	坏 (底部)		11.3		ナデ 見込みに螺旋状の渦巻き暗文	赤褐色	密	赤色塗彩 暗文
17-1	23	P0202	土師器	甕							
17-2	24	P0514	土師器	甕	26.5			ナデ 内／刷毛目	外／黄橙色 内／橙色	砂粒含む	
17-3	24	P0225	土師器	坏	11.8		3.2	回転ナデ	橙色	密、	赤色塗彩
18-1	24	SE01	土師器	皿	15.5			回転ナデ	外／明赤褐色 内／にぶい赤褐色	密	高台付
20-1	24	SE02	土師器	甕	13.0			外／横刷毛目、肩部に刺突文 内／削り	外／にぶい黄橙色 内／浅黄橙色	微砂粒多く含む 微砂粒多く含む	
20-2	24	SE02	土師器	甕	16.1			ナデ 内／削り	外／にぶい橙色 内／にぶい黄橙色		単純口縁
20-3	24	SE02	土師器	甕	15.7			ナデ 内／削り	にぶい黄橙色	微砂粒含む	単純口縁 布留式系
23-1	24	SE04	須恵器	蓋	17.4		2.3	回転ナデ	灰色	密 微砂粒少し含む	輪状摘み
23-2	24	SE04	土師器	甕	22.6			外／刷毛目 内／削り	にぶい橙色	微砂粒含む	
23-3	24	SE04	土師器	竈 (庇部)				ナデ	外／にぶい黄褐色 内／橙色	微砂粒含む	
25-1		SE06	須恵器	蓋 (破片)				平坦な口縁で、小さな返りが付く	灰色	密	
25-2	24	SE06	土師器	皿		5.9		回転糸切り	浅黄色	微砂粒含む。	
27-1	25	SX01	土師器	小皿	10.9	5.8	2.5	回転糸切り 轆轤成形ナデ	淡橙褐色	精製土	
27-2	25	SX01	土師器	小皿	7.6	4.4	2.1	回転糸切り 轆轤成形ナデ	淡橙褐色	精製土	
27-3	25	SX01	土師器	小皿	7.5	4.2	1.9	回転糸切り 轆轤成形ナデ	淡橙褐色	精製土	
27-4	25	SX01	土師器	小皿	7.8	4.3	2.1	回転糸切り 轆轤成形ナデ	淡橙褐色	精製土	
31-1	25	SK03	弥生土器	鉢	9.6	5.6	9.5	口縁に２条の擬凹線、 外／ヘラミガキ、２条の沈線の間に刺突列点文が巡る 内／頸部以下削り	黒色	微砂粒含む	松本Ｖ－１ 頸部に穿孔
31-2	25	SK03	弥生土器	甕 (底部)		5.5		外／縦刷毛目 内／削り	外／灰黄褐色 内／灰黄色	微砂粒多く含む	
31-3	25	SK03	土師器	甕	15.7			ナデ	にぶい黄橙色	微砂粒少し含む	
31-4	25	SK03	土師器	甕	23.3			外／縦刷毛目 内／削り	外／橙色 内／にぶい褐色	微砂粒多く含む	布留甕系
35-1	26	SK07	弥生土器	甕	13.8			口縁に３条の擬凹線 外／縦刷毛目 内／ヘラ削り	にぶい黄橙色	微砂粒少し含む	

挿図番号	図版	出土地点	種別	器種	法量(単位:cm)			形態・調整の特徴	色調	胎土	備考
					口径	底径	器高				
35-2	26	SK07	弥生土器	甕	12.0			口縁に３条の擬凹線	にぶい黄橙色	微砂粒少し含む (石英・長石・雲母)	スス付着
35-3	26	SK07	弥生土器	甕	19.8			口縁に３条の擬凹線 内／ヘラ削り	にぶい黄橙色	微砂粒多く含む	
35-4	26	SK07	弥生土器	甕	20.0			口縁に４条の擬凹線 内／ヘラ削り	浅黄橙色	微砂粒含む	スス付着
35-5	26	SK07	土師器	坏 (底部)	12.5			ナデ、指圧痕	外／褐色 内／にぶい褐色	密	赤色塗彩
35-6	26	SK07	土師器	坏 (底部)	13.4			糸切り離し後、ヘラ等でナデ	外／にぶい暗褐色 内／褐色	密	赤色塗彩
38-1	25	SK09	須恵器	蓋 (口縁破片)	14.5			回転ナデ	灰色	密	一部に自然釉
38-2	25	SK09	須恵器	坏	9.0			回転糸切り 回転ナデ	灰色	密	スス付着
40-1	26	SK10	須恵器	蓋	17.0			天井部回転削り 回転ナデ	灰色	密	
40-2	26	SK10 落ち込み4	須恵器	蓋	13.4			回転ナデ	灰色	密 微砂粒若干含む	
40-3	27	SK10	須恵器	坏	16.2	11.3	6.1	回転糸切り 回転ナデ	灰色	密 微砂粒少し含む	高台付 底部に「×」印の線刻
40-4	27	SK10	須恵器	皿	18.5	14.6	3.0	回転糸切り離し後、ナデ 回転ナデ	灰色	密 微砂粒少し含む	高台付
40-5	27	SK10	須恵器	皿	17.8	13.2	3.1	回転糸切り後ナデ 回転ナデ	灰色	密 微砂粒少し含む	高台付
40-6	26	SK10	須恵器	皿(底部)		14.4		回転糸切り 回転ナデ	灰色	密	高台付
40-7	26	SK10	須恵器	甕	20.5			外／敲き 内／円形当て具 口縁部／回転ナデ	褐色	密 微砂粒若干含む	
40-8	26	SK10	須恵器	甕(底部)				外／平行敲き後、弱いカキメ 内／円形当て具	灰色	密	
40-9	28	SK10 落ち込み2	土師器	坏	11.6	7.0	3.6	回転ナデ 轆轤成形	橙色	密	赤色塗彩
40-10	28	SK10	土師器	坏	12.0	9.3	3.6	回転ナデ、轆轤成形 底面に板状工具によるナデ	淡橙褐色	密	赤色塗彩
40-11	27	SK10 落ち込み3	土師器	坏	13.9	9.4	3.3	回転ナデ、轆轤成形 回転糸切り後ナデ	橙色	密	赤色塗彩
40-12	28	SK10	土師器	坏	10.7	8.2	3.6	回転ナデ、轆轤成形 底面に板状工具によるナデ	橙色	密	赤色塗彩
40-13	27	SK10	土師器	坏	12.6	8.0	3.6	回転糸切り後ナデ、指圧痕 轆轤成形	明赤褐色	密 微砂粒少し含む	赤色塗彩
40-14	27	SK10 落ち込み3	土師器	坏	12.2	9.0	3.4	回転糸切り後ナデ 内／塗り刷毛目	明赤褐色	密	赤色塗彩
40-15	27	SK10	土師器	坏	12.0	7.5	3.6	回転ナデ 底部に指圧痕	明赤褐色	密	赤色塗彩
40-16	27	SK10 落ち込み1	土師器	坏	12.0	8.2	3.6	回転糸切り後ナデ、 底面に板状工具によるナデ	橙色	密	赤色塗彩
40-17	28	SK10	土師器	坏	12.3	8.5	3.7	回転糸切り後ナデ 轆轤成形	明赤褐色	密 微砂粒若干含む	赤色塗彩
40-18	27	SK10	土師器	坏	12.8	8.6	3.5	回転糸切り後ナデ、指圧痕 轆轤成形	明赤褐色	密	赤色塗彩
40-19	27	SK10 落ち込み1	土師器	坏	12.2	8.4	3.3	回転ナデ、轆轤成形 底部なでつけ	明赤褐色	密	赤色塗彩
40-20	28	SK10	土師器	坏 (破片)			3.8	回転ナデ	橙褐色	密	高台付 赤色塗彩
40-21	28	SK10 落ち込み1	土師器	皿	13.6	10.6	2.4	回転ナデ	橙色	密	赤色塗彩
40-22	28	SK10 落ち込み1	土師器	皿	13.1	10.0	2.1	回転ナデ	橙色	密	赤色塗彩
40-23	27	SK10	土師器	皿	13.4	10.3	2.0	回転ナデ 底面に板状工具によるナデ	明赤褐色	密	赤色塗彩
40-24	28	SK10	土師器	皿	13.6	9.6	2.4	回転ナデ	橙褐色	密	赤色塗彩
40-25	28	SK10	土師器	皿	17.6	13.0	2.7	回転ナデ	淡橙褐色	密	貼付高台付 赤色塗彩
41-1	28	SK10	土師器	甕	33.0			外／斜め刷毛目 内／横削り	橙色	やや粗 微砂粒多く含む	

挿図番号	図版	出土地点	種別	器種	法量(単位:cm)			形態・調整の特徴	色調	胎土	備考
					口径	底径	器高				
41-2	28	SK10	土師器	甕	19.7			外／荒い縦刷毛目 内／横削り	外／にぶい橙色 内／浅黄橙色	微砂粒多く含む (雲母・長石)	
41-3	28	SK10	土師器	製塩土器	11.4			外／指圧痕 内／横ナデ、布目？	浅黄橙色 一部黄橙色	精製土	口縁端部尖る
41-4	28	SK10	土師器	製塩土器	11.3			外／指圧痕 内／横ナデ	外／橙色 内／にぶい橙色	微砂粒多く含む	口縁端部丸み
41-5	28	SK10	土師器	製塩土器	13.3			外／指圧痕、ひび割れ 内／強い横ナデ	にぶい橙色	精製土	口縁端部に面
41-6	28	SK10	土師器	製塩土器	11.2			外／ナデ、ひび割れ 内／横ナデ	にぶい橙色	精製土 微砂粒若干含む	口縁端部に面
41-7	28	SK10	土師器	製塩土器	15.6			外／指圧痕 内／横ナデ	にぶい橙色	精製土 小豆色粒子含む	口縁端部に面 41-8と同一
41-8	28	SK10	土師器	製塩土器	13.5			ナデ	外／にぶい橙色 内／浅黄橙色	精製土 小豆色粒子含む	口縁端部に面 41-7と同一
41-9	28	SK10	土師器	製塩土器	10.0			外／横ナデ 内／ナデ	外／灰黄色 内／にぶい黄橙色	精製土 微砂粒少し含む	口縁端部丸み
43-1	29	C11Gr 土器溜り	土師器	複合口縁 細頸壺	23.0			口縁端部は外方に引き出す、内面に指ナデ痕、内面上半部は横削り	にぶい黄橙色	微砂粒多く含む	頸部に有軸羽状文
43-2	29	C11Gr 土器溜り	土師器	複合口縁 細頸壺	23.8			口縁端部は玉縁状、器壁厚い 外／横刷毛目 内／横削り、指圧痕	外／浅黄色 内／黄橙色	微砂粒多く含む (石英・長石・)	頸部に有軸羽状文
43-3	29	C11Gr 土器溜り	土師器	複合口縁 細頸壺	25.0			口縁端部は玉縁状、頸部内面に指ナデ痕、 内／横削り	外／浅黄橙色 内／にぶい黄橙色	微砂粒含む (石英・長石・雲母)	頸部に有軸羽状文 肩部に刺突文
43-4	29	C11Gr 土器溜り	土師器	複合口縁 細頸壺	23.3			口縁端部は外方に肥圧、頸部内面に指ナデ痕、 外／縦刷毛目後横刷毛目	外／にぶい黄橙色 内／灰白色	微砂粒多く含む (石英・長石・雲母)	頸部に有軸羽状文
43-5	30	C11Gr 土器溜り	土師器	複合口縁 細頸壺	18.3			口縁端部は外方に肥圧、頸部内面に指圧痕、器壁厚い	にぶい黄橙色	微砂粒若干含む	
44-1	30	C11Gr 土器溜り	土師器	甕	16.3			口縁端部に平坦面、ヨコナデ、 内／横削り	にぶい黄橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	
44-2	31	C11Gr 土器溜り	土師器	甕	14.9			口縁端部に平坦面、器壁厚い 内／横削り	外／にぶい黄橙色 内／にぶい橙色	微砂粒多く含む	スス付着
44-3	31	C11Gr 土器溜り	土師器	甕	13.4			口縁端部に平坦面 内／横削り	外／浅黄橙色 内／にぶい橙色	微砂粒多く含む	肩部に波状文・刺突列点文
44-4	31	C11Gr 土器溜り	土師器	甕	14.0			口縁端部に平坦面、器壁厚い 内／横削り	にぶい黄橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	肩部に刺突列点文
44-5	31	C11Gr 土器溜り	土師器	甕	15.0			口縁端部に平坦面、器壁厚い 外／上半部横刷毛目、下半は縦	外／浅黄橙色 内／にぶい黄橙色	微砂粒多く含む	肩部に刺突列点文
44-6	29	C11Gr 土器溜り	土師器	甕	15.6			口縁端部に平坦面、 内／強い削り	浅黄橙色	微砂粒含む	スス付着
44-7	29	C11Gr 土器溜り	土師器	甕	14.4			口縁端部に平坦面、器壁厚い 内／横削り、ナデ	にぶい黄橙色	微砂粒多く含む	
44-8	31	C11Gr 土器溜り	土師器	甕	14.8			外／縦刷毛目後横刷毛目 内／横削り	淡黄褐色	微砂粒多く含む	スス付着
44-9	29	C11Gr 土器溜り	土師器	甕	14.0			外／横刷毛目 内／横削り	にぶい黄橙色	微砂粒多く含む	
44-10	30	C11Gr 土器溜り	土師器	甕	13.4			外／横刷毛目 内／削り	外／にぶい橙色 内にぶい黄橙色	微砂粒多く含む	スス付着
44-11	29	C11Gr 土器溜り	土師器	甕	15.0			口縁端部は外に引き出す 内／横削り、器壁厚い	にぶい黄橙色	微砂粒多く含む	
45-1	29	C11Gr 土器溜り	土師器	甕	18.0			外／横刷毛目 内／横削り、器壁厚い	外／橙色 内／浅黄橙色	微砂粒多く含む	
45-2	30	C11Gr 土器溜り	土師器	甕	19.3			外／横刷毛目 内／横削り	にぶい黄橙色	微砂粒多く含む	
45-3	31	C11Gr 土器溜り	土師器	甕	17.5			外／上半は横、下半は縦の刷毛目 内／横削り、指圧痕	浅黄橙色	微砂粒多く含む	スス付着
45-4	30	C11Gr 土器溜り	土師器	甕	17.2			外／肩部縦刷毛目、胴部横刷毛目 内／横削り、指ナデ痕	にぶい橙色	微砂粒多く含む	スス付着
45-5	30	C11Gr 土器溜り	土師器	甕	23.2			外／刷毛目 内／削り、器壁厚い	外／にぶい橙色 内／淡黄色	微砂粒多く含む (石英・長石)	
45-6	31	C11Gr 土器溜り	土師器	甕	14.5			器壁厚く、だれた口縁 内／横削り	浅黄橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	
45-7	30	C11Gr 土器溜り	土師器	甕	13.2			口縁に強いナデ、器壁厚い 外／縦＋横刷毛目、 内／削り、指圧痕、	外／浅黄橙色 内／にぶい黄橙色	微砂粒多く含む	肩部に米粒型刺突文
45-8	31	C11Gr 土器溜り	土師器	甕or鉢 (底部)		10.0		外／刷毛目、器壁薄い 内／削り、指圧痕	淡黄褐色	微砂粒含む	

挿図番号	図版	出土地点	種別	器種	法量(単位:cm)			形態・調整の特徴	色調	胎土	備考
					口径	底径	器高				
46-1	30	C11Gr 土器溜り	土師器	甕	16.0			口縁端部を上方に引き上げる	にぶい黄橙色	微砂粒少し含む	布留甕系 スス付着
46-2	30	C11Gr 土器溜り	土師器	甕	16.5			口縁端部は平坦面 内／横削り	にぶい黄橙色	微砂粒少し含む	布留甕系
46-3	31	C11Gr 土器溜り	土師器	甕	16.5			口縁端部は平坦面 外／刷毛目 内／横削り、ナデ	にぶい黄橙色	微砂粒多く含む	布留甕系 スス付着
46-4	31	C11Gr 土器溜り	土師器	直口壺	10.8			外／縦ミガキ 内／ナデ	にぶい黄橙色	微砂粒少し含む (石英・長石)	
46-5	30	C11Gr 土器溜り	土師器	高坏	20.0			内／横ミガキ 脚外／縦ミガキ	外／黄橙色 内／橙色	微砂粒含む	刺突痕α
46-6	31	C11Gr 土器溜り	土師器	高坏 (坏部)	22.6			外／タテ刷毛目、ミガキ 内／ミガキ	灰黄褐色	微砂粒少し含む (石英・長石)	刺突痕α
46-7	31	C11Gr 土器溜り	土師器	高坏		13.4		坏部／ミガキ 脚部外／刷毛目、 内／削り、ハケ	外／にぶい黄橙色 内／にぶい橙色	微砂粒多く含む	
46-8	30	C11Gr 土器溜り	土師器	高坏 (底部)				外／ナデ、刷毛目 内／指圧痕	外／橙色 内／浅黄橙色	微砂粒多く含む	4方に円形透かし
46-9	31	C11Gr 土器溜り	土師器	低脚坏	19.4	7.6	5.4	ナデ	外／にぶい黄橙色 内／浅黄橙色	微砂粒多く含む	
46-10	32	C11Gr 土器溜り	土師器	鼓型器台	20.4	18.2	13.1	ナデ、器壁厚い 脚内／削り	橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	
46-11	32	C11Gr 土器溜り	土師器	鼓型器台	19.2	15.0	9.7	ナデ、器壁厚い 脚内／削り	にぶい橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	
48-1	32	A.B11Gr 土器溜り	土師器	甕	16.6			口縁端部は玉縁状、 内／横削り、器壁厚い	にぶい黄橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	草田6新
48-2	32	A.B11Gr 土器溜り	土師器	甕	16.7			口縁端部に面、稜は甘い 内／横削り、器壁薄い	にぶい橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	草田6新
48-3		A.B11Gr 土器溜り	土師器	小型甕	12.8			口縁は短くダレ気味、指圧痕 外／上半は横、下半は縦の刷毛目 内／横削り	にぶい橙色	微砂粒多く含む (石英・長石・雲母)	
48-4	32	A.B11Gr 土器溜り	土師器	甕	15.2			外／横刷毛目 内／横削り	暗黄褐色	微砂粒少し含む (石英・長石)	小谷1
48-5	32	A.B11Gr 土器溜り	土師器	甕	13.0			口縁は肥厚し、外側に面を持つ、内面削りに指圧痕、器壁厚い	にぶい黄橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	小谷2
48-6	32	A.B11Gr 土器溜り	土師器	甕	16.8			外／横刷毛目、器壁厚い 内／横削り、ナデ	暗黄褐色	微砂粒少し含む (石英・長石)	刺突列点文 (周巡せず)
48-7	32	A.B11Gr 土器溜り	土師器	甕	15.5			外／横刷毛目、器壁厚い 内／横削り	暗黄褐色	微砂粒少し含む (石英・長石)	
48-8	33	A.B11Gr 土器溜り	土師器	鼓型器台	17.8	16.8	9.8	外・受部 内／ナデ 脚内／削り	にぶい黄橙色	微砂粒少し含む (石英・長石)	脚内に2条のヘラ記号
48-9	33	A.B11Gr 土器溜り	土師器	大型高坏	27.4	19.3	15.8	坏部ナデ、低く開く脚外面は刷毛目、内面は削り、器壁厚い	明黄褐色	微砂粒含む	刺突痕α 有段
48-10	33	A.B11Gr 土器溜り	土師器	小皿	7.8	4.5	2.1	回転糸切り 轆轤成形	淡黄褐色	精製土	SX01からの混入
50-1	51	SD01	弥生土器	甕	27.7			外／縦刷毛目 内／ヘラ削り	橙色	微砂粒多く含む	口縁に4条の擬凹線、スス
50-2	51	SD01	須恵器	坏		9.6		回転糸切り 回転ナデ	灰色	密	高台付 外面ヘラ記号
50-3	51	SD01	須恵器	灯明皿	10.0	6.0	2.8	回転糸切り後ナデ 回転ナデ	黄灰色	密	
50-4	51	SD01	紛青沙器	皿	9.5	3.7	2.8	見込みに4ヶ所の体留め やや雑な仕上げ	暗青緑色	密	李朝 釉薬薄い
51-1	51	SD02	土師器	甕	14.2			外／上半は横、下半は縦の刷毛目 内／削り、一部指圧痕	外／にぶい黄橙色 内／灰黄色	微砂粒多く含む	肩部に刺突列点文
51-2	51	SD02	土師器	甕	18.4			外／縦刷毛目 内／横削り	外／黄褐色 内／にぶい黄色	微砂粒含む (石英・長石)	布留甕系
51-3	51	SD02	土師器	甕	18.9			外／ナデ 内／横削り	外／にぶい黄橙色 内／浅黄橙色	微砂粒多く含む	布留甕系
51-4	51	SD02	土師器	甕	20.0			口縁端部に平坦面	にぶい黄橙色	微砂粒多く含む	布留甕系
51-5		SD02	土師器	甕	16.9			外／ナデ 内／横削り	にぶい黄橙色	微砂粒多く含む	布留甕系
51-6	51	SD02	土師器	皿 (底部)		15.2		回転糸切り後ナデ 回転ナデ	橙色	密	高台付
51-7	51	SD02	須恵器	接合部				回転ナデ	灰色	密	

挿図番号	図版	出土地点	種別	器種	法量(単位:cm)			形態・調整の特徴	色調	胎土	備考
					口径	底径	器高				
51-8	51	SD02	白磁	椀 (底部)		14.6		断面と高台に刻み目、刃物状の研ぎ痕	灰白色	密	李朝 砥石に転用
54-1	34	SD03	弥生土器	壺	15.8			ラッパ状に開く口縁に5条の凹線 内外／刷毛目	灰黄色	微砂粒多く含む (石英・長石)	松本Ⅳ－2
54-2	34	SD03	弥生土器	壺	19.4			口縁に4条の擬凹線 内／頸部下削り	橙色	微砂粒含む	松本Ⅴ－1
54-3	33	SD03	弥生土器	壺	21.2			口縁に4条の擬凹線、筒状の頸部に櫛状工具による沈線と波状文、頸部下削り	橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	松本Ⅴ－1
54-4	33	SD03	土師器	複合口縁細頸壺	19.6			口縁端部に面、頸部内面になでつけ痕	灰白色	微砂粒少し含む (石英・長石)	頸部に有軸羽状文
54-5	33	SD03	土師器	複合口縁細頸壺	22.9			外／上半は横、下半は縦の刷毛目 内／削り後一部ナデ、頸部に指圧痕	浅黄橙色	微砂粒多く含む (石英・長石・雲母)	頸部に羽状文、下に沈線
54-6	34	SD03	土師器	壺 (口縁部)	9.2			無頸、内面下部削り、体部は張るか、ナデ	にぶい橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	
54-7	34	SD03	弥生土器	甕	16.2			外／縦刷毛目、口縁3条の擬凹線 内／肩部から下削り	淡褐色	微砂粒少し含む	刺突列点文 松本Ⅳ－2
54-8	34	SD03	弥生土器	甕				外／縦刷毛目 内／上半部指圧痕、下半部削り	にぶい黄橙色	微砂粒含む	刺突列点文 松本Ⅳ－2
54-9	34	SD03	弥生土器	甕	13.4			外／ナデ、 内／削り、口縁ミガキ	明褐色	微砂粒少し含む (石英・長石)	刺突列点文 松本Ⅴ－1
54-10	34	SD03	弥生土器	甕	16.7			口縁に3条の擬凹線 内／削り	外／にぶい橙色 内／にぶい褐色	微砂粒多く含む (石英・長石)	スス付着 草田1
54-11	34	SD03	弥生土器	甕	13.6			口縁に3条の擬凹線	にぶい黄橙色色	微砂粒多く含む	スス付着 草田1
55-1	34	SD03	弥生土器	甕	14.4			口縁に擬凹線	外／にぶい橙色 内／橙色	微砂粒含む (石英・長石)	草田1
55-2	34	SD03	弥生土器	甕	16.2			外／ナデ、口縁に甘い擬凹線 内削り	浅黄橙色	微砂粒少し含む	松本Ⅴ－1
55-3	34	SD03	弥生土器	甕	19.0			口縁に貝殻復縁による5条の擬凹線	外／浅黄橙色 内／にぶい橙色	微砂粒含む (石英・長石)	松本Ⅴ－1
55-4	34	SD03	弥生土器	甕	21.4			口縁に貝殻復縁による擬凹線	明赤褐色	微砂粒含む (石英・長石)	草田1
55-5	34	SD03	弥生土器	甕	19.5			拡張した口縁に貝殻復縁による擬凹線	外／浅黄橙色 内／にぶい黄橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	草田3 スス付着
55-6	37	SD03	土師器	甕	14.6			外／胴部は横、下半は縦の刷毛目 内／削り、下部に指圧痕	外／浅黄橙色 内／にぶい橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	肩部に波状文 草田6
55-7	37	SD03	土師器	甕	13.8			外／上半部横刷毛目、 内／削り、器壁薄い	灰黄色	微砂粒含む (石英・長石)	草田6
55-8	36	SD03	土師器	甕	13.8			口縁端部に面 器壁薄い	浅黄橙色	微砂粒含む (石英・長石)	草田6
55-9	35	SD03	土師器	甕	16.0			外／荒い横刷毛目 内／削り、器壁薄い	外／灰白色 内／浅黄橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	刺突列点文 草田6新
55-10	35	SD03	土師器	甕	16.5			外／上半は横、下半は縦の刷毛目 内／削り、肩と下半部に指圧痕	外／浅黄橙色 内／にぶい黄橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	草田6新
56-1	35	SD03	土師器	甕	13.6		14.7	外／胴下半は縦刷毛目、 内／削り、下半部になで上げ痕	浅黄橙色	微砂粒少し含む (石英・長石)	肩部に波状文 胴下半に穿孔
56-2	35	SD03	土師器	甕 (平底)	17.8	8.0	19.1	外／上半は横、下半は斜め刷毛目 内／削り、下半部になで上げ痕	浅黄橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	扁平な底
56-3	35	SD03	土師器	甕	19.0			外／横刷毛目 内／削り、下半に指圧痕、ナデ	外／明褐色 内／淡黄褐色	微砂粒含む (石英・長石)	胴部張る
56-4	37	SD03	土師器	甕	18.0			外／横刷毛目 内／削り、下半部に指圧痕	外／灰白色 内／浅黄橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	
56-5	35	SD03	土師器	甕	15.4			外／上半は横、下半は縦の刷毛目 内／削り、下半に指圧痕	外／にぶい黄橙色 内／灰黄褐色	微砂粒多く含む (石英・長石)	
56-6	36	SD03	土師器	甕	14.6			外／上半は横、下半は縦の刷毛目 内／削り、下半部に指圧痕	にぶい黄橙色	微砂粒含む (石英・長石)	肩部に1cm長の刺突列点文
56-7	36	SD03	土師器	甕	17.2			外／横刷毛目 内／削り、一部にナデ、指圧痕	にぶい黄橙色	微砂粒含む (石英・長石)	肩部に浅い刺突文、スス
57-1	36	SD03	土師器	甕	14.6		24.0	外／横刷毛目 内／削り、ナデ上げ、指圧痕	外／にぶい黄褐色 内／灰白色	微砂粒含む	肩部に2cm長の刺突列点文
57-2	36	SD03	土師器	甕	15.6			外／肩部は縦、胴部は横の刷毛目 内／横削り	外／灰黄色 内／にぶい黄橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	肩部に1cm長の刺突列点文

挿図番号	図版	出土地点	種別	器種	法量(単位:cm)			形態・調整の特徴	色調	胎土	備考
					口径	底径	器高				
57-3	36	SD03	土師器	甕	14.6		21.5	外／胴部は横、下半は縦の刷毛目 内／削り、ナデ上げ、指圧痕、	外／浅黄色 内／にぶい黄橙色	微砂粒含む (石英・長石)	肩部に刺突列点文、
57-4	36	SD03	土師器	甕	13.7			外／肩部は縦、胴部は横の刷毛目 内／削り、一部ナデ	浅黄橙色	微砂粒含む (石英・長石)	肩部に刺突列点文
57-5	36	SD03	土師器	甕	16.6			外／縦後横の刷毛目 内／横削り後、ナデ付け、指圧痕 口縁端部は外側に肥圧	にぶい黄橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	肩部に刺突列点文、ススス
57-6	36	SD03	土師器	甕	17.4			外／胴部に横刷毛目 内／横削り、指圧痕	浅黄橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	肩部に１条の櫛描き沈線
57-7	36	SD03	土師器	甕	18.2			外／横刷毛目 内／削り、頸部下に指圧痕	にぶい黄橙色	微砂粒含む	肩部に波状文 ススス付着
57-8	40	SD03	土師器	甕	14.2			外／縦後、横刷毛目 内／上半は横、下半は斜めの削り	外／浅黄橙色 内／にぶい黄橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	肩部に刺突列点文
58-1	37	SD03	土師器	甕	13.8			外／縦刷毛目、 内／横削り、頸部に指圧痕 甘い複合口縁	にぶい黄橙色	微砂粒少し含む (石英・長石)	頸部下に列点 小谷２～３
58-2	37	SD03	土師器	甕	22.0			外／風化のため不明 内／横削り、口縁肥圧	外／灰白色 内／にぶい黄橙色	微砂粒含む (石英・長石)	
58-3		SD03	土師器	内傾口縁甕	11.4			外／横刷毛目 内／削り、頸部にナデとミガキ	浅黄橙色	微砂粒含む (石英・長石)	肩部に６点の刺突列点文
58-4	37	SD03	土師器	内傾口縁甕	13.2			外／風化のため不明、 内／横削り	灰白色	微砂粒多く含む (石英・長石)	肩部に波状文？
58-5	37	SD03	土師器	内傾口縁甕	11.4			外／横刷毛目 内／横削り	にぶい黄橙色	微砂粒少し含む (石英・長石)	
58-6	37	SD03	土師器	甕	15.4			外／横刷毛目、 内／横削り、口縁端部を引き上げ	浅黄橙色	微砂粒少し含む	布留甕系
58-7	37	SD03	土師器	甕	16.8			外／刷毛目 内／横削り、小塩端部に面	外／浅黄橙色 内／灰白色	微砂粒少し含む (石英・長石)	布留甕系
58-8	37	SD03	土師器	甕	17.4			外／縦刷毛目後、横ナデ 内／横削り	浅黄橙色	微砂粒含む	単純口縁 布留１併行
58-9	38	SD03	土師器	ミニチュア甕	10.0			外／横＋縦刷毛目、指圧痕 内／削りとナデ付け	外／浅黄橙色 内／にぶい黄橙色	微砂粒含む (石英・長石)	手捏
58-10	38	SD03	土師器	小型壺				外／横ミガキ 内／削り	外／橙色 内／淡黄色	微砂粒少し含む	赤色塗彩
58-11	39	SD03	土師器	大型鉢	29.8	9.7	22.0	外／胴部は横、下半は縦の刷毛目 内／上半は横、下半は縦の削り 平底／刷毛目	浅黄橙色	微砂粒多く含む (石英・長石) ややもろい	
59-1	37	SD03	土師器	鉢				外／ナデ 内／削り後ナデ	外／灰黄色 内／褐色	微砂粒多く含む	漆塗り
59-2	37	SD03	土師器	甕 (肩部破片)				外／刷毛目、敲き痕有り 内／刷毛目	外／浅黄橙色 内／淡黄色	微砂粒多く含む (石英・長石)	庄内甕系
59-3	38	SD03	弥生土器	甕or壺 (底部)		7.4		外／縦刷毛目 内／縦ミガキ	外／にぶい黄橙色 内／にぶい橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	
59-4	38	SD03	土師器	甕 (胴下半部)				外／上部に横刷毛目 内／削り、指圧痕、焦げ痕有り	外／黒色 内／にぶい黄橙色	微砂粒少し含む	ススス付着
59-5	38	SD03	土師器	甕or鉢 (底部)		12.0		外・底／刷毛目 内／削り、指圧痕、器壁薄い	外／灰白色 内／浅黄橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	平底
59-6	39	SD03	土師器	坏	12.6	2.3	5.1	外／刷毛目、底面は削り 内／刷毛目、底部窪む、器壁薄い	淡黄褐色	微砂粒含む (石英・長石)	制作途中か
59-7	39	SD03	土師器	坏	11.6	2.4	4.2	外／刷毛目、底面は削り後ナデ 内／ナデ	外／にぶい橙色 内／浅黄橙色	微砂粒含む (石英・長石)	
59-8	39	SD03	土師器	坏	10.5	2.3	4.2	外／ミガキ後ナデ 内／ナデ、底面は削り後ナデ	にぶい黄橙色	微砂粒含む	
59-9	39	SD03	土師器	坏	8.8		2.4	外／刷毛目、指圧痕 内／ミガキ	外／灰白色 内／浅黄橙色	微砂粒若干含む	畿内系？
59-10	39	SD03	土師器	高坏 (坏部)	22.1			外／上部はミガキ、下部は刷毛目 内／ミガキ	外／浅黄橙色 内／にぶい黄橙色	微砂粒少し含む (石英・長石)	円盤充填
59-11	39	SD03	土師器	高坏 (坏部)	13.6			外／細かなミガキと刷毛目 内／細かなミガキ	にぶい黄橙色	微砂粒含む (白色砂)	円盤充填
59-12	39	SD03	土師器	高坏 (坏部)	11.3			外／ミガキ後ナデ 内／ミガキ、ナデ	灰白色	微砂粒多く含む	円盤充填 畿内系
59-13	40	SD03	土師器	高坏 (脚部)		12.2		外／刷毛目 内／削り	淡黄色	微砂粒多く含む (石英・長石)	
59-14	40	SD03	土師器	高坏 (脚部)		14.8		外／刷毛目 内／削り、裾部は刷毛目	にぶい黄橙色	微砂粒含む (石英・長石)	円形透かし 円盤充填

挿図番号	図版	出土地点	種別	器種	法量(単位:cm)			形態・調整の特徴	色調	胎土	備考
					口径	底径	器高				
59-15	40	SD03	土師器	高坏(脚部)		9.8		外／縦ミガキ 内／削り	浅黄橙色	微砂粒含む	
59-16	40	SD03	土師器	高坏(脚部)		10.6		外／縦刷毛目 内／削り、ナデ	にぶい黄橙色	微砂粒含む	畿内系
59-17	40	SD03	土師器	高坏(脚部)		17.2		外／刷毛目 内／刷毛目、低い	明橙褐色	微砂粒若干含む	搬入品
59-18	40	SD03	土師器	高坏(脚部)		11.4		外／刷毛目 内／削り後ナデ、低い	浅黄橙色	微砂粒少し含む(石英・長石)	内面に２条のヘラ記号
59-19	41	SD03	土師器	低脚坏(坏部)	19.3			外／細かなミガキ 内／ナデ、低く開く	外／浅黄橙色 内／灰色	微砂粒含む(石英・長石)	一部スス付着
59-20	41	SD03	土師器	低脚坏	18.4	6.7	5.7	外／横刷毛目後、縦ミガキ 内／横刷毛目後、縦ミガキ 脚内／削り	にぶい黄橙色	微砂粒含む石英・長石	
59-21	41	SD03	土師器	低脚坏	17.6	4.7	5.4	外／ナデ 内／回転ナデ 脚／ナデ	外／浅黄橙色 内／橙色	微砂粒含む(石英・長石)	一部スス付着
59-22	41	SD03	土師器	小型低脚坏	12.0	4.6	4.2	外／刷毛目後、ミガキ 内／ミガキ	浅黄橙色	密　微砂粒少し含む	
59-23	41	SD03	土師器	小型低脚坏	8.8			外／ナデ後、縦横のミガキ 内／横刷毛目後、縦ミガキ	にぶい黄橙色	微砂粒少し含む(石英・長石)	布留１併行
59-24	41	SD03	土師器	低脚坏				外・内／ナデ 内湾する体部	浅黄橙色	微砂粒多く含む	
59-25	41	SD03	土師器	低脚坏(脚部)		5.9		外・内／ナデ	にぶい黄橙色	微砂粒少し含む	
60-1	38	SD03	弥生土器	器台(受部破片)				外／ナデ、口縁に４条の擬凹線 内／ナデ	外／浅黄橙色 内／灰黄褐色	微砂粒多く含む	赤色塗彩 松本Ｖ－１
60-2	38	SD03	弥生土器	器台(受部)	21.0			外／ナデ、口縁に擬凹線 内／ミガキ	明黄褐色	微砂粒多く含む	赤色塗彩 松本Ｖ－２
60-3	38	SD03	弥生土器	鼓形器台(受部)	21.4			外／ナデ、口縁に擬凹線 内／ナデ	淡褐色	微砂粒少し含む	赤色塗彩 松本Ｖ－２
60-4	38	SD03	弥生土器	鼓形器台(脚部)		17.4		外／口縁に擬凹線 内／削り、ナデ	淡褐色	微砂粒少し含む	赤色塗彩 松本Ｖ－２
60-5	38	SD03	土師器	鼓形器台		17.8		外／ナデ 内／受部はナデ、脚部は削り	浅黄橙色	微砂粒含む	脚内面に２条のヘラ記号
60-6	41	SD03	土師器	鼓形器台	19.4	19.0	10.8	外・内／横ナデ 口縁端部に面	浅黄橙色	微砂粒含む	
60-7	42	SD03	土師器	鼓形器台	22.0	18.0	10.8	外／横ナデ 内／受部は横ミガキ、脚部は削り	浅黄橙色	微砂粒含む	
60-8	42	SD03	土師器	鼓形器台	20.5	16.2	10.1	外／横ナデ 内／受部は横ミガキ、脚部は削り	浅黄橙色	微砂粒多く含む(石英・長石)	
60-9	42	SD03	土師器	鼓形器台	20.3	18.0	10.3	外／横ナデ 内／受部は削り後ナデ、脚部は削り、筒部は鋭角に屈曲	外／浅黄橙色 内／にぶい橙色	微砂粒含む(石英・長石)	
60-10	42	SD03	土師器	鼓形器台	20.8	17.5	9.8	外／横ナデ 内／受部は横ミガキ、脚部は削り	にぶい黄橙色	微砂粒含む(石英・長石)	脚部に円形透かし
60-11	42	SD03	土師器	注口土器(注口部)	1.9			刷毛目 ナデ	灰黄褐色	微砂粒多く含む	
63-1	43	SD04	弥生土器	甕	12.8			外／ナデ 内／横ミガキ	外／にぶい黄褐色 内／にぶい黄橙色	微砂粒含む	肩部に刺突列点文
63-2	43	SD04	弥生土器	壺	14.8			外／ミガキ、口縁に３条の擬凹線 内／頸部はミガキ、以下削り	暗赤色	微砂粒少し含む(石英・長石)	赤色塗彩 松本Ｖ－１
63-3	43	SD04	弥生土器	甕	15.6			外／ナデ、口縁に２条の擬凹線 内／削り	外／灰褐色 内／にぶい褐色	微砂粒含む(石英・長石)	松本Ｖ－１
63-4	43	SD04	弥生土器	甕	15.4			口縁に３条の擬凹線 内／削り	橙色	微砂粒少し含む	松本Ｖ－１
63-5	43	SD04	弥生土器	甕	19.6			外／横刷毛目 内／横削り、口縁は長く外反	外／浅褐色 内／淡黄褐色	微砂粒含む(石英・長石)	草田５
63-6	44	SD04	土師器	甕	16.6			外／横刷毛目 内／横削り	外／浅黄橙色 内／黄橙色	微砂粒多く含む(石英・長石)	
63-7		SD04	土師器	甕	15.2			外／横刷毛目 内／横削り、胴部に指圧痕	外／淡黄褐色 内／淡褐色	微砂粒多く含む(石英・長石)	肩部に波状文
63-8	44	SD04	土師器	内傾口縁甕	12.4			外／横刷毛目 内／横削り	にぶい黄橙色	密 微砂粒少し含む	肩部に刺突列点文
63-9	44	SD04	土師器	壺(胴部)				外／上半は横、下半は縦の刷毛目 内／上半は横、下半は縦の削り	浅黄橙色	微砂粒多く含む(石英・長石)	肩部に有軸羽状文
64-1	43	SD04	土師器	甕	20.8			外／縦刷毛目 内／削り、ナデ	外／浅黄橙色 内／灰黄色	微砂粒含む	布留甕系

挿図番号	図版	出土地点	種別	器種	法量(単位:cm)			形態・調整の特徴	色調	胎土	備考
					口径	底径	器高				
64-2		SD04	土師器	甕	17.9			外／縦刷毛目 内／横削り	浅黄橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	布留甕系
64-3	43	SD04	土師器	甕	17.5			外／縦刷毛目 内／右上がりの削り	外／浅黄橙色 内／にぶい橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	布留甕系
64-4		SD04	土師器	甕	16.1			外／縦刷毛目 内／横削り	外／橙色 内／にぶい黄褐色	微砂粒多く含む (石英・長石)	布留甕系
64-5	44	SD04	土師器	甕 (胴部)				外／縦刷毛目 内／削り、指圧痕	外／にぶい黄橙色 内／にぶい橙色	微砂粒含む	痕跡的平底
64-6	43	SD04	弥生土器	甕 (底部)		7.8		外／縦刷毛目 内／ナデ	外／にぶい黄橙色 内／灰白色	微砂粒含む (石英・長石)	
64-7	45	SD04	土師器	高坏 (脚部)		14.8		外／上部は刷毛目、裾部はミガキ 内／上部は削り、裾部は刷毛目	淡灰褐色	微砂粒多く含む (石英・長石)	3方に円形透かし
64-8	43	SD04	土師器	高坏 (脚部)		15.0		外／刷毛目 内／刷毛目	浅黄橙色	微砂粒含む (石英・長石)	円形透かし
64-9	43	SD04	土師器	低脚坏 (脚部)		6.2		外／ナデ 内／ミガキ	外／浅黄橙色 内／にぶい黄橙色	微砂粒含む (石英・長石)	脚内面にヘラ記号
64-10	45	SD04	土師器	鼓形器台		18.0		外／横ナデ 内／受部はナデ、脚部は削り	淡褐色	密 微砂粒含む	
66-1	巻頭4 46	SD05	土師器	壺	16.0	6.0	35.4	外／口縁部はナデ、肩～胴部は横、下半は縦の刷毛目、底部は刷毛目 内／口縁部にナデ付け痕、肩～部は横削り、下半は斜めの削りにナデの指圧痕、底部	外／浅黄色 内／にぶい黄色	密 微砂粒少し含む (石英・長石)	ほぼ完形 小谷2
71-1	45	SD10	須恵器	小型坏	8.1	5.0	3.4	ヘラ切り後ナデ 回転ナデ	灰色	密	出雲6
71-2	45	SD10	須恵器	坏	13.0	8.0	4.6	回転糸切り 回転横ナデ	青灰色	密	高台付 出雲7
71-3	45	SD10	土師器	小型鼓形器台(脚部)		11.4		外／横ナデ 内／削り	にぶい橙色	密 微砂粒少し含む	径1cmの円形透かし
71-4	45	SD10	土師器	甕	22.2			外／横ナデ 内／横削り	にぶい黄橙色	微砂粒含む (石英・長石)	
71-5	45	SD10	須恵器	坏 (底部)		8.8		回転糸切り無調整 ナデ	灰色	密	
73-1	46	SD13	土師器	甕	14.7			外／横刷毛目 内／横削り	外／にぶい黄橙色 内／にぶい橙色	微砂粒含む (石英・長石)	
73-2	46	SD13	土師器	甕 (口縁部)	16.0			外／ナデ 内／ナデ	にぶい黄橙色	微砂粒少し含む (石英・長石)	
73-3	46	SD13	土師器	甕	14.2			外／ナデ 内／削り	外／にぶい黄橙色 内／浅黄橙色	微砂粒少し含む (石英・長石)	
73-4	46	SD13	土師器	甕 (胴部)				外／縦後横刷毛目 内／横削り	暗黄褐色	密 微砂粒少し含む	
73-5	46	SD13	土師器	高坏 (坏部)	11.3			外／上半はナデ、下半は細ミガキ 内／横刷毛目	外／にぶい黄橙色 内／浅黄橙色	微砂粒少し含む (石英・長石)	ワイングラス型、円盤充填
73-6	46	SD13	土師器	鼓形器台 (受部)		23.6		外／横ナデ 内／ナデ	淡橙褐色	微砂粒少し含む (石英・長石)	
73-7	46	SD13	土師器	高坏 (脚部)		17.8		外／ナデ 内／刷毛目	浅黄橙色	密	畿内系
73-8	46	SD13	土師器	低脚坏 (脚部)		7.0		外・内／ナデ	外／灰白色 内／浅黄橙色	微砂粒含む (石英・長石)	
74-1	45	SD14	土師器	製塩土器	12.4			外／指頭痕、ひび割れ 内／横ナデ	橙色	精製土	
76-1	48	遺構外	弥生土器	甕	18.8			外／口縁に3条の擬凹線、沈線と爪形の刺突列点文	赤褐色	微砂粒含む (石英・長石)	塩町系
76-2		遺構外	土師器	甕	14.6			外／横刷毛目 内／横削り、一部ナデ付け	外／にぶい黄橙色 内／浅黄橙色	微砂粒含む (石英・長石)	
76-3	47	遺構外	土師器	甕	17.2			外／細・荒横刷毛目 内／削り、一部ナデ	灰白色	微砂粒多く含む (石英・長石)	
76-4	47	遺構外 B9Gr	土師器	甕	15.2			外／横刷毛目 内／削り、肩部に指圧痕	浅黄橙色	微砂粒含む (石英・長石)	肩部に波状文
76-5	47	遺構外 C11Gr	土師器	内傾口縁甕	13.5			外／横刷毛目 内／横削り	浅黄橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	
76-6	47	遺構外 E11Gr	土師器	内傾口縁甕	18.1			外／縦＋横刷毛目 内／削り	外／浅黄橙色 内／にぶい黄橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	
76-7	47	遺構外 E11Gr	土師器	甕	16.4			外／ナデ 内／削り	黄褐色	微砂粒含む (石英・長石)	布留甕系
76-8	50	遺構外	土師器	ミニチュア壺(底部)		3.0		外／ナデ 内／削り	外／にぶい黄褐色 内／橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	スス付着

挿図番号	図版	出土地点	種別	器種	法量(単位:cm)			形態・調整の特徴	色調	胎土	備考
					口径	底径	器高				
76-9	48	遺構外 D11Gr	土師器	甕or壺 (底部)				外／ナデ 内／指圧痕	浅黄橙色	密 微砂粒少し含む	半月状の線刻
76-10	47	遺構外 D9Gr	土師器	直口壺 (口縁部)	10.0			外・内／横ナデ 稜は鈍い	外／灰白色 内／浅黄橙色	微砂粒含む (石英・長石)	
76-11	48	遺構外	弥生土器	壺 (頸～胴部)				外／刷毛目、頸部に沈線 内／縦刷毛目、上半に指圧痕	外／にぶい黄橙色 内／黄灰色	微砂粒多く含む (石英・長石)	
76-12	48	遺構外	弥生土器	脚付小型甕				外／胴部に刷毛目、他は横ミガキ 内／削り、ナデ、指頭痕	にぶい黄橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	
76-13	47	遺構外 F12Gr	土師器	坏	15.0			外／ナデ 内／ナデ、上半に指圧痕	外／浅黄橙色 内／にぶい橙色	微砂粒含む	ワイングラス型
77-1	48	遺構外 D11Gr	土師器	高坏	21.5	13.4	13.1	外／坏部は不明、脚部は縦ミガキ 内／坏部はミガキ、脚部は削り	浅黄橙色	微砂粒多く含む	
77-2	48	遺構外	弥生土器	器台 (受部)	16.6			外／縦ミガキ、筒部に櫛状の沈線 内／ミガキ、筒部は削り後ナデ	外／橙色 内／にぶい橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	松本Ｖ－２
77-3	48	遺構外 D10Gr	弥生土器	器台 (受部)				外・内／ナデ 口縁に擬凹線文	外／にぶい褐色 内／にぶい黄橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	赤色塗彩 松本Ｖ－２
77-4	49	遺構外 D11Gr	土師器	鼓形器台 (受部)	21.8			外／横ナデ 内／ナデ	淡黄褐色	微砂粒含む	
77-5	49	遺構外 D11Gr	土師器	鼓形器台 (脚部)		15.8		外／横ナデ 内／削り	橙色	やや荒い砂粒多く含む	非在地産
77-6	48	遺構外 D11Gr	土師器	鼓形器台	18.9	17.9	9.7	外／横ナデ、縦ミガキ 内／受部は横ミガキ、脚部は削り	外／黄橙色 内／浅黄橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	四方に円形透かし
77-7	50	遺構外 A3Gr	土師器	甑型土器？ (突帯部)				外／横刷毛目、ナデ 内／削り	にぶい黄橙色	微砂粒若干含む (石英・長石)	
77-8	48	遺構外 D10Gr	土師器	取っ手				削り、刷毛目、ナデ 一部に指圧痕	灰黄褐色	微砂粒含む	
77-9	49	遺構外 B9Gr	須恵器	蓋		12.2	3.0	天井部は削り後ナデ	灰色	密	擬宝珠状摘み 高広Ⅳ－Ｂ
77-10	49	遺構外	須恵器	蓋		18.3		天井部は削り後ナデ 回転ナデ	灰色	密	擬宝珠状摘み
77-11	49	遺構外 A4Gr	須恵器	蓋		14.1	3.9	天井部は削り 回転ナデ	灰色	密 微砂粒多く含む	輪状摘み
77-12	49	遺構外	須恵器	蓋		15.2	2.6	天井部は削り後ナデ 回転ナデ	黄灰色	密	輪状摘み
77-13	49	遺構外	須恵器	蓋				天井部は削り 回転ナデ	灰色	密	輪状摘み
77-14	49	遺構外 B.C3.4Gr	須恵器	小型坏	11.4		2.9	底部はヘラ切り 回転ナデ	灰色	密	
77-15	49	遺構外 A3Gr	須恵器	坏	13.9		4.6	回転糸切り 回転ナデ、口縁端部を屈曲	外／にぶい橙色 内／にぶい赤褐色	密 微砂粒若干含む	
77-16	49	遺構外	須恵器	坏		10.8		回転糸切り 回転ナデ	灰緑色	密 微砂粒少し含む	貼付高台付 石見系
77-17	49	遺構外	須恵器	坏	10.8	7.8	4.4	回転糸切り 回転ナデ	灰白色	密 微砂粒少し含む	
78-1	50	遺構外 B7Gr	土師器	製塩土器	11.5			外／指圧痕 内／細かな布目痕、器壁薄い	浅黄橙色	精製土	口縁端部尖る
78-2	50	遺構外	土師器	製塩土器	12.4			外／弱い指圧痕 内／ナデ、器壁薄い	にぶい橙色	精製土	口縁端部丸い
78-3	50	遺構外 12Gr	土師器	製塩土器	8.4			外／指圧痕 内／指ナデ痕、器壁厚い	浅黄橙色	微砂粒含む (赤褐色粒混)	口縁端部丸い
78-4	50	遺構外	土師器	製塩土器	8.0			外／指圧痕、ひび割れ 内／指横ナデ痕、器壁厚い	浅黄橙色	精製土	口縁端部上に刻み目
78-5	50	遺構外	土師器	製塩土器	10.0			外／指圧痕、器壁厚い 内／指横ナデ痕	外／にぶい橙色 内／にぶい黄橙色	精製土	口縁端部平坦
78-6	50	遺構外	土師器	製塩土器	10.8			外／指圧痕、器壁厚い 内／ナデ	外／灰黄褐色 内／浅黄橙色	精製土	口縁端部平坦
78-7	50	遺構外	土師器	製塩土器	10.0			外／指圧痕、器壁厚い 内／指横ナデ痕	浅黄橙色 一部橙色	精製土	口縁端部尖り気味
78-8	50	遺構外 F13Gr	土師器	竈 (庇部破片)				外／ナデ 内／削り	にぶい黄橙色	微砂粒多く含む (石英・長石)	
78-9	50	遺構外 A3Gr	土師器	竈 (底部破片)				外／荒い縦刷毛目、ナデ痕 内／荒い削り	橙色	微砂粒含む	

出土遺物観察表（土製品）

挿図番号	図版	出土地点	種別	法量(単位:cm、g)							色調	胎土	備考
				長	巾	高	底径	断面径	孔径	重量			
7-7	23	SI01	土製支脚(脚部)				11				にぶい黄橙色	微砂粒含む	削り後、ナデ
16-2	23	P0422	土製支脚(受部)				11				にぶい黄橙色	微砂粒含む	スス付着
41-10	28	SK10	土錘	2.5(残存)				2.1	0.07		橙色		
60-12	42	SD03	取手(?)					2.2	0.04				高坏の充填部を転用？ 中央に穿孔
60-13	巻頭4 42	SD03	不明		2.8	3.6				28	橙色	精製土	底に径7㎜の凹み 桃の実、または杏の種か？
78-10	50	遺構外	土製支脚(受部)	8				5.1			にぶい黄橙色	精製土	全体に指圧痕
78-11	50	遺構外	土製支脚(受部)	6.7				4.2			にぶい黄橙色	精製土	全体に指圧痕
78-12	50	遺構外	土製支脚(脚部)			11	9.8				外/灰黄褐色 内/にぶい黄橙色	精製土	全体に指圧痕 半球状に底を削る
78-13	50	遺構外(A2Gr)	土錘	4.2(残存)				1.9	0.06		にぶい橙色		
78-14	50	遺構外(A3Gr)	羽口					7.5(推定)			橙色		

出土遺物観察表（石器）

挿図番号	図版	出土地点	種別	材質	法量(単位:cm、g)						備考
					最大長	最大幅	最大厚	外径	孔径	重量	
35-7	25	SK07	磨製片刃石斧	流紋岩	8.5	8.6	3			189	銀杏の葉形 SK03からの混入と考えられる
35-8	26	SK07	砥石	流紋岩	3.8	10.4	6.6			383	
46-12	30	C11Gr土器溜り	砥石	きめ細かな砂岩	6	5.6	2.8			136	SD01の砥石と接合 割れた後、廃棄されたと思われる。
50-5	51	SD01	砥石	きめ細かな砂岩	6.6	5.2	3.5			141	C11Gr土器溜りの砥石と接合、SD04からの混入の可能性
60-14	42	SD03	敲石	安山岩質凝灰岩	11.7	8.6	5.1			810	
71-6	41	SD12	砥石	流紋岩	9	7.8	4.2			487	
73-9	41	SD13	石錘	流紋岩	11.8	9.4	3.5			623	
78-16	50	遺構外	砥石	砂岩	7.6	6	4.2			235	
78-17	50	遺構外	砥石	砂岩	6.1	4.1	2.9			100	
78-18	50	遺構外	砥石	泥岩？	7.4	4.7	3.8			242	

出土遺物観察表（鉄製品・古銭・その他）

挿図番号	図版	出土地点	種別	材質	法量(単位:cm、g)				備考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
27-5	46 51	SX01	古銭	銅	2.1	2.5			12枚が束ねられた状態で出土 年代不明
38-3	25 51	SK09	平釘or鋲	鉄	6.7	2.1	1.2	20	
51-9	51	SD02	刀子？	鉄	11.2	1.7	1	18	
78-15	51	遺構外	不明	鉄	7.1	2.6	1.6	35	

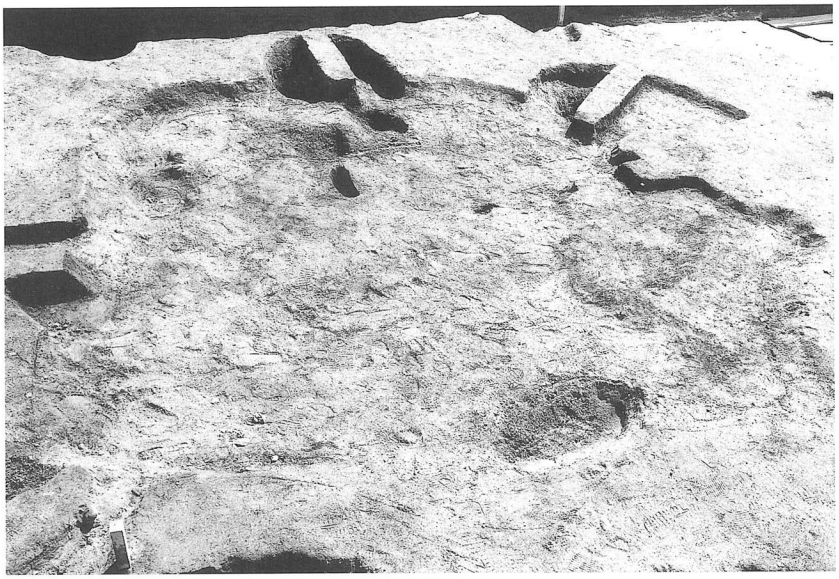
図　　版

調査前状況（東側）南から

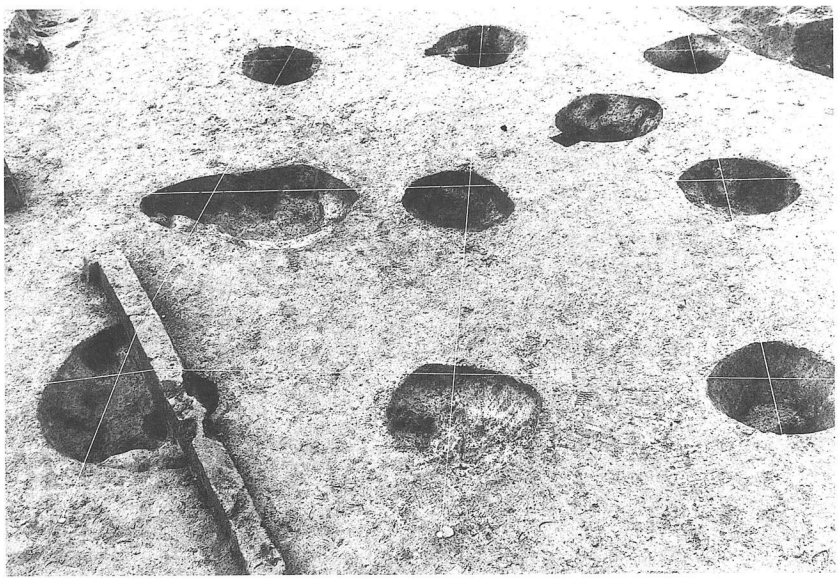
調査状況（第３次調査区から第４次調査区を望む）

図版2

SI01調査状況(東から)

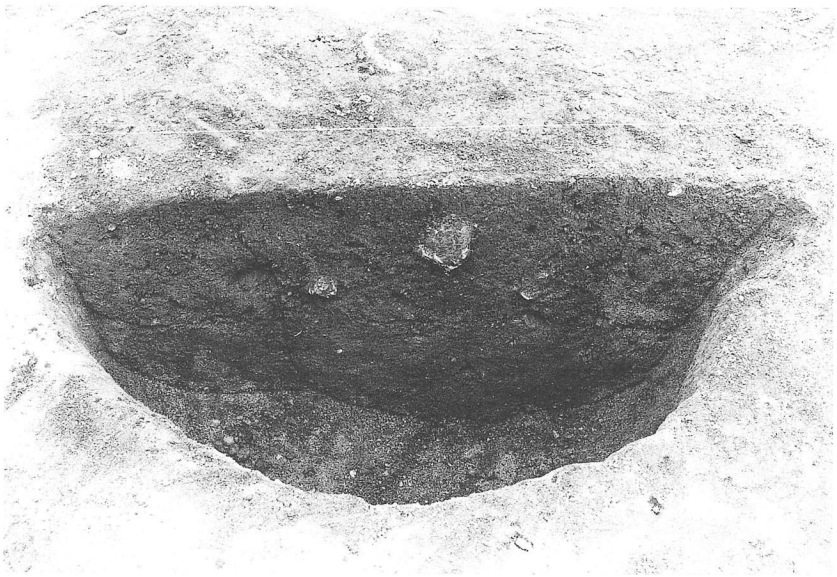


SI01(北から)



SB01(南から)

SB02検出状況(南から)



SB02ピット土層断面

SB02(南から)